

明日の光

スノーズ☆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは作者の語彙力と国語力が足りずにグダグダになりつつもメタとやる気、期限と戦い続ける作者が作者のやりたいことを詰め込もうとしている小説。

期限には結構負けているがそれでも頑張ろうとしている作者

どのくらいグダグダかと言うと初回投稿時に主人公の性別が決まってないほど……

あらすじから本編関係ないことから内容は察しつつ読んで欲しいです

では主人公さんが明日を生きる為に狂った世界でのびのびと（大嘘）暮らすお話です

12/22日話を少し変えました（多分分からない）2話目以降も少しづつ読みや

すいように変えていけたらなと思っております。内容をそんなに大きく変える訳では

無いので気にしすぎないで貰えると嬉しいです

と言ってから4ヶ月後の4月旧11話と旧12話、旧13話と旧14話、旧15話と旧16話、旧17話と旧18話を統合しましたそして統合した旧15話旧16話の題名変更を致しました

大変ご迷惑おかけしました

目次

プロローグ	1
プロローグ 2	7
プロローグ 3	12
プロローグ 4	18
伝説の始まり	
伝説は始まった	25
タダ飯ほど最高なものはない	31
焼き鳥って美味しいよね？よね？	36
トラブル	43
敵キャラが書きにくくて辛い回	
48	
技名決めるの辛くね？の回	54
タイトル考えるのが1番めんどいこと	
に気づいた回	59
つなぎ	69
燃える男	80
悪ガキ3人	89
能力者	101
マヤ	107
別れ	115
メモ1ページ目	120
ヴィレイミヤ	
ヴィレイミヤ	130

交流	138
リーダー	146
ビックリ箱人間	152
根っこ	161
渦潮	167
二兎追うものはなんとやら	173
その時電流走る	178
くつ勝てないかもしれない…なら私は勝つためにただひたすらとお前の嫌なことをするぞボケエ!	186
焼きウサギ	193
閑話	219
クリスマスが今年“は”	199
やってくる	199

シャス&ソルトVSマシクト	212
日常	218
日常2	225
日常3	231
日常4	238
苦行	245
閑話2	252
ウアレんテイヌス	252
増殖	266
合流	273
必死	282
走馬灯	291
生と死	300

ロマンス ドーン	世界の甲板から vol. 1	船出	離脱	4年間
357	347	334	320	310

プロローグ

朝目が覚めると同時に私は思ういや、朝かどうかは知らないが。知らない天井、知らない部屋、知らないこの空間。それにしても何がどうなってるか分からない。

「……は誰私は何処」

私はポツリとそうつぶやこうとした。こういう時の決まり文句だったはずだ

そう言うと同時に、いや、正確には言えていないことに気づく。というか私はどうしても周りが見渡せない。謎の脱力感の元私は頭を捻りいや捻れないのだが考えを張り巡らせる周りはどうなっているのか？都会暮らしの私にしては見慣れない木造の部屋。どこからか雨の音なのか水の音がともうるさい。他に聞こえるものとは……

泣き声なのか？どこからが聞こえてくる。いや自分からなのか？どういうことなのかわからん。わかるやつがいるのなら今すぐここに来い！そして説明プリーズ！

と1人で茶番を繰り返すことはや10分いや正確には1分ないがそんな些細な事はどうでも良いだろう。今の私にそんなことはどうでも良い。割と真面目に何かかわらないと言いたいがそろそろ進まないと怒られそうなので真面目に行こう

まず自分がこの泣き声を出していることは確定で良いだろう。いい歳をしてこんな

に泣いてしまっているのは気に入らないが

今サラツといい歳をしようと云ったが私は何歳だったのだろうか……

今少し考えてみたのだが全く検討がつかない

何歳だったのだろうか。それとも私は男の子だったのだろうか？それとも女の子だったのだろうか

そもそも男の子女の子などと云える程の歳をしていたのだろうか

そこを考えても仕方が無いか

残念ながら私にはどこぞの主人公達のような理解力がないのでな。こうゆう時には昔を思い出すことが良いのだろうかまあ暇だしそうすることにしよう

あれはある冬の日……いや夏だったか最後の私の記憶だろうかそれ……と言っても私の頭の中では思いたせないそもそも“私”というのは何なのだろうか

ここまで1500字程使っておいて全く進んでいない。ヤバいのだろうか“私”は悪くない全ては作者の国語力が悪いのだ

……作者って誰だ？今頭に出てきたから言ってみ……考えてみたが作者ってほんと誰だ？

色々ありすぎて疲れてるのかもしれない

話を戻すでしょうか

つまり「私」は今なんやかんやでよく分からんこの傾いている部屋にいて　ん
？傾いてる？落ちるっつーの！無理無理無理動け私の体このよくわからん空間から抜
けろっ！

壁が横になってくるってどうゆう事だよ！壁に立てってか？とりあえず行動あるの
み！壁に飛び乗ってやる！

あ、体動かないんだった

嫌だア死にたくなあーい死にたくなあーい

~~~~~

こうして名も無き少年？の物語は終わってしまったのでした。

でめたしでめたし

~~~~~

つつつて死ぬるかポケエエエ!!!

はーい名も無きものでーすハハッここ何処だよ

あー見た感じ浜辺か？これ

あー体動かねえだるーい

はい状況説明イエーイ パチパチパチー

なんやかんやの超展開、初回だから許してよう

はあ私の人生先が思いやられる

それにしても体が小さくなったというか体そのものが入れ替わった感じがするな。自分の姿が見えないから深くは言いきれないけど体を感じる違和感？的なものでこれまで使ってきたものとは違う気がするのだ

まだ体を動かすことは出来ない

体はまだまだダルいがかし逆に頭はスッキリとしている

もし私が転生のような形でうわれかわったとしたのなら誰かから生まれたのか？それとも自然に発生したのか？

多分前者だと思う。なぜなら私は今ゆりかごらしきものの中に入っている

気がついた時には入ってなかったはずだが傾いている時に私を産んだのであろう人物が入れたのだろうか？それとも周りの人か？それはどうでもいいか

どうであれゆりかごという人工物に入れられているということは何らかの人為的なものの手が加わっているということだ

そうだよね？謎の力が起こった！的なものじゃないよね？それだったらもうお手上

げよ？

誰かから生まれたということは今の私は赤ん坊ってことか

ん？無力な赤ん坊を海に流したってことだろ？狂ってるのかよ。つうかあそこ船だったのかよ（今更感）

辛み

私生きてたの奇跡じゃねえの？

というかもしかしなくてもこれ詰んでる？ハハッうえーい…笑えねえ

どうしようもう無理じゃねえの？

いや私はこんなところで死にたくないーもつと生きてやるんだあ死ぬ時はベッドの上で安らかに息を引き取ってやるんだこんなところで死ねない死にたくない死ぬ訳には行かない

こんな理不尽なことがあってたまるものか！私はこの世界で絶対に生き残ってやるんだ！

という訳でヘルプミー誰か助けてー

あ、喋れないんだった

プロローグ2

前回のあらすじく左上のボタンを押すべし（唐突な広告）

side???

やつほー前回名前すらなかったやつだよ

ちなみに今回もないらしいね

おかしくない？曲がりなりにも主人公さんよ？多分。自信ないけど

主人公って柄じゃないし

分かりづらいし名無しなので名無しのななさんなんてどうでしょう？これは重要じゃないのでどうでも良いのですが

私は今どこにいるのでしょうか？前回なんやかんやで流されていた私でしたがワンワン泣いてる私の元に来たのはガタイのよろしいおじいちゃんでした

あれは幸運だった。人に会うことが出来て。

しかしこのおじいちゃんの話聞くにこの世界では元の世界のような“日本語”と言うような言語ではないと言うことがわかる。たまたまここが外国で他の言語なのかもしれないがそれはないと私は断言できた

そこは転生特権的な何かで喋れるようにして欲しかったと考えてみたがそんなことはすぐに諦めた

分からないことが多いがそのおじいちゃんの見ただけは分かる。いやそのおじいちゃんの隣にももう1人の男の人がいる。

おじいちゃんの方は白髪で白い上着に白いズボン青いネクタイをしめていてマントを背中につけている。顔には左コメカミから左目下にかけて三日月型の縫い傷があったりする。

走っている時に見えたがあれは見たことがある字だったなぜならそこには見慣れた漢字がいや、その字自体はあまり見ることが無いかもしれないが私はその字を読むことができた

まあ読めても喋れないんですけど(笑)

その背中にはでかどかとした字で「正義」と書いてある。この字が背中にあつるということはこの世界には漢字の文化があるのではと言うことがわかる

感じの文化があるなら言語は日本語にして欲しかった…ないものねだりしても仕方がないけどそれくらい言う権利はあるよね?

というかあの背中の中の正義と書いてあるマント?はどうゆう原理で背中にくっついてるのだろうか?ゴムかなんかで肩のところにくっつけているのだろうか。そこは割

とどうでも良いのか？いや良くないが私にはどうでも良い

しかし気になるがこれ以上この話題をしていると何か怒られる気がする。何にしろ
うか？分からないが少し悪寒がしたので話を進めることにするか

隣にいる人は何なのだろうか。この人も「正義」と書いてあるマントをつけている
こと以外には、さっきのおじいちゃんと同じ茶色っぽいような服である

この人らがなんなのか知らないが私にはどうすることも出来ないのだからただその
人らに連れていかれることしか出来ないものであった

誘拐されるなんて初めての経験だね

記憶がないからほんとに初めてかどうかは保証できないけど

にしてもこの人走るのはやいなほんとに人間？私の常識だと人類そんなはやくない
素直にすごいと褒めたいけど今はひとつ言わせて欲しいんだ

私赤ちゃんですけど!!?

…私赤ちゃんなんですけど!!!

普通そんなちびっ子持ってそんな早く走る？おかしくないこの人達

いや、早いことはいいいことだけどね？ちよつと…と…とか結構酔う…オエツ

我慢しないとこれは…人にかけるなんて…最低だから…

sideガープ

儂の名はガープ。この大海賊時代というふぎけた時代が始まってから、いや、始まる前から虫のように湧き続ける海賊共を日々潰してきた

先月も先月とで海賊の発生の抑制と云うことではるばる北にいけどかふぎけたことをセンゴクのパカに言われたので東の海まで孫に会いに行つてやつた

今はその帰りである北は寒いからいやじゃ

そんな帰り道補給の為にとある海軍支部のある島に立ち寄つていた時のこと

「ガープ中将この支部の大佐から補給ならもう少し早くから連絡をと」

「儂はそんなこと知らん！ただそこに支部があつたからよつただけじゃー」

「しかしですね…」

「まあそんな硬いこと言うなボガード。せんべいやるからな？」

「さつき食べ終わつたじやないですか…」

「そうじゃつたそうじゃつた　　ブワツハツハツハ」

「にしてもガープ中将が散歩なんて珍しいですね」

「明らかに話を逸らすなボガードよ。しかし今日は何かこうした方がいい気がするの
な」

「そうですか」

「このような他愛のない会話を繰り広げていたのだが、儂の見聞食に徹々たる反応が

あった。見聞色とは簡単に言うとは相手の行動を読み取ったり、相手の心を読んだり、遠くの人の気配を察する力。極めれば未来視すらも可能とする力

それが見聞食の覇気という力

当然ながら儂はその力を極限まで練り上げてきている

しかしその力を持ってしても反応が薄い。儂の見聞色でこの反応ということとはかなり弱っていることになっているということだ。運が良いことに場所は近く儂は隣のボガードに目だけでサインを送るとそちらに向けて走り出すのであった。

プロローグ 3

side ガープ

儂は走っていた。こんなに早く走るのはいつぶりだろうか。いつも海戦ばかりだったからなのか自分の速度が遅く感じる

儂はそばにいたボガードよりも2、3秒ほど早くその場にたどり着く

するとどうだろうか。そこにあるのは木箱である。その中には1人の赤ん坊が大人しく目を開き、こちらを見てきている

目があつたので笑って頭を少し撫でてやった

赤ん坊がそこら辺に捨てられているということは残念ながらこの世界では珍しくはない

口減らしだとか海賊や商船のものが育てられなくなり捨てて行ったなどのこともある

子供自体が捨ててあることはまだ良い。いや良くは無いのだが。しかしこの子はどうか大體の子はこういう時には泣いているのが一般的だろう。しかしこの子は泣くどころか何かを考えているようにも見える

しかも大きき的に産まれてすぐなのかと言うほどの大ききである。この子がどうい
う経緯でこうなっているのかは置いといてもワシは少し困惑する

この子は捨てられたということを理解しているのかは分からないが必死に生きてい
こうとしている奴の目をしている

人間目でそんなわかるのかと聞かれたならばいと答えるだろう

この子の目には儂が昔腐れ縁だったとある海賊と同じで、何かを必死にやり遂げた
い。そんな想いが伝わってくる

いつも冷静なボガードもこれには多少驚きを隠せていないようにも見える

「どう…しますか？」

「どうと言われてものう…」

少しの間考える。ガープは自身がこんなに考えるやつではないと思いつつも言った
「とりあえず保護ということが良いか」

「そうですね、私もそれで良いと思います」

「じゃこいつ船まで運べ」

「ガープ中将がやるのでは無いのですか…？」

「やじゃめんどくさい」

「全く この人と来たら…」

side ななさん(仮)

どうも名無しの人です分かりずらいですか？なら主人公君です今回も名前ないらしいですよ。何故3話たつても名無しなんだよ

3話つてなんだよ……これももうくどいか

名前何になるか考えてみるかね

うーん何がいいだろう……いざこうやって考えようとすると逆に何も思い浮かばないな……残念無念……また次の機会に……

と頭の中で少しだけ考えている。何故なら私は今とても暇だからです正直いつて何処まで運ばれているのかが分からないのが辛い

まあなんとかなるでしょ(思考放棄)

これまでもこんな適当な感じで何とかなってきたし、これからも平気でしょ(適当)
それに今だけこれからのことを考えたとしてもどうこうできるってわけじゃないしぶつちやけ考えるだけ無駄なのよ

思考を放棄することは数ある選択肢を全て捨てることと等しいとか言うやついるけどさこの状態じゃ考えなくても考えても等しくこれから行く道は1つでしょ

私は今動けないし意思疎通もできないのだからどうしても結果は一緒

考えるだけ無駄ってことだね

暇な時って皆なら何考えるんだろ私は今頑張ってるけど暇つぶししてるけど虚無ってほんと辛いよね

では現場からは以上でした！

sideガープ

犬がトレードマークな自分の船に乗り込み、さつき拾った赤ん坊を医務室に運び異常がないかの検査を受けさせたのだ。そこまではいいのだが

「異常なし、なんならすこぶる元気か」

「それでいいんじゃないですか」

「じゃがのお

木箱の壊れ具合等で漂流だと思われると」

「そう報告書に書いてますね」

「それにしても怪我が無さすぎるの」

「そう報告書に書いてますね」

「むう……考えるのやめた！」

「…」

「決めた！こいつ儂の孫にする」

「また山賊に預けるのですか…？」

「そうなるかのう」

「こんなに小さい子なのでやめといた方が」

「知らん！」

「さすがに少しくらいはご自分で育てられては？」

「やじやめんどくさい」

「この子もガープ中将のことをまじかで見っていた方が海軍に憧れるんじゃないですか？」

「そうかのう…そうじゃ！そうじゃな！そうしよう！」

「本当に大丈夫ですかね？」

「そろそろ補給が終わっても良い頃なんです」

「報告します。補給が完了、また出航準備も終わりました」

「もう終わったのか」

「結構色々ありましたからねえ」

「なんかあったか？」

「貴方孫拾ったじゃないですか」

「あ、そうじゃったの」

「全くこの人と来たら」

「まあ良いもう出航するか」

「そうですね」

とまあこんなことがあり海軍本部に向かい1隻の船が本部に向かい出発するのであつた

プロローグ 4

side 主人公君（仮）

どうも主人公君です今回も名前ないらしいですよ笑ってしまいますね（笑）
前回から今回までの間で何が起きたかというとですね

船が出たあと、どんぶらこどんぶらこ波に揺られながら着いたここは…
何処だここ

あ、でつかくなんか書いてある…

ごめん読めねえ

side ガープ

儂の名はガープじゃ今日は散々な日じゃった

帰ってきたら帰ってきたらでセンゴクのバカに叱られてしまったしな

「それはガープ中将が命令に背いたからでは？」

「儂の心を平然と読むな」

「そうですか」

少し邪魔が入ってしまったが続きといこう

正座して怒られるという小学生並みのものを受けた後、先程行かなかった北に行かないといけないのだがそこは丁重にお断りだわりさせていただいた。ちなみに今は北に向かう船の上である。

その後儂はセンゴクに孫のことを伝えたと快く了承してくれた

「貴方が認めないと仕事しないって言ったからでしょう」

「そうじゃったかのう」

度々心を読んでくるボガードはこれから無視するとしよう

しかし北の海に行くこと自体はいいのじゃがあの子を置いてかないといけないとは
…儂が拾ってきたというのに

それにしてもあの子はセンゴクのバカと一緒に大丈夫だろうか

side 主人公君（仮）

私は私を拾ってくれたおじいちゃんに抱えられつつなんかよく分からない部屋に通
された

その部屋の真ん中にはカモメが頭に止まっているおじいさんがいるではないか

このままだとおじいちゃんとかおじいさんとかでややこしくなるからこっちはカ
モメと呼ぶことにしよう

にしても頭にカモメってどんなファッションセンスだよ

クソダサ……奇抜的なファッションですなw

な
その他の特徴はと言うと……やばいカモメに全部持ってかれた。こいつなかなかやる

無いと思うけどこいつと対戦でもしようならその見た目で笑わされて苦戦間違いなしだね

服は多分拾ってくれた方のおじいちゃんと同じかな

座ってるから全部は見えないけど

あつ髭がすごい。よくよく見れば髭をゆっているのかひし形みたいなのがいっぱい繋がってる

語彙力なくて分かりにくいかもしれないけどこれなんて言えばいいの？助けて？

→ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆
ほんとこんな感じよ？髭

何考えて生活してればそういうファッションになるの？私意味わからない

この人の見た目に突っ込もうとしたらそれこそ時間がいくらあっても足りない気がする

この個性的な方の見た目はこれから突っ込まないことにする

カモメとおじいちゃんの2人は何かしらの会話をしているが何言ってるか分からないのでこの際無視していこう

漢字があるのは分かったけど何喋ってるか分からないってことは中国語かなにかかな？

中国って漢字使うよね？知らないけど

あと頭に中国って出てきたけど中国ってどこ？

私が今話していることは全部頭のどこかにある情報を使っているけどそれが本当にあっているのかも分からないって言うのは怖いね

それが本当かも分からない。分からないってほど怖いものは無いけど今はそんなこと言っても仕方がないのも事実

おじいちゃん達の会話ででききとれそうなものを聞き取るとするか

ひとつくらい聞き取れるものくらいあるでしょ多分

うわっこつち来た

来んなしカモメ

なんだコイツら何か言つてやがる同じ単語をベラベラと

そつくりそのまま返してやろうか？おい

えーとなになに？

「ケエイ？」

うわっなんか変な声出た

sideセンゴク

「お前には散々と聞きたいことがあるがまずはなんだその子は」

「おう儂の孫じゃ」

「命令違反してまでそのガキを拾いに行つたのか」

「そうじゃ」

「滅給」

「それだけはやめてくれセンゴク、儂とお前の仲じやろ」

「……無休」

「それだけはやめてくださいませマジでそれだけは」

「じゃあ軍法会議」

「本気でやめてくださいませ」

「全部やるとして本当にそいつなんなんだ」

「儂の孫じゃ可愛いじやろ」

「名前は？」

「ない！」

「あ？」

「そんなこと言うな」

「イラッ」

「口でイラッて言うやつ初めて見たわい

すみません儂が悪かったですからその手をお下げください」

「じゃ名前はとうするんだ」

「そうじゃな…」

「ケイ」

「ケイ？」

「そうじゃケイじゃケイ」

「一応聞いておくがなぜだ」

「なんとなく！」

「あ?」

「違うんじゃないかこう…ビビッと来たんじゃない」

「な? ケイ」

「この男は…」

「もう譲らんのだろう?」

「そうじゃ」

「なーケイ」

「ほらケイ　　へいケイ」

「……」

「ケエイ?」

「なんじゃセンゴクやけに声が高くなったのう」

「何言つとるお前の声が高くなつたんだろ」

「濃じゃない」

「私でもない」

「じゃあ」

「……」

「喋った〜!?!」

伝説の始まり

伝説は始まった

sideケイ

私の名前はケイ名前はもう有る

今現在3歳である。結構頑張った

この3年でわかったことが何個かあったので紹介していこう

まず言語が元の世界で言う「日本語」というものであるということだ。最初何言っているのか分からなかったのはこの世界で生まれたばかりで耳とかが発達していなかっただからであろう。漢字があるのだから当然と言ったら当然なのだがこれには感動を隠せなかった。

言語以外にも文字も一緒だった。漢字があるから当然と言ったら当然なのだがこれには私に都合良かった。言葉が読めるようになった時からこの世界のことを知るため、軍の図書館に入り浸り知識を蓄えた

どうやらこの世界では世界政府という団体が世界全体をまとめその下に王だとか皇帝だかがいてそいつらが国をまとめているらしい。1つの組織しかってつべんにいない

のにこの世界は治安が悪い。これも世界政府というアドバンテージを潰すほどに海賊達が沢山湧いてでるからである。

そんな海賊達が村や国を沢山滅ぼしたり政府が重税で国滅ぼしたりしているのにこの世界は人類が居なくならない。この世界の人間の生命力えげつねえ

また、世界には政府の他に四皇とかいう力の持った海賊やそれ対策の七武海とかいう政府直属の海賊がいるらしいが力関係が

政府Ⅱ四皇Ⅱ七武海となるとは思えない

明らかに四皇の力が強すぎる

支配している土地といい海賊としてつけられている懸賞金といい

というか私が拾われた海は最弱で海賊の平均懸賞金が200万ベリーらしい

ベリーとはこの世界の通過で1ベリー1円と考えれば多分いいだろう

お肉とかの値段がそんなに変わらなかったから多分合つてると思う

最弱で平均300万つてインフレすくくない？普通に億越えの方々がゴロゴロいるんだよ？そんなやべー奴ら相手に何しろと？

というか政府が懸賞金をかけて指名手配するだけでも相当悪者でしょ？それが億とかって

この不安定な世界でどうやって生きていけと？

「はあ」

私は大きなため息をつく

もうそろそろ鍛練の時間が来てしまう

3歳児に稽古つけるってどんなブラックだよ

というか私はのんびりと畑でも耕しながらベットの所で安らかに息を引き取りたいのにこのままじゃ戦死コースじゃないか

いやだゝ死にたくないゝジニダグナイゝ（汚い声）

セングクさん曰く私には素質があるとの事だがどうでもいいぜ！

素質とか要らんよそんなところで転生特典的なもの出してくるなよ

そんなもんいらぬよ売れるものなら売ってやりたい

閑話休題

これをいつまで行っても仕方が無いな

この世界に来てから3年が過ぎるのだが未だに元の世界のことを思い出せない

それどころか記憶が剥がれ落ちていってしまっているようだ。分からないことは分からないので今まで放置していたが、そろそろ本気で考え始めないと行けないかもしれない

side 仏

海軍本部元帥の仕事はいつも多忙である。いつも部下たちの報告書とにらめっこすることが多い。特にガープの始末書が多い

そんな座ってばかりのセンゴクにも最近は楽しみがあった。ガープが拾ってきた子供ケイを可愛がることである

今日もあと数分したらあの子を稽古という名目で可愛がる。しかしそれだけじゃないのでしっかりと稽古もつけていたりするが、センゴクも内心思っていた「3歳児が稽古ってなんだよ」と

3歳から稽古を受けるとかいうスーパー英才教育されているケイなのだが実はそんなに強くない、武装した大人に1歩届かないほど

そんなんじゃないやこの世界ではやっていけないとセンゴクは考えているのだがよくよく考えて欲しい

3歳児の比較対象が武装した大人ということ

この武装した大人というのは女の人だから力が弱いなどではなく、しっかりと訓練をした一般兵のことである

この頃のセンゴクには……いや、今後もセンゴクはそのことを気づかないだろう

3歳児に稽古など馬鹿馬鹿しいとか考えているセンゴクもこの時間が何よりの楽しみなためこのことを辞めない。これがあの子を苦しめていることには気づいていない

のだろうか

ガチャという扉を開ける音と共に元気の良い声が道場に響く

「おつはようございまーす」

「今は昼だぞ」

「そうでしたっけ？」

「そういえばケイ技名とか考えてみたか？」

「なぜ相手を殴る時になんか叫ばないと行けないんですか？」

「そりゃ技名叫んだ方が自分の気持ちも整えられるし相手への威圧にもなるだろ」

「全くなりませんよね？というかこの技名叫ぶのなんなんですか？自分の手が相手にバ

レるじゃないですが技名と違う技打つならいいですが」

「いや、だって……かっこいいだろ？」

「ダサイですね」

「ぐふっ

とういかなぜ私達は技名を叫んでいたのだろうか」

「あ、でも技名位は考えましたよ」

「ん？なんだ？」

「私のパンチって銃のように強いじゃないですか？」

「ん？」

「なので “銃”^{ビストル} “とかどうですか？”

「却下」

「Why!？」

「なんかこう……被っている気がする」

「そんなこと知らんですよ」

「とにかくもつとかっこいいのにしなさいそんなヘンテコな名前じゃなくて」

「チエ」

「まあ今日の稽古を始めるぞケイ」

「面倒くさっ」

「そんなこと言ってるといつもよりきつくするぞ」

「んんっ楽しみだなあ（棒）」

「こうして今日もきつい訓練が始まるのである

タダ飯ほど最高なものは無い

side ケイ

私だ前回到引き続きまた雑に時間が飛ばされてしまった今日この頃、この2年であったことと言えば特にないと言ったら無いのだが言わない訳にはいけないので書くことにするが正直いってめんどくさい。書いてて国語力的なもので不安と虚しさを感じるのだが、こんなものを気に入ってくださる方がいるのなら私は書かなくてはと思っている。と誰かか言っていた気がする。誰かは分からない

この2年の中で変わったことといえばセンゴクさんに半分強制的に海軍に雑用として入れられたことぐらいだろうか

タダ飯はダメらしい

タダ飯より美味しいものはないというのに！

その時の話はこんな感じだったはず……………多分

「働かずに食う飯は美味いか！」

「ええ最高ですとも!!」

いや違うなこれじゃないはず

それは数年前いや数ヶ月前いや、数週間前の話だ

「なあケイ」

「なんですか？」

「お前もここに来てもう5年になるな」

「そうですね」

「そろそろ軍に雑用として入ってみないか？」

「嫌です」

「そういうと思ったが一応聞こうなぜ嫌なんだ」

「働いたら負けだと思っっています」

「お前は……」

「そもそもなぜ5歳児が働かなければならないのですか!？」

「そろそろ社会経験を積みませようとだな」

「アイム5歳児」

「そんなに駄々を捏ね続けるとメシ抜きにするぞ」

「なんで!?!今日のセンゴクさん辛辣すぎない!?!」

「……お前も雑用にならないか？」

「嫌ですーそもそも5歳児が働くってなんですか？ブラックですよ？超ブラックそんなことしていると色んな機関から怒られますよ!?法律とか怖いでしょ?」

「そんな法律など知らん。そもそもこの機関はどの国の法律も効かない。そもそも海軍はだいたい特殊でな政府からの大まかな要望などを除けばあとは自由に決められる」

「Why? 酷くないですか!?!労働基準法違反だア! そんなの無いって言われても労働組合作って訴えてやる!」

「どこに訴えるのか…今の海軍にはタダ飯ぐらいを置いておくほど裕福ではない」

「子供1人置いとけないで何が世界一の機関だ!」

「……はあ仕方ない…やはり飯抜きにするしか」

「なんで今日そんなに辛辣なの!?!」

「ガープの報告書がな…」

「あつ（察し）」

「青キジが仕事バツクれて逃げたり他の中将達も最近色々やっててな……」

「あつ」

「もう1週間は寝てない」

「分かり………ましたから………海軍で働きますからセンゴクさん寝てください………」

「（チョロいな）」

———
ということがあり海軍で半強制的に働くことになりました。はい。

それにしてもあの時のセンゴクさん辛そうだったな……

という訳で今私は海軍で雑用しています

そして今は初仕事、正確には船の上での初仕事なのである

それにしてもおじいちゃんの船とはなあ

ちなみにおじいちゃんとはガープ中将のことである。あの人自分のことをガープ中将と呼ぶと凄く嫌がりとても面倒くさ……とても面倒くさいのである

私は今東の海に行くことになっている。理由としては東西南北4つの海の中で1番海賊が弱く、海賊にかかっている懸賞金も平均して300万ベリーだからだ

毎回思うが平均300万で1番安いつてなんだよ高すぎんだろどっからそんなお金海軍は出してんだよ

300万出せるってことは私1人くらい養えそうだけどね

東の海になったもう1つの理由としてはおじいちゃんの本当の方の孫がいるからである

自分の孫がいるからで仕事の場合変えんなよあのジジイ……

本人曰くついでだけどほんとについでなのかは分からない

という訳で今私は東に向かっているのである

「めんどくさい」

私は悪態をつきつつ共に船での雑務に取り掛かる

船での雑用は最悪だ大砲の砲弾を磨けと言われても重すぎてまともに持てない
砲弾磨いて何になるんだよ

やるとしてももつと適任者がいるだろ。こんな弱つちいやつにやらせるなよ

船内の掃除をやれと言われても伝説とも言われるガープ中将の船だ。当然でかい。

雑用は他にもいると言ったらいるのだがそれでも1人1人の負担はでかい

私は船での航海の期間どう楽に過ごすかを考えつつ、次の島ではどんなことがあるのかワクワクしながら雑用仕事を開始するのであった

私のために他の雑用には頑張って貰わないとな

問題はどうかやって私の負担を減らせるかだけど年齢の事言えば多分大丈夫でしょ

それより次の島では何があるのかな？それを考えることだけが今の私の最大の楽しみなのだ

「今日も一日頑張るぞい！」

焼き鳥つて美味しいよね？よね？

sideケイ

船での航海が慣れてきた頃、また船内が騒がしくなってきた
なんなのだと思います私はそこら辺にいた雑用仲間に声をかける
名前は忘れた

「そこの人少し聞いてもいいですか？」

「ん？ああお前か」

「いつも名前で呼べと言ってるだろ」

「私名前覚えれないそういうの苦手」

「何回も言うが俺はガクだ！」

「あーハイハイガクさんねもちろん覚えてましたよー（棒）」

「どうせ覚えられないだろうが覚えておけ俺の名はガク海軍本部大將になる男の名だ！」

「へいへいスゴイネーオウエンシテマスー」

「で、何の用だ？」

「船が異様に騒がしいですけどなんかあったんですか？」

「およ? お前知らんのか今日補給で島に寄る日だぞ」

「そうでしたっけ?」

「おう」

「それにしてもこんなもんなんですか?」

「なんか軍でも不祥事を働いてそうな大佐のところらしいぞ」

「へー(興味無し)」

「だろうな」

「一応聞きますそいつの名は?」

「ネズミ」

「誰?」

「ネズミ」

「あ、はい」

「そろそろ上陸だろうから準備くらいしとけよ?」

「イエスサー」

港にて

「のうケイ」

「なんですか？」

「今日は特にやることないしお小遣いあげるから遊んでこい」

「ありがとう！おじいちゃん大好き」

「気をつけろよー」

「ほいほーい」

ということがあつて私はちゃっかりお小遣いを貰つたのである

他人のお金で遊び倒すのは最高だぜ☆

とことん遊んでやる！

「にしてもどここ行こうかな」

とりま街で遊んでくるか？いやでもこの体だと相手にされないで終わりそうだな…
そうなるもただ時間を浪費することになる

となると街に行くことは得策ではない…それでも海の方に行くか？それだと海軍
いっぱいいてなんか特別感がない。

かといって船を止めたところの反対側の海岸だとあまり発展してないらしい

頑張れよ

ならば答えは1つ

山へG.O

山はいいぞ山といえばおじいちゃんが私を放り込んで放置しようとしてくるところだ。実際されたし

あの時は近くに隠れて私を見守っているであろう人を必死に探してその人を使って脱出してやった

その後はセンゴクさんにチクった

それにしても山かあ

幸い近くに山はあるがその山に行くまでに結構治安の悪そうな道を通らないといけないらしい

海軍いるのに治安悪いつてなんだよ

というか1日で登れなさそうなのでとりあえず山の麓までピクニックとすることにした

まずピクニックするとしてもこの支給された電伝虫とかいうこの世界携帯電話みたいなやつは見た目がキモイので逃がそう

私は虫とかが嫌いだ

とにかく私は電伝「虫」を逃がした後歩き出す

せつかくの休日。正確には休日ではないがせつかくもらった休憩できる日なのだ。

遊び倒さなければ失礼というものだろう

他の雑用はちゃんも仕事をしているはずだから私だけ特別仕様ということだ
やっぱり小さいって最高だな！

特別にしてくれるっていいよね今日は一人で久しぶりに遊び倒してやる

「にしても一人だと寂しいなあ」

少し悪態を着くがそう言っても一人なのだから仕方ない

今日は私だけが休み？なのだ仕方ない

そこら辺の鳥とかと仲良くなれるなら連れて行って孤独さを紛らわせるのに
ちなみに後で焼き鳥にするが今は焼き鳥の気分だ

……………唐揚げもいいな

とりあえず歩きながら唐揚げを探すことにした

いることにはいるがみんな飛んでいるせいで手が届かないし、取れても小麦粉とかが
ないので唐揚げは無理だ

こんな時に「六式」とかいうふざけたもんを使いたくなる

六式とは政府が作った体技みたいなもので凄い特訓してりや身につくらしい

何があるかと言うと確か

空気を蹴って空中歩行する「月歩」

高速移動できる”剃”

鎌風が起きるほどの速度で足を振り斬撃を飛ばす”嵐脚”

身体を鉄のように硬くする”鉄塊”

敵の攻撃をひらりと躲していく”紙絵”

ざつとこんなもんか

それにしてもこの世界には化け物しか居ないのか?こんなを使うやつがウジャウジャいるなんて

ここで”月歩”とか言つて飛べたら焼き鳥GETできるのに……

これらはセンゴクさんが教えてくれたけどなかなか出来ないものなのだ

剃はそれっぽいものができてきたがそれ以外はさつぱりだ

自分でも高速で移動できたことには驚きを隠せなかったがおじいちゃん達や中将さん達はもつとはやく動き回る

あなた達ほんとに人間?

人が出している速さじゃないよ?

月歩とかどうやるんだよ

空を蹴るつてどういうこと?

足を振つて斬撃飛ばすのもなかなかだけど……これも異世界的なところだから仕方な

いと割り切るべきか……

そもそもここを異世界と言っているがほんとにそれであっているのか

考えても仕方がないけど一つだけ言いたいこととすれば

この世界物理法則無視しているかと思えばそれなりには守ってるってなんなんですか？

少年漫画かなんかで？

考えても仕方がないか……それでも考え続けるんだけどね

それよりも今は唐揚げ探しと街探しに集中しようかな？

「LET'S GO!!」

トラブル

炎天下のもと歩くこと徒歩2時間ちよい少し疲れてきたのでそこら辺にある食事処にでも入ることにするか……

焼き鳥は前の街で食べたが歩くとやはりお腹はすくものだ

「1名でーす」

やはりこの体だと周りに驚かれるが仕方ない……適当に流してやり過ぎ

それにしても暑いまるで燃えているようだ。それに少し焦げ臭い

まあ大丈夫だろうと案内された席に着く

さて何を頼むとするかここでも焼き鳥を食べてもいいけどさつきはしよっぱいものを食べたから今度は甘いものを食べたいかな

おっパンケーキがオススメらしい頼も

それにしても焦げ臭いな

まあ気の所為だろうとかで流せるほどの匂いではなくなってきた。台所から出火とかいうレベルじゃない

うわくつせえ

私は気になり後ろを振り向く。いや、振り向いても室内だとよくわかんないから外に出て確認してみる

もしかしなくても食い逃げである

いや、まだ商品届いてないからセーフだ

多分

外に出て辺りを見渡すと目の前に見えるものはほぼ全てと言っていいほど燃えてい
る

「えっ」

なんだこれは何処かで火事が起きたのか？

でも自然災害だとしたらこの速さで燃え広がるのはおかしい

私はまだ食事処に入って10分もたつてないし、匂いがしてから1分とたつていない

「なんだ……これ……」

人為的に燃やしてもこの速さはおかしくはないか？

「う、家があ……」

「誰か助けてくれー」

「消防隊はまだか!?!」

そこらじゅうから市民らの叫び声が聞こえてくる

「お、落ち着いて」

一応海軍に入れられてしまった私なのでとりあえず避難誘導をしようとは思ったが何せ5歳だ。周りが聞くはずもない。どんなに叫んでもすぐにかき消されてしまうのがオチだ

私は冷静さを保とうとするが、こんなこと初めてだ、動揺を隠せない

原因を考え、それをどうにかすれば何とかなるかもしれない

そう考えついたらもう私には動いてみることにしか出来ない

と言っても原因なんて分かりっこない。こんな速さで広がる炎なんて……

あるのかもしれない

私は先週くらいにセンゴクさんに言われたことを思い出す

確か悪魔の実などというふざけたものがあるらしい

それは食べると一生涯ナツチになってしまい、たとえ魚などでも泳げなくなる呪いがかけられてしまうが、その代わり人智を超えた力を手に入れられるというこういう異世界特有のチートアイテムである

しかしそんな実も2つ食べるとなんやかんやで死んでしまうらしいがそのところはよく分からない

でももし本当に悪魔の実の能力者なら私には手が負えない。おじいちゃん達に助け

を呼ぶしかないがそんなことしてたらこちら一帯は焼け焦げてしまう

携帯電話みたいな電伝虫というよく分からない虫なら持っていたが、私は虫とかが嫌いだから来る途中キモくてとつくに逃がしてしまっている

しかしこんな騒ぎなので軍に連絡するやつはいるはずなので応援は少しだけ期待はしておくが、来ないものとみてもよいかもしれない

ではどんな実なのだろうか？私は炎系のものは海軍にいるサカズキとかいうヤクザみたいな強面なおっさんこと赤犬大将のマグマグの実というものなら見たことがあるが、同じ悪魔の実はこの世に2つ存在せずその所有者が死なないと復活しないらしい
でも赤犬さんが死んだとは思えない

あの人アホみたいに強いもん

となると他の炎の実の能力者が近くにいるのかもしれない

その能力者を何とかすればこの惨事も何とかなるのかもしれない

その人は何処にいるのだろうか

「考える前に行動ってこと？」

私は声に漏れてしまったがもうそれしかない無謀だが何とかするしかない

ここの人達を見ていたら自分も逃げるといふ選択肢がなくなってしまうていた

私はこの惨事の中でも笑い声が聞こえたような気がした

これでも私は人より耳がいい方の人なのだ

おかしい。こんな時に笑っているやつなんて

しかも1人2人ではない大勢だ

私は勝手にそいつらを犯人と決めつけてそいつらを殴りつけるために走り出した
悪役を殴り飛ばせば一件落着だろ？

敵キャラが書きにくくて辛い回

周りには火の手が回りきってしまい、無事に移動できる範囲が少ない。その中でも私はその現場に行くために火の中に突っ込んでいく

「暑っい」

炎の中に私服で飛び込んでいくのだ暑いどころじゃない

しかし幸運なことに割と直ぐに炎の中を抜けることが出来た

「ぷはっ」

炎の中から出て一息つく

炎の先には数十人の男もがいた

みんなガタイは良い方で弱くはなさそうだ

その中でも中央の男は体から火を吹いていた

「火が……」

私の予想は最悪の形で当たってしまった。まさかこんな所で能力者に会ってしまったとは

「んあ？誰だあのガキ」

しまったどうやらさっきのでバレてしまったらしい。我ながらアホである

「わ、わ、私ほか…」

上手く言葉が出ない

私は海軍のものだ！と言おうとしているのだがそう言ってしまえば間違えなく殺されてしまう。しかもよく見てみると集団のすぐ先数m先に私と同じか、少し大きい位の女の子が倒れていた

酷い怪我をしている

「だ、だ、大丈夫？」

私は男達を無視してその子の傍に駆け寄る

「チツ正義のヒーローきどりかああ？」

男の1人が声を飛ばしてくるがそんなもの聞こえない

「大丈夫ですか？」

幸い血などはそんなに酷く出ていない

「その嬢ちゃん俺たちに楯突いてきたから少し痛い目にみせたただけだ。おめえもそうなりたくなけりやあとつとと失せろ！」

「誰が下がるもんか！こんなことをしておいてタダじゃ済まさないぞ！」

「へっそうかよじゃあやってみるよ！」

何故私は今そんなことを言っちゃったの？バカなの？自分より強そうな相手に喧嘩売ってどうする!?!私！不意打ちとかでやる相手じゃないの？

考えているうちに集団の中から3人ほどの男が前に出てくるしかし例の炎の男は動かない

(これなら……)

舐めて少ない人数で来てくれるなら勝機はあるか……？

ペチツ

「ペチツ？」

気づけば足を掴まれていた。しかし男共は先程の位置から動いていない

「に……げで……僕が、僕があいつらを追い払う……から……」

倒れていた女の子はそう言った

「でも…君はもうボロボロじゃないか……私がやるから……だから君は休んでて！」

「いいんだ……僕は化け物強いんだ……奴らも倒せる」

「でも……」

「さつきからおしゃべり楽しいかあ？そっちから来ないんならこっちから行くぜっ」

そういうと共に右からパンチが飛んでくる

私は身体をそらして避ける

「お返しだよっ」

私は男1の腹を思いっきり殴りつける

「ぐふっ」

みぞおちと言うやつだ思いっきり殴ったのでしばらくは起きないだろう

「このっ」

2人目の男は腰のサーベルを抜き私に切りかかる

私は素早くズボンの中に隠していたナイフを取り出しサーベルにあて軌道をそらす

ナイフは小さい私にも持ちやすく隠しやすく使いやすいで重宝している

「ひごのかみ
肥後守」

私は頑張って考えた技名を叫びつつ相手の腹を切りつける

この技は相手を何度か高速で切り付ける連続技である

「がはあっ」

「よしっ2人目！」

私は3人のうち2人を倒したが3人目の姿がない。どこにいるのかと気配を探る

「後ろっ？」

3人目の男は今あの女の子に2人目と同じようなサーベルを振り下ろそうとした

ガッ

サーベルは女の子の体を貫通し地面に叩きつけられる
「ぐ、グアアアア」

サーベルが女の子に当たると同時に3人目の男は
燃えていた

「せ、船長何やってるんすか!？」

「お、俺じゃねえ」

相手側に動揺が走る。そりゃ火の能力者がいるんだそいつが疑われるのだが
「君がやったの……?？」

「そう僕はメラメラの実を食べた」

「メラメラの実?？」

「そう体を炎に変えることが出来る」

「マジかよ」

「もしかして自然系ロキアかよ……」

「そんなバケモンに勝てるわけねえよ」

「黙れお前ら! 火がどうした!?! 俺はそんな火も操るボウボウの実の火吹き人間のザンク様だぞー!」

「そ、そうだ船長ならやれる」

「やってくれ！船長！」

「おうおうお前らうるせえなあ俺らがあんなガキ共に負けるわけねえよなあ？それにあのガキパイプでぶん殴っただけでぐったりしてたぞ？本当に自然系ロキアなのか？」

メラメラの実は自然系ロキアなはずあらゆる攻撃が無効になる自然系を倒せるとは……？

そういえば海楼石とかいう海の性質を持つ石があつたはずだ。その石は悪魔の能力者が能力を使えない海の中にいるのと同じで能力を使えなくする石だつたはずだがなぜあんなのがそんなものを持っているのだろうか？

「何を考えてるの？相手は待つてくれない……力を貸して……」

「わっわかった！私はケイよろしく！」

「……マヤだ」

技名決めるの辛くね？の回

「暑い」

「…集中してくださいケイさん」

「さすがに炎系が2人は暑いね」

「…どうやって攻めますか」

「うっすらア」

「あつぶないっ」

分かりずらいが相手のザンクが口から火を吹いてきた

「あつっ」

「…ケイさんは周りの人達をお願いします！私じゃなければあの人の相手は難しそうなので！」

「了解！」

sideケイ

私は周りの雑魚処理をするのか……

今相手方の戦えるモブはザンクの取り巻きが1、2、3、4・・・12人と前回お腹を強打したやつはもう回復してしまっているので合計13人である

この量なら行ける……!だってセンゴクさんいつものよりも弱いから……!

それにしてもタイマンの練習は多かったが1対多数の練習をあまりしてないから上手く立ち回れるか分からないのが少し心配だが何とかなるはずだ

「あんなガキなんてすぐに潰してやれやあ」

モブの中でも1番偉そうにしてる奴が叫ぶ

「やってみろっ」

モブ共のターゲットが自分になるように相手を煽りつつ駆け出す

「てめえみたいなガキに負けるわけねえよ」

中でも前にいた奴から5人ほどこちらに駆け出す。他は静観をするらしい

いきなり13人全員と戦うのはさすがに辛いのでこれは素直に助かる

「むじのかみ肥後守!!」

駆けてきた奴らの中でも速かった2人の腹部に連撃をお見舞する

「やろお……ふざけんなよっ」

相手のセリフの最後と共に相手の1人が恐らく海楼石性であろうパイプを振り下ろ

してくる。もう2人のモブはサーベルを振り下ろしてきていてそれによく見えないが動いていない方の相手のうちの数人がピストルを抜いている

「フアスニング・ボルト!!」

今度の技は相手の体を全体的に切り付ける。肥後守は1点を連続攻撃するがこつちの技はそれより範囲が広くこういう多数が相手な時とかに使えるのでは?と頑張つて考えた

「つあつぶない」

私の攻撃が終わると同時に相手の後衛がピストルの引き金を引いたのを見て、その場を飛び退き遮蔽物の影に隠れる

それにしても銃弾避けられるつてこの体おかしいだろ

最初の5人は倒せたがどうも私の技では相手を倒しきれてなく、相手の後衛の銃弾を当てて倒したようなものだ。我ながら火力のなさが目立っている

「ガキが早く出て来いや!」

何発もの銃弾の音がする。相手はまだ連射しているようだ

「おいおめえらそんなに無駄玉打つな」

「はっはい!」

「おいあのガキはてめえら数人より十分強えぞしつかり強い引き締めやがれ!」

「ウオオオオオ!!」

「まずい相手の指揮がよくわかんないけど上がってるこのままでは勝てなくなるかもしれないから逃げたいけど逃げてしまったらマヤに危険が及ぶかもしれない」

「彼女は自然系だから数人くらい増えても変わらないだろうが一応数を減らしてあげたい」

「にしてもどうするものか……」

「おいガキでめえから来ねえならこつちから行くぞ!」

「とりま私は移動しつつ私が居なく、なおかつ私がいてもおかしくないであろう場所に石を投げこみ、音を出させて位置を攪乱する」

「こんなことしかない出来ないが今は数秒でも多くの時間を稼ぎたい警戒して固まってくれるならそれでいい」

「てめえらこんなのただのガキの遊びだ大方どつかから石でも投げてんだろ。おめえら3人以上のペア作ってあのガキ探せ。でも戦うなよおめえらじゃあいつには勝てねえ」

「おい副船長そんなことねえ俺らだつて戦えるぜ」

「いやいいおめえらがやって被害を大きくしたくねえ。いいかお前ら! 敵はあのガキひとりじゃねえぞ! ちやつちやつとあのガキ消して船長の助けに行くぞ!」

「お、おう!」

「わかったぞ！」

「任せろ副船長！」

なんだあのよく分からん統率力実に厄介なのでやめて欲しいにしてもどうするか……

タイトル考えるのが1番めんどいことに気づいた回

sideガク

ケイが戦闘開始する前

「お、お前さん確か雑用の……」「ガクです！」「そうじゃガクか……お前ケイと仲良いじゃろ」

「そうですね」

「じゃあ今日の雑用いいからケイにこっそり着いて言っで見守ってくれんか」

「は、はい……でもなぜ私なのですか？」

「それはグループ中將がすっかりしなすぎで周りの將校がついてなければ通常業務が出来ないのでは他の將校が軒並みグループ中將の付き添いで行けないからだ」

「ボガード中佐！」

「儂は1人でも大丈夫じゃがのう」

「というわけで周りの將校が軒並み手を貸せないの君に頼みたい。それにケイ君と仲の良い君ならもしバレたとしてもなんとかなるだろう」

「そういうことならこの俺にまかせください！」

「よろしく頼んだぞ」

「はい！ではいつてきます！」

「……ボガード儂の出番は？」

「無いです」

「(泣)」

side key

相手の指揮が高く迂闊に突っ込めなかったが数人でグループになって別れてくれるならやりやすい。いちばん少ないところ……は強いのが固まるかもしれないから裏を付いて多いところ行ってみるか

と言つても人数わけが2、3、3なんだけどな副船長の居ない3人が狙い目だな
「おいどこに隠れてくれやがったんだあ？」

相手方がこちらに気づく前に素早く後ろに回り込みそこら辺に落ちていたレンガで相手の頭に叩きつける

それにつられ残りの2人がこつちを向くがもう遅い。片方の頭目掛けて手のレンガを投げつける

「ひじのかみ肥後守」

レンガを投げつけてないほうの腹に高速の連撃

そのまま姿勢を崩し頭にレンガを叩きつける

“ミツシヨンコンプリート”

どこからかそんな声が聞こえた気がするが気の所為だろう。とにかく3人の意識は奪った

この騒ぎで他のグループの3人がこちらに様子を確認しに来る

幸い距離は空いているのでいまのうちに準備ができる

と言っても手頃な石とかレンガを集めるだけなんだけどね

「確かこつちで音が」

「おい、なんかあつたら副船長に報告だろ?」

「おいおい俺たちだけであんなガキ平気だろ異様に速かったが所詮はガキだ」

「大丈夫かよ……?」

「へっ言つてみりや本当にいるじゃねえか」

「やあ元氣?」

「そうかじゃ死ぬ!」

私は相手の剣を体をそらし回避し、他のやつの銃弾を剣を振ってきた奴でガードするにしても残りの奴らが遠いこのままではまずいが……

裏をかいで突撃してみるか

「紫電一閃」

相手に向かって全力で走り出す

「紫電一閃」とは私の移動技「剃」の下位互換で高速で移動する技本来は剃を使いたいけどまだ六式とか使えないから今は仕方ないね

「てめえ来んなよ!」

相手方がこちらに銃撃してくるが当たらない

こちらとらいつもバケモンセンゴクさんとやり合ってるんだ。そこで自分の得意な点を伸ばし続け
てきた。こんな奴に追いつける速度ではない

相手の胸元を切り付けるが深さが足りない

これは私の力が足りないから仕方ない

「フアスニング・ボルト」!

ここでダメ押しダメ押しの連撃をお見舞する

ドサツ

相手の倒れる音がする

にしてもマヤは大丈夫なのだろうか

「っ殺気!」

私は本能的にその場から飛び退く

「ちつ外したか」

今私がいたところの後ろに例の副船長がいた

その手の先には大きな長い槍が私の立っていたところに突き刺さっている

「おいおい副船長先に俺がやる約束だろ?」

副船長では無い方の男が言う

「なあガキお前なかなかやるようだがそれまでだぜ?」

「お前らはお呼びじゃないですよ」と

私はそこに落ちてた石をぶん投げける

「そんな見え見えなもん当たるわけねえよな?」

んあ……?」

相手が石を避けると共に走り出し腹を切りつける

さつきは胸元だったが身長的に辛いので腹の方が切りつけるのが簡単なのだ

「はい終わり」

「けつそんないきがつてるだけの雑魚を処理してくれて感謝するぜ?じゃあ次は俺と遊

ぼうや」

「私はお前と遊ぶ気は無い」

「おいおいそんな事言うなよ俺はこれでもお前を一人の男として認めてるんだぜ？」
「そうですか」

「おいおい釣れねえな」

「私におじさんへの趣味はないので」

「そういうことじゃねえだろ」

「じゃあお帰りはあちらでございます」

「あ、そうですかではこちらで帰ります」

「って帰るかボケエー！」

「お、ノリツツコミ上手いじゃないですか」

「褒めるなよ……」

「じゃこちらで私は行きますではまたいつか」

「おう！気をつけろよ」

「って違えわ！ケイ……俺から逃げられると思うなよ？」

「そうなんですか」

「お前人をおちよくるのも大概にしるよ」

「失礼なそんなことないですよ」

「もういいやお前一旦死ね」

ザクの拳が私の頬を掠める

「つつあつぶない」

「喰らえやつ」

「〃カウンター〃」

ザクの拳をナイフで流し相手の腹にナイフを突き刺す

「効かねえよ」

ナイフが刺さっていない！いくら私がひ弱だからといってナイフが刺さらないのはおかしいだろお前の体どうなってるんだよ！

「どうやら困惑してるようだな？まあいい教えてやろう俺はヒトヒトの實のモデル人間を食べた！人間が人間になっても変わらない代わりに他のやつより体が丈夫になってるんだ！」

「また悪魔の實……東ではそんなにいないんじゃないか」

「俺らはグランドラインから来たのさ、この海をめぐちやくちやにしてやるためになあ？」

「そうかそつちの海は他の4つの海より危険だと聞く向こうで戦えなくなってるこつちに逃げて来たの？」

「逃げた？そうじゃねえあんな化け物がうようよいるとか聞いてねえ俺らには情報が足りなかつたんだ！その情報さえあればあんな海俺らでも楽勝だ！」

まじか向こうの海から来た人か……東は安全じゃなかったの？

それにしても私はこいつに勝てるのだろうか

「はあめんどくさいし難しいけどやりますかっ」と

「そうかじゃあはやく始めようぜ？」

「行きますよつと」紫電一閃

私はザクの目の前に移動する

「遅いつ」

ザクに腹を思いつきり殴られる

「グバツ」

後ろに吹っ飛ぶが空中で姿勢を戻し無事着地する

「グバツだと？面白い鳴き方するじゃねえか。もつと鳴かせてやろう」

「止め……来るな……」

「ヤダね！」

「グバツ」

腹を思いつきり蹴られる

今度は姿勢を戻せずダメージが体にフルでくる

「グッツガバツ」

口から血が出るがそんなことを気にする暇はない

「ちっ蹴る時足を切りつけやがっていてえじゃねえか

ま、実の能力で再生力も上がってるからすぐ治るけどな」

そんな……今のは結構入ったと思っただのに

力不足その文字が頭をよぎる

「おいおいもうダウンかよもう少し楽しませてくれよっ」

「グバハッ」

倒れている私の腹をまた蹴られ、そのまま後ろの壁を数枚破壊しつつ後ろに飛ばされる

「ハア……ハア……ハア……ゲホッゲホッ」

私はボールじゃないんだそんなに蹴らないで欲しいな

あいつだけ他と段違いで強い

こうなったら必殺死んだフリでやり過ぎすしか……

「お、結構やりすぎたかと思っただが案外生きてるもんだな」

バレてえら

「ま、いいや反応薄くなってきたて面白くなってきたから……もう死ね」

「ガア」

ザクは私の首を絞めつつ持ち上げる

「止め」

「お、まだ喋る元気があつたか……ま、最後まで楽しませてくれや」

「たすけ……て……」

「もう誰も助けてくれねえよ恨むなら俺たちに歯向かった自分を恨むんだな」

「ヤダ……タス」

「もうその声は誰にも届かねえよ」

「いや、俺には届いたね！」

「あ、誰だテメエ」

「俺の名前はガク海軍大將になる男だぜ！」

「……マヤ」

「お、船長と戦つてたガキと……おめえは知らねえや。ま、お前らせいぜい俺を楽しませてくれや」

「そんなのはどうでもいいぜ！それよりケイを離せ！」

「はっどうかな？離さしてみやがれ」

つなぎ

sideガク

「俺の名前はガク海軍大将になる男だぜ！」

「マヤだ……」

「お、船長と戦つてたガキと……おめえは知らねえやま、お前らせいぜい俺を楽しませてくれや」

「そんなのはどうでもいいぜ！それよりケイを離せ！」

「そうかそれなら離さしてみやがれ」

「大丈夫か？ケイよく頑張つたな……」

「あ？お前何言つて……つておもちゃがいねえ！よくもお前俺の玩具を取つたな」

「ガク……ありがとう」

「大丈夫だあと俺らに任せて眠つとけよ」

「いや、大丈夫私はまだ戦え……る……」

「すまんケイ寝てろ」

俺はケイの首筋に手刀をいれ強制的に気絶させる

よくテレビのドラマとかで見えるこれも実際にやると力加減を間違えただけで首の骨を折ってしまうから力加減は大事だ

「うぐっ」

「大丈夫気絶させただけだ」

「おいおいさつきから俺を無視すんなよ」

「いや、もう無視しねえよ……あ、マヤちゃんケイのこと守つといて」

「わかった……でも大丈夫……？」

「おうおう俺に任せとけ！」

「また無視しやがって……まあいい用事は終わったみてえだし俺と遊び殺し合いをしようぜ？」

「だが断る」

「おいおい何言ってるんだ」

「殺しは遊びじゃねえ」

「そうか？ 戦いつてのは両者の力関係が同じくらいにならないと発生しないんだぜ？」

「……」

「なんか言ったらどうだ？」

「もういい……もう喋るな」

「あ？ 何言ってるんだ」

「俺はお前みたいなの人殺しを嬉々としてやるような奴は嫌いなんだよ！」

「はっそうなのか……ま、どうでもいいがな」

「そっちから来ないなら俺から行くぜ！」

「来てみる！そして俺を楽しませろ！」

「ウオオオオオ!!吹っ飛べ！」

俺は自分の愛剣を抜き相手の体を切り裂こうとする

「効かねえよ！」

相手はどこからか出した槍でガードする

「槍!？」

「残念ながら俺は槍使いでね少し本気を出させてもらおうとするか」

槍相手だと相手の方がリーチが長くて自分の攻撃をあてに行きにくい

なんとか防御をし続けられてはいるがそれも時間の問題

どうやってこれを覆すか……

「ハイハイハイハイ！そんなもんか？そんなんじやさっきの奴より弱えよ！」

「ガブア」

相手の槍が俺の腹を横薙ぎに打ち付け吹っ飛ばされる

「ぐわあああああああああ」

残っていた家の壁を何枚か突き破りつつ後ろに飛んでいく

あいつの力化け物かよ

大振りの攻撃をもちで食らっちゃまうなんて俺もまだまだ未熟だ……な
吹き飛ばされた先で俺の意識は飛びかけ……

ん？なんだ……あれ

渦巻き模様が沢山の木の实？

ここは八百屋かなんかなのか？

それにしても渦巻き模様の実って……

悪魔の実かよ!?

それにしてもこんなところにあるとは……

これ喰ったらあいつに勝てんのかな……

でも喰ったら人じゃなくなっちゃう

でも今俺がケイとマヤあいつらをあいつから守れるなら

俺は……

俺は………

俺は悪魔でも人外でもなんでもなつてやらあ!!!

待ってやがれよ

ガシッ

「いただきます！」

……うげつまじい

でもこれで俺に力をくれるなら……」

ん？なんも変わんねえ……

もしかして力が出てくるのに時間があるのか……？それじゃまずい！間に合わねえ！あいつらも心配だしはやく戻んなければ！腹の傷なんて気にしてる暇はねえな！」

sideマヤ

「……」

「おいおいあのイキってたやろお玩具にすらなんねえじゃねえか……ちつたア期待してたんだがな」

「……」

「嬢ちゃんもなんか言ったらどうだ？」

「……」

「喋る気はねえつか？」

「……」

「まあそう睨むなや……お前は船長を殺してこつちに來たんだろ？分かるよ長く一緒にいた相棒だった。そいつが消えたのは薄々気づいてる」

「…そう」

「もつとお喋りしようぜ？」

「……」

「もういいや……死ね」

「……………」

僕は相手の槍でのなぎ払いを体を逸らし避ける

避けると同時に体を炎にし、相手の体を炙る

「あつちいなおい」

全く効いていないが…それもそうか炎の能力者の相方だ火耐性くらいあるのだろう

僕は今までこの島でほぼ働かない海軍の代わりに無法者と戦う機会をよくあつたがそれも炎の能力で相手を焼いて追い払ってきただけだ

そもそも人は火を見れば少しは怯むはずだがそれすらしない相手はやりづらい

「フラッシュ閃光弾」

「うわっマブしっ」

必殺目眩し

この技は炎の光エネルギーだけを出す技である。炎は燃えるだけではないって訳だね

「『炎のパンチ』」

「あつちいな！それに名前だせえな！」

それは仕方ない僕は戦う為に鍛えてきてはいるが技名なんて2つしか考えてない。即席でつけたらそうなってしまふ

悔しいが僕にはセンスというものが無いらしい

「…じゃあ『ブレイズキック』」

「そんなに変わってねえよ！つうか蹴りになつてんじゃねえか！」

「うるさい……」

「俺は技名なんて考えたことねえがわかんねえがそれでもそれはだせえだろ！」

「…そんなに文句言うなら考えてよ」

「んあ？そうだな……じゃあ」

「…スキあり」

「グボア」

相手に全力の蹴りを入れるもちろん燃える蹴りだ

「ぶぎけんよ……もういい！考えた技名も教えねえしもう本気でめえも殺してやる

！」

「そう、でもその距離があるなら」

「距離がなんだよ？お前の能力は遠距離攻撃でも出来んのか？」

「うん……とつておきの必殺技がある」

「はつ必殺技だど？どうせまたダッセエ名前なんだろ？それにおめえもその距離でその必殺技とやらを当てられるのか？」

「…当たる」

少し前

「…ねえケイ」

「な、に？」

「…そんなボロボロだけど頼みたいのだけど」

「私は大丈夫」

「…ありがと……僕はあいつを倒せるであろう一撃を打ち込みたいんだけど、そうするとしばらく動けなくなってしまう。だから」

「弱ったあいつを倒せばいいの？」

「…ううん、多分倒せるけど、僕が倒れちゃったらここから僕もこの住民の逃げ遅れた

人も死んじやうかもしれないだから僕らを助けて」

「分かった。任せといて」

「はっ必殺技とやらはただの脅しか？ならこっちからいくぞ？」

「…準備できた……やる」

「あ？」

「…『火拳』」

「およ？」

火拳これは今の僕ができる限りの炎を出し、それを拳の形にして相手に向かって飛ばす技

いっけえええ

口には出さないが心の中で叫んでみる

ちよつとそれは僕らしくないかな？

「ちよ、その大きさは聞いてねえって……」

ドッカーン

大きく街が揺れる

「…ケイ……後はよろしくあいつはやったか……ら……」

「や……やられてたまるかよ！」

「!!」

「俺はプロなんだよ……ガキに負けるんだったら海賊やめてやらあ！」

「…しぶと……い」

「ハアハアハア……人間様舐めんなよ雑魚が！」

「…もう、む……り」

「おう、頑張ったな、少し寝てろマヤちゃん」

「…あなた……は……ん、よろしく」

「倒れたか……ケイ、頼んでいいか？」

「いや、私も戦わないと」

「いや、俺だけで十分だ」

「でも、」

そうゆうと共にガクの体から炎が吹き出す

「大丈夫………だろ？」

「どうして……？」

「おうおうおう！それはだな！なんか落ちてた」

「おいおいその能力は船長のもんだろ」

「ん？ ああそうだ！ 俺はボオボオの実を食べた火吹き人間のガク！ 海軍大将になる男だぜー！」

燃える男

「俺はボオボオの実を食べた火吹き人間のガク！海軍大将になる男だぜ！」

「ボオボオ？やっぱりお前らが船長をやったんか……」

「ああ」

「よくも船長を殺しがったな?！」

「ああ俺がお前の船長を殺したんだ」

「こう見えたって俺はあの船長をそれなりにしたってんだ……昔からの長い付き合いでそれなりの多くの死線を越えてきたんだ……よくも船長を」

「俺だつて殺したかあなかつたよ！」

「何を！」

「俺だつて好きに人を殺したりしたくねえよ！でもそうしなけりや俺らがあぶねえんだよ！」

「そんなこと言つたつて」

「でも俺はそんな奴がいなくなつて欲しいしもうやりたくねえ！だから……！だから俺は海軍で偉くなつてこの世界ごと変えてやるんだ！この世界は平和にしたいんだ！」

「そんなこと出来たら苦勞しねえよ！」

「黙れ！できないかもしれない……だけど誰かがやらないといけないんだ！だから……だから俺が皆の暮らしやすいように変えてやるんだ！」

「俺ごときに勝てねえやつが海軍大将？笑わせるな！」

「ああそうだなこんなやつだ……だが俺はガクだ！やるからと決めたらやるんだ！たとえ無理でもどんな壁があつてもぶつ壊すのが俺だ！」

「もう話が繋がつてねえよ」

「そうだな」

「じゃあもう」

「終わらせる（か）」

2人のセリフと同時にガクは燃え盛り、ザクは筋肉が盛り上がりゴリラみたいな体つきになる

「おまつなんだその姿」

「あ？ただの獣型だこれをやると体がクソいてえんだ。そんなに使いたくねえし早く終わらせるぞ」

「まだ奥の手が……だが俺も負けてられないな！」

それと同時に炎の出る量がさつきより比べ物にならないほど増える

「いくぜ！ // 火炎弾」

ガクは5つの火の玉を放つ

「効かねえよ！」

しかしザクの強化された肉体の前には効かないようだ

「まだまだ！くらいやがれ！ // 火炎放射」

ガクは口から火を吹く

「あつちいな！」

「そりやそうだ！炎を恐れないやつなんて居ねえ！」

「お前は少しめんどくせえな……だからはやく終わらせてやる」

「そうかよ、じゃあいくぜ！俺の最強必殺！」

「来いよゴラアアアアア！」

「いくぜ！ // 火炎特攻弾」

ガクは体全体から沢山の火を吹き、火達磨になり相手に向かって突撃する

火吹き人間とは火を吹くだけの能力である

もちろん火に対する耐性は人よりあるが、体を火にするメラメラの実のように完全な

耐性はない

つまり自分の炎で自分が焼けてしまうのだ

しかし自分の身を犠牲にする代わりにその威力は絶大である
「ぐ、グアアアアア」

相手は吹っ飛びそのまま近くの焼けた大きな建物に突っ込む

その時の衝撃により建物が崩れ去り、そのまま瓦礫の下敷きになってしまう

「ハア…ハア…やったか!？」

「うんそうだねもう相手の動きもないし、あんなの下敷きになってしまったらいくら能力者でももう……」

「お、ケイ!もう大丈夫なのかよ!」

「うんお陰様で」

「それにしてもこれは酷いな!」

「もう街がめっちゃくちゃだよ」

「じゃガープ中将とかの応援呼ぶから来るまで避難誘導かな?」

「でも、」

「ん?ああそうか。よし!ケイお前はマヤちゃんの手当してやれ。俺が街の人を何とかしとくからよー!」

「ありがと。よろしく」

「ういーすじゃ、やるか!」

ガクが救助活動を初めて数十分たった頃には応援の海軍が来て、それから全ての住民の避難完了、鎮火まではさほど時間がかからなかった

今の私と言うと今回のことの報告をおじいちゃん中將にしているとところである

「で、電伝虫を逃がしたと……？」

「これには大きなわけが」

「なんじゃ？」

「電伝虫が予想以上に気持ち悪く……」

「バカ！」ゴツ

「痛ったたたた……ちよおじいちゃん殴ることないじゃないですか!？」

殴ったな！親父にもぶたれたことないのに！

そういえば親父の顔知らなかったや

「うるさい！」

「うろうう」

「もうこのことはいい……じゃが次やつたら……」

「はいいい次は箱かなんかに詰めて運びます」

「それはそれでだめな気が……」

いいだろ！箱に詰めときゃあのぬめぬめした感じを見なくて済む

あと電伝虫って電話をかけると話し相手の顔とかに似るのなんで？あれキモイからやめてほしい

「まあ次じゃ……ええつとなんかの海賊」

「ザンクです」

「おお、そうか。懸賞金は」

「ザンクが3000万、副船長のザクが2000万ベリーですね」

3000万!?高つ道理で強いわけだ……それにしてもそんな高額があんなイキつてたとかよくわからんわ……

「そうかありがとうなボガードよ」

「いえいえ」

「まあお前らはそいつらを倒せたということはすごいんじやが……ガクよお前強かったのか……」

「いえいえ！その時たまたま落ちてた悪魔の実を食べて」

「悪魔の実じゃと!?!」

「は、はい」

「そうか……なんの実じゃ?」

「ボウボウの实の火吹き人間です！」

「それはザンクの能力では？」

「ザンクが死んだならばその実がまたできて不思議じゃないじやろ」

「そうですね」

「それはわかった。じゃあ最後にその少女は？」

「…私は…マヤ」

「マヤちゃんか……で、この子は？」

「現地住民？」

「なんで疑問形なんじゃ。あとなんで現地住民連れてきた」

「本人の希望です！あ、あととっても強いんですよ！ほら、能力者ですし！」

おいガクさんよ一遍に言いすぎおじいちゃん達困っちゃってるだろ

「能力者（じゃと）!?!」

「ガクなんて言っちゃうの？」

「そりや上官なんだから報告をしないとだな」

「で？能力はなんじゃ」

「……メラメラの实……自然系」

「自然系（じゃと）!?!」

「…はい」

「マヤの入隊は許可する。そしてガクとマヤはケイと共に儂の指導の元働いて貰うことにする」

「え？何故ですか!？」

「嫌なのか？」

「いえ！そういうわけでは」

「能力者の扱いってめんどいんじゃないよ。それも下の方の階級のものとなると」

「そうなんですか」

なるほど能力者の部下に反乱されたら困るからかな

能力者ってだけで厄介で対処しづらいもんね

その厄介の種を増やしても平気そうなおじいちゃんやっぱりおじいちゃんはすごいなあ

「でもセンゴクの野郎がまだこの先が決まってない海兵の中でも能力者だけで特別な部隊を作るとか言ってたのう……人手が足りなく作るのは多分数年後じゃが」

「そんなこと私たちに言っても良いのですか？」

「ま、大丈夫じゃろ！」

「そんなんで大丈夫なんすか……？」

「…心配」

全く何故うちのおじいちゃんはそのなことペラペラ言っちゃうかね

「あ、あと次の島は儂の孫のそこによるがそこでケイとマヤは少し降ろそうと思う」
「なんでですか？」

「儂の孫と歳も近いし遊べるかなって」

「思ったより理由がしょぼい」

「山で過ごしておるからあまり人と関わらないからのう」

「そですか」

「あの中将俺は？」

「ガクは儂に着いてこい。稽古をつけてやる」

「は、はい！よろしくお願いします！」

「うむ。これからどうなるのかのう」

悪ガキ3人

前回のあれから数日がたち私達はドーン島という島に来ていた

来た理由はおじいちゃんやんが孫に会いたいからっていうほぼ仕事と関係ない理由である

「グループ中将着きました」

「そうかじゃ農行つて来るから」

「え？何処にですか？」

「じゃから孫のところだつて」

「は、はい」

「農行つてくるからお前らはこの島の反対側にあるゴア王国つてところで補給しといて」

「そんな適当な……」

「じゃよろしく！ケイ、マヤ、ついでにガク着いてこい」

「はいー！」「……了解」

という訳で歩いて数十分のところにある山をさらに数十分かけて登っていくとその先に1つの小屋があった

「ほら着いたぞ」

「ここですか……なんか、イメージより」

「ブアツブアツブアツそうじやるこんなボロい家だがまあ大丈夫じやる」

「…話が噛み合っていない」

「フア？まあいいや。おーいダダーン儂じや開けるお」

「はいいいいいい！」

「儂じやとりあえず茶だせ」

「待っててくださいよガープさんもう生活が辛く……ってガキ!?おいまさかまたガキ預け

ようなんてー!」

「いや、しないが」

「ホッ」

「ま、それより孫共はどこじや?」

「それは分かりませんが森のどこかには……」

「めんどくさいのう……おいお前ら探してこい!」

「無理です!」

「なんじゃガクお前らしくない」

「すみません……」

「ま、いいや探しに行こ。着いてこいお前ら」

「はい！」「…ラジャー」

それからそれから我ら探検隊はおじいちゃんの子孫3人を探すために歩かされたとき

……

数分で見つかったぞ見聞色すげえな

そこでは3人の子供……と言っても私より断然大きいのが3人いた

それぞれの名は

1番ちっこくて弱そうなのがルフィ

麦わら帽子を被った黒髪の男の子である。目元に傷があり、パツと見アホそうな子である

また、ゴムゴムの実の能力者らしいが能力の使い方が悪くとても弱……独特な戦闘力をしている

年齢は私より3年上の8歳である

2人目はエース

黒髪のTシャツがなんかダサイ少年である

特に言うことがないが多分こいつ悪ガキ目がもうあれだもん。絶対食い逃げとかして
る。
うん。

年齢は私より6歳年上の11歳である

3人目はサボ

金髪の黒いハットを被っている少年

なんか歯がかけている

特に言うことがない

年齢はエースと同じ11歳

ちなみにこいつらの夢は海賊らしい

大丈夫なのかよ

ちなみに書くのがめんど……時間的な問題でカットされたがおじいちゃんは次の仕事
事しに行った

なんか急に仕事の追加が入ったらしい。そろそろ天竜人なるキチガ……世界貴族が
来るらしい

ちなみにおじいちゃんが仕事を延期にし続けたせいで天竜人なるキチガイが東の海
に来るのが遅れてしまっているらしい

んでもっておじいちゃんとかそれにつれてかれたガクが消えての再スタートである
ちなみに今はこいつらの秘密基地らしいツリーハウスの中である

「なあケイ」

「何エース？」

「今日の分の勝負しようぜ！」

「んあいいよ」

こいつらは1日100戦1人50回ずつ模擬戦をし、自身らを強くしていたらしい
が、私たちが来てからは、(基本無敵なマヤはこの勝負に参加しない)(私は勝負を挑む
が)私に来て、4人になってしまい、100戦じゃ公平に出来ないので1人につき40
戦となった

ちなみに勝敗はサボとエースが五分五分でルフィが全員に全敗。逆に私が全勝で、マ
ヤは

傷1つ付かないと、こんな感じである

「おっしやケイ！始めるぞ！」

「おうおうどつからでもかかってこいってな」

「先手必勝！いくぜっ！」

パイプで殴ってくるエースの大振りな一撃を体をそらすことで避ける

6歳年上が全力で殴りかかってくるってなかなかやばい光景やなでも今更6歳上程度に負ける道理はない

一撃を避けられたことにより隙ができたエースの体を思いつき蹴りあげる

私は武器であるナイフを使ってないのにエースはパイプ持ちって……まあいいかパイプって言ったらどつかの火達磨を思い出すな

「なかなか勝てないもんだな……よし！もう一回だ！もう一回」

「へいへいやってやりますよーつと」

数日後

私達はやることも無く通常通り訓練をするくらいしかイベントがなかったがまあそれでも充実した日々を過ごせたと思う

「なあなあケイ」

「お？なんだルフィ」

「やっぱり俺と海賊やろうぜ」

「だから私は海軍だつて言ってるでしょ」

「いいだろー海賊は自由なんだ！歌うんだぞ！」

「別に他の職業でもいいでしょ」

「違う！海賊だからいいんだ！」

「ほら海賊って世間一般的に悪役でしょ？」

「でも俺はいい海賊になるんだ！」

「はあ」

「な！ケイ！エースもなんか言ってくれよー」

「ケイはお前の船には乗らねってこった。なんせケイは俺の船に乗るんだからな！」

「おいルフイとエース！やめとけよケイは海賊にはならないんだって」

「でもサボオ」

こうみんなは言ってくれるが私は海軍より海賊でも良いとは思っている

私はここ数年でこの世界のことについて調べてはいるがこの世界は少しおかしいと思っている

天竜人とかいうやつらが市民たちに対して権力を乱用して市民の生活を苦しめているのが現状

その天竜人が世界のトップのような場所に経っているので海軍も言い換えればそいつらの部下である

そんな海軍で良いのだろうかとか考えたことはあるが海賊も海賊でやばい連中だしどっちとも言えない

あと海軍給料安い

子供料金安すぎませんか？こちとら命かけてるのですよ？

労働基準法に違反してませんか？

「なあ皆」

「ん？なんだ？ケイ」

「お前らはさピースメインとモーガニアのどっちになるんだ？」

「なんだそれ？」

「昔の言葉だよモーガニアは市民や海軍を襲い生計を立てている奴らでピースメインはそのモーガニアを倒して生計を立てている奴らだよ」

「つまり悪い海賊といい海賊ってことだな！」

「まあ言い換えればそうだけど」

「それなら俺らはピースメインだな！」

「そう…か」

即答………か

「そんなことより仲間になれよー」

それからそれから数日後のことである我々は森の奥のほーでまあなんかいつもどうり夕飯の狩猟に行った帰りのことである

「なあケイ！今日はワニだ！ワニ飯にしよう！」

「……ワニって食べれるの？」

「おう！美味しいんだぞ！」

「……そ、じゃあ僕とケイで果物取ってくるからそのワニはよろしく」

「お前って長文話せたのか」

「……バカにしないでよ」

「ま、いつか！」

にしても果物か……リンゴとか食べたいな……冷えたやつ美味しいじゃんあれでもこの森にあるかは知らないけど

「……見てケイキノコ」

「ん？これは食べれるの？」

「……食べれる。私はこうゆうとこで育ったからどれが食べられるかは分かる」

「そうなのか。じゃあ持っていくか」

「……じゃあ僕はもう少し先も見てくるね」

「よろびく」

「…ねえ」

「なに？」

「…いいの見つけたから…これ食べて」

「何を…って」

奥の方からでてきたマヤの手には金色のリンゴが握られていた

そのリンゴには渦巻き模様がついている

「そ、それって」

「…多分悪魔の」

「だよね……」

「…食べて」

「でも、こうゆうのって一応上司のおじいちゃんに「…食べて」ってええ」

「…食べて（鋼の意思）」

「わかったから…でもなんのやつなんだろう」

「…もし選べるのならどんな能力がいいの？」

「ん？ええと…もし能力を選べるのなら…世界を越えられる能力かな…？」

「……………！」

「ほら皆で違う世界に行きたいじゃん？」

「…そう」

「じゃこれ食べちゃうよ？」

「…どうぞ」

「じゃあいただきます！」

sideマヤ

「…もし選べるのならどんな能力がいいの？」

「ん？ええと…もし能力を選べるのなら…世界を越えられる能力かな…？」

「……………」

「ほら皆で違う世界に行きたいじゃん？」

「やっぱりこの人は…あの人に似ている

いや、似すぎている

出会った時からそうだった

自ら危険に突っ込んでいくその精神も

自分より周りを何とかしようとしてしまうその気質も

何よりその言動も体に染み付いてしまっているクセも

似すぎている

一緒だ……

フフフ

きつとケイも私と同じなんだ

どうやって気づいてもらおう

でもゆつくりでいいなせならこの新しい世界で “私達” だけでいられるんだもん

もう誰にも邪魔させない

この世界に来て良かった……きつとこれは神様がくれた2度目のチャンスなんだ

…

どうやってこのチャンスを使っていこう

まあ考える時間なんて沢山あるしゆつくりでいいかな…

フフフ……アハハ…アハハハハハハハ!

能力者

「じゃこれ食べちゃうよ？」

「……どうぞ」

「じゃあいただきますー！」

ムシャムシャフムフム……これは……！！

「まっずい……」

ダメなやつだ

「……頑張って飲み込んで……一口でいいから」

「んっあ……飲んだよ」

「……どんなのかわかる？」

「まだ分からない……もう少し時間が必要かな」

「……一応残った実は持って帰ろう」

「そうだねひとまず皆と合流しないと」

「カクカクシカジカ」

「四角いムーブと」

「で？ケイは能力者になったと」

「すげえケイ！伸びんのか!？」

「おいルフィ同じ能力は2つとないんだぞ」

「げ、そうなのか？」

「で？どんな能力なんだ？」

「…そろそろ僕も知りたい」

「うん私もどんな能力が分かかってきたから見せるね……よつと」

　　“素晴らしい私はルフィの座っていた石を”消す“

「うわっ」

「おいルフィ何転んでるんだよ」

　　次に今ルフィを煽ったエースの座っていた石も”消す”

「うおっ」

「エース！」

　　最後にサボの石は……立っっちゃったからマヤのでもいいか

「……っ」

「成功……みたいだね」

「何すんだケイー！」

「ごめんねでもこれが私の能力だよ」

「…物を消す能力？」

「ううん物を別空間分かりやすく四次元ポケットと名付けよう。その四次元ポケットに物を移動させる能力かな？」

ルフィを消してやろうかと思っただけどどうやら人は無理みたい……あ、虫も無理だ
生物とかは無理なのかな……？

「消したものはだせんのか!？」

「出せるよ」

「素晴らしいルフィの頭の少し上にさっきの石を落とす

どうやら四次元ポケットに移したものを取り出す時に少し私がいじれるようだ

この石も少し勢いを強めて落としてみた

いじれるのは速度と…今葉っぱで試したら形も少し変わった

これは流星に岩じゃ出来ないかな？

「うおっ痛てえ！」

「お前はゴムだから痛くないだろ」

「ほんとだ！痛くねえ！」

「…なるほど」

「名前は多分スペーススの実の空間人間」

「おお！すげえな！」

「分かってないだろ」

「わ、わかっているし！」

「本当かなあ？」

「つまりすげえ能力だろ！」

「うんまあそうなのかな？」

それから数日後ダダン曰くおじいちゃんがあと数日で来るから帰宅準備をしろとのこと

あの人も連絡とかするの…いや、したのは周りの人かな？

そう言われた日の夜私はエースに呼び出されていたのである

「で？話ってなに？」

「なあケイお前はさ海賊王に息子がいたらどう思う？」

「うーんもし自分に関わりがないなら認識程度にするけど自分の前に現れるなら対応はするかな」

「例えばどんなのだ」

「例えば敵として向かってくるなら戦うし、友達になつてくれるなら歓迎すると思う」

「あの海賊王の息子だぞ！」

「知らないよそんなこと」

「え？」

「そんなこと関係ない親なんて。その子の親はその子じゃないんだからその親と同じ扱いをするんじゃないかってしつかりどんな人なのかを見極めなくちゃいけないと思う」

「でも相手は」

「相手は…なに？」

「……」

「そんな環境やら家族やらで傷つく人をもう見たくないんだ私はもうあんな……」

「もう……?？」

「あれ?もう……?なんだろうまだ体験してないはずなのに……この感情は……なに?私の中の私じゃないなにかがいるような……」

「おい!大丈夫か!？」

「いや、多分大丈夫だから…今日は少し休むね」

「そうか……」

sideマヤ

「フフフやっぱりそうだよね」

やっぱりケイは…いや□□□□は…

sideケイ

それにしてもエースはなんでこんなことを聞いてきたんだろう
有り得るのは自分の知人にその海賊王の息子がいるということ
エースの知り合いだとルフィとサボ多分その2人じゃ無いかな
次に有り得るのはエース自身が「海賊王の息子」であること
そんなはずないよね？そんな

でも

いや、

まさか……ね？

マヤ

僕の名前はマヤという

僕の名前はマヤという

ホントの名は□□□□

少し僕の昔話をしようか

僕とケイの多分前世？のお話

いやこの私□□と△△のお話を

—————

「はあ今日もつまんないや」

私は□□□□17歳でいわゆるJKと言うやつである

公立の高校に通つてはいるがつまらない

この高校はいじめが酷い

この前も○○ちゃんがいじめられていた

でも△△君と▽▽君のおかげでその子のいじめは表面上は終わったんだけど

「ねえ□□くちよつときさあくお金貸してよ〜」

やっぱりそのしわ寄せは私に来るのか

「…お金は持つてない」

「そんなことないでしょ〜つか私達友達でしょ〜?」

「…貴女と話したことなんてないし、友達になつた思いもない」

「ちよつとムカつくわ〜ねえ□□?早くしないと痛い目見せるわよ〜」

そうだこの人達はそういう人達だ。気に入らないやつは消すのがこの人たち流だ

何人かはいいつらのせいで病院送りになってしまつたりしているがこいつらのリーダーの親がこの国有数の財閥の長であるため大体の悪事はお金と権力でなかつたことにさせられている

「無視くまあいいやちよとこつちに来なさいよ〜」

こいつらは…やり方が古いんだよ…ドラマでしか見た事ないよこんなの

「はいーいみんな〜このわつるいわつるい□□ちゃんを皆でボッコボコにしてやつちやいましよ〜」

「「いえ〜い!!」」

相手は20はいる…か

「おいーやめろよー!」

「ちよつと何〜つて△△じゃないの〜」

「俺もいるけどな」

「我参上」

「俺も忘れんなよ！」

「わたしもいるにや」

「その語尾どうにかならないのかよ!?!」

「いいじゃにやいキャラつけてやつにやそうしないとすぐ忘れられちゃうにや〜それに名前も猫俣和猫で猫猫にや」

「ちよつとめんどくさいわね〜もういいわ

撤退するわよ〜」

多いなあ今来たのはこの前までいじめられていた○○ちゃんとその愉快的な仲間たちだ

いや、△△^{ケイ}と愉快的な仲間たちの方がいいのかな？

「帰れ帰れ！」

「ばいにや〜」

「ねえ□□大丈夫？」

「…大丈夫ありがとう」

「おうおう！まああいつらはやべえからな。俺たちで何とかしなけりやいけねえんだよ」

「我らはいつらに地獄を見せねばならぬのだ。お主も我らと戦おうぞ」

「…報復？」

「いつつも違うって言うてんでしょ▽▽と○○！私がいっつも言うてんのはこの学校からこうゆうのを消したいってだけだよ」

「でも△△そのやり方じゃ無くならないんじゃ」

「それじゃあ私達がアイツらと変わらなくなっちゃうだろ？アイツらと同じじゃダメなんだ」

「ん。そうだな」

「だから□□報復とか関係なく私達と友達になろうよ！」

「…うん！」

「…ふふふ」

「どうしたんだよ急に笑って」

「…こんなの初めてだから」

「…こんな私を友達…か。おかしな人達だなあ」

「そうなのか」

それから数日後事件は起こった

△△^{ケイ}が死んだ

そのニュースは私達の中ではあまりにも大きなことだった

原因はあの☆^{クッ野郎}☆に屋上から突き落とされたからだ

しかもこのことはいじめによる自殺と扱われることになってしまった

お葬式も開かれたが☆☆のせいでもそれも台無しになってしまった

もうどうすればいいの？

タスケテ……？

—————

そこから数日後○○が自殺した

場所は△△^{ケイ}と同じところだった

本人は「△△^{ケイ}のいない世界なんて退屈で仕方ない。次また魂が巡り会えるのであれば

もつと平和なところで過ごしたいものだ」

だそうだ

—————

▽▽も死んだ

たまたま車に引かれたらしいが…

ホントウニ？

次の日☆☆が呼び出してきた

「ねえ□□？あなたそろそろ死ぬわよ？」

「…」

「死にたくないでしょ？そうよね？なら○○を消しなさいそうすれば貴女とだけは助けてあげるわ？」

「…そんなこと……！」

「あるわ？私は貴女たちのその苦しんでいる姿を見たいだけだもの？」

「…」

○○は死んだ

アハ……アハハハハハ

もういいや……疲れちゃったよ

□□も死んだ

そう思っていたのに私は生きていた

いや、生き返ったと言った方がいいかもしれない

赤ん坊の姿で山中に倒れていたのだ

そのまま私は村の村長に拾われた

皆が優しくしてくれた

恩返しをしたかった

その島の海軍は無能だったので私が海賊から町を守るために戦った

悪魔の実も食べた

人間もやめた

沢山殺してしまった

でも、あの日ある男の子にあった

その子が私を外に連れ出した

姿かたちが違えどやはりあの子は、ケイは△△だと。そう思う

奇跡が起きたのだ

こんな危険な世界だがまた私はあの人に会えたのだ

私のものにした今度こそは邪魔させたくない

でも私だとバレたら引かれてしまうかもしれない

ケイに前世の記憶は多分ないけど思い出させたくない。私のものにするために

フフフ：ハハハ：アハハハハハ

でももう私の手は汚れすぎている。どうしよう。でも……いいやそんな私も△△なら。ケイなら。

愛してくれるよね？

別れ

sideケイ

ついにおじいちゃんが迎えに来る日が来たこれでルフィやエースやサボともお別れである

「なあじいちゃん！もうちよつとケイ達といたいんだ！だからもう少しさせてやってくれよ！」

「いやじゃ！それに儂が仕事したせいでもうじきここにも天竜人が来てしまうからなわしやあいつらにあいたくない！」

「…わがまま」

「というわけでじいちゃん帰る！行くぞケイ、マヤ！」

「はーい」「…はい」

「あ、そういえば」

「まあ話なら船で聞くから今は急いで帰るぞ！」

「…え？」

「カクカクシカジカ」

「四角いムーブってえ？」

「ケイも能力者に!?!」

「うん」

「マジかよ」

「で、物を別空間に移す能力か…汎用性が高そうじゃな…よし!これから訓練じゃ!儂が能力の使い方を教えてやる!」

「中将は無能力者じゃないですか。それに船の上で暴れないでください」

「むう」

「じゃ早く帰るぞ!全速前進じゃっ!」

「ういーす」

sideガープ

「で?お前のとこのガキが増えた上に全員能力者と?」

「そうじゃすごいじゃろ!」

「それはいいが…ガープ自分の仕事を1年も放棄しやがって…天竜人が怒ってるぞ」

「知らん!」

「はあもういいあとお前のガキ共だが」

「例のやつか？」

「あああと1年あればできたはずだが……お前のせいであと3年はかかるぞ」

「そうか……」

「人の話を聞く時に鼻をほじるなどあれほど……」

「知らん！」

「はあもういい……そのガキ3人は私の方で動かすがいいな？」

「3年じゃな？ いいぞあと3年で少将いや中将の上位レベルまで育てておく」

「やってみろ」

side key

「この能力も難しい」

「どうしたんだ？」

「いやこの能力物を移動させるときに自分の周りに空間を作るイメージをしてるんだだけ」

「ど」

「うん」

「その時のイメージしている空間を変えられないかなって？ だって空間人間なわけだし」

その空間を支配できないかなって？」

ちなみに容量は結構多い

今もナイフを何十本かしまつてある

海楼石や海水は無理で、能力を磨けば磨くほど容量は多分増えている

「…そう言うこと？でもその前に人の武器を取れないの？」

「それはいける。ガクとマヤの所持品なら大体触らず移動させられるけどおじいちゃんとか一定以上の人だと触っても移動させられないみたい」

「どうしてなんだ？」

「おじいちゃん曰く相手の覇気が自分より高すぎるとその相手に能力が使えなくなるものもあるらしいからそれだと思う」

「まあ頑張ればできるようになるってことだろ!？」

「うん」

「だから俺らで誰が1番強くなれるか競走だ!」

「…まず僕に勝つてからいつてよ…」

「ふふふマヤ!お前をこす時ももうめのまえにあるんだぜ!」

「まずは能力の制御からかな？」

「そうだな!もつと上手く火を扱えるようになれるようにならないとな!」

「そんなお前らにじいちゃんが稽古をつけてやろう」

「おじいちゃん!?いつからそこに?」

「ついさっきからじゃそれより来るのか?」

「行くに決まってるぜ!」

「(一)いー!」

結果から言おう

無理

おじいちゃんとの戦いを簡単に説明するとまず突撃していったガクが吹っ飛ばされ、次に近くにいたマヤがやられて最後に自分の四次元ポケットから出したナイフでハリネズミみたいな感じでみを守り続けた私がナイフごとおじいちゃんパンチで沈められて終わりって感じだ

それにしても自分より格上との戦いが起きた時にもう少し起点を聞かせられるようにしないと…

どうすつかなあゝ

メモ1ページ目

第2章

・ケイ

「そーゆーのを死亡フラグと言うんだぞー」

男

2つ名（未定）

本作の主人公

8歳

110cm

身長なんてなかったんだ

銀髪

海軍の制服はオーダーメイド製

最近を着ていない

好物食べ物はカレーとか

嫌いなのはピーマンとか人参とか

一人称は私

・□□□□

「お前の買ったパンじゃなければダメなんだ……だからパン買ってきてピョン」

女

ラビラビの実の兎人間

2つ名(予定) “月夜見”

まとも枠である。まとも枠である(強調)

お調子者で語尾にはピョンがつくつピョン

好きな食べ物是人参

嫌いなものはうさぎはピョンって鳴かないぞって言ってくるやつ

12歳

152cm

一人称は私

・ガク

「俺の名前はガク海軍大將になる男だぜ！」

男

ボウボウの実の火吹き人間

2つ名(予定) // ファイアーボール
 “火の玉”

ケイと同僚の雑用

夢は海軍大将

アホ

ケイから身長の伸びを奪った(笑) 男

しかしでかい奴が多いワンプィの中ではそこまで大きい訳では無い

好きな食べ物はお肉全般

好き嫌いはいけない

16歳

190cm

一人称は俺

・□□□□□

「我が名はソルト氷原の女王なり」

女

パキパキの実の氷人間

2つ名(未定)・自称 “氷原の女王”

クールに振る舞ってはいるがただの寂しがり屋

厨二という治らない病にかかってしまっている

セリフは少し変だが8人の中ではマトモな方

好きな食べ物はかき氷（イチゴ味）

嫌いなものはかき氷（レモン味）

成分表とか見ないタイプ

12歳

154cm

一人称は我

・□□□□

「喧嘩に勝つにはより早く相手をボコボコにすることだwコツ？wコツはwあいてより早くボコスことだw他wないねw」

男

草草の実は草人間w

2つ名（未定）
草^{グラスキング}の大王

セリフの最後はwがつく

口癖は「おうおうおうw」

書いててめんどそうw

バカであり特に何も考えていないw

8人の中では1番強いw

好きな食べ物は野菜類

嫌いなものはノリの悪いやつ

11歳

171cm

一人称は俺

・

「質問を質問で返すなあーっ!!疑問文には疑問文で答えろと学校で教わっているのか

!」

男?

2つ名(予定)

金金の実の金属人間

今作屈指のチートキャラ(予定)

白衣を身につけペストマスクをつけている

また、フードを深く被っていて顔はわからない

自分の好きな金属を生み出す能力と科学力で大体のものは作れる

Drベガパンク? あいつよりすげえんじやね? (適當)
作るものは未定

最近では戦艦作って満足げ (この世界ではそんなの作るのフランキーとかの変人くらい)

便利キャラと化す

「当然だ私は天才なのだからな」

性格は明るい変人

8人の中では最弱

頭脳戦なら最強

好きな食べ物は………というかこいつの食事シーンを見たものは多分居ない

嫌いなものは中途半端な発明品

18歳

170cm

一人称は私

・ □ □ □ □ □

「それではおあとがよろしいようで」

男

土土の實の土人間（人間系）

2つ名（予定）土石流

体から土を出す

割と紳士ぶる

特に書くことがない

誰に対しても敬語をつかう

喋るのは苦手

好きな食べ物は魚介類

嫌いなものは理科

13歳

180cm

一人称は俺

・マヤ

「ハハ……アハハ……アハハハハハ!!!」

女

メラメラの實の能力者

2つ名（予定）

魔^{ダイクナイト}夜

普段は無口

怒ると怖いタイプ

今作のヒロイン

黒幕ではない

ヤンデレムーブをかましている

転生者であり、ケイとは違い前世の記憶がある

好きな食べ物はケイ

嫌いなものはいじめっ子

9歳

133cm

一人称は僕

—————

・△△

マヤの昔話に出てきた

マヤ曰くケイ

いじめっ子の☆☆からマヤと○○を守る

・○○

マヤの昔話に出てきた

最初に☆☆にいじめられていた子

厨二という治らない病にかかってしまっている

ケイが死んでしまった世界に意味を見いだせなくなり自殺してしまう

・□□

マヤ

・▽▽

クラスの中で一番うるさいヤツ

△△^{ケイ}と仲の良い友人

思考回路が少し物騒

車に引かれて死んでしまったらしいが……??

・?????

「俺も忘れんなよ」の人

特に出てきてない

・猫俣和猫

唯一名前が出てきた人

にやーの人

・☆☆

いじめっ子

語尾が伸びる

「ちよ〜ありえないんですけど〜」

親が国で有数の財閥の長であり、そいつの力で好き勝手している

殺害の罪も揉み消した

また、他人の苦しむ姿が好き

暗い過去とか考えてないただの悪人

そうゆうキャラ嫌いじゃないです

・作者

よく投稿をし忘れかける

よくグダグダになる

あまり先のこと今のこととも考えてない

ヴイレイミヤ

ヴイレイミヤ

前回からはや3年も経った

もちろん私やマヤとガクは強くなってきて、皆昇格したりしたのだがなんか特殊部隊にぶち込まれることになったらしい

急展開もいいところだが導入が思いつかなかったんだ。察してくれ

「にしても特殊部隊ってなんなんだろうな！俺すっげー気になるぜ！」

「そうだねーにしても私達3人全員移動だからねえ」

「…どうゆうこと」

「能力者3人も移動ってなーんかね」

「ああそうだなしかも俺らなーんも聞かされてないしな！」

私達は移動としか言われてない。しかも能力者3人一体何が起きるといふのだろうか

まっいつか命の危機とかでもないだろうし

「おいケイ！ここの部屋だぞ！」

「うんそうだね」

コンコン

「失礼しまーす!」

ドアを開けるとそこにはどっかの県にありそうな大仏こと海軍元帥のセンゴクさんと知らない人が数人いた

「お、全員揃ったか」

「つてセンゴクさん!?!」

「そうだが」

「なぜ貴方が」

「それはこれから話そう」

まず君たち8人は全員能力者だ」

「マジっすか!?!」

「…」

「おうおうおうwおめえらもそうなんかw」

「お前からまだ喋るな…キャラ紹介前だ…読者が置いてかれるだろう」

「…メタイ」

「最初に自己紹介からしてもらおうか。まず私はセンゴクこの部隊の発案者でこの隊の

責任者だ。じゃあまずはお前からだ」

最初に当てられたやつは頭のとっぺんからウサ耳が生えている女の子だった

「私っピョン!? まあいいっピョン! 私はラビィピョン! ラビラビの実の兎人間ピョン! 好きな物は人参! 嫌いなものはピーマンピョン! よろしくピョン!」

「兎は人参を好き好んで食べないぞ」

「そういうこと言うなっピョン! そんなこと言っちゃやっは嫌いっピョン!」

「悪い悪い! 俺はガクだ! よろしくな!」

「ガクっピョン紹介短すぎっピョン! もつと話すピョン!」

「俺の名前はガク海軍大将になる男だぜ!」

「そうじゃねえだろw」

「そうか…俺はガク! ボウボウの実の火吹き人間だ! 好きな物? はええつと……まあ色々だ! よろしく!」

「次は我が…我が名はソルト氷原の女王なり」

3人目は青髪の女の子

喋り方が少しおかしいところ以外はそんな変なところはないはず?

「それだけだと寂しいっピョン! もつと話すピョン!」

「パキパキの実の氷人間我が好物はかき氷だよろしく頼む」

「おうおうおうw次は俺の番かw?耳の穴かっぼじってよく聞けお前らw俺はウツズw面白そうなことがあれば俺を呼べw!面白そうなところに我ありw!ってなw」

4人目は緑髪の男の子特に言うことは無い

「ん〜お前の喋り方は…読みにくい!のだ!」

「…まだ出てきてないやつは喋らないで」

「そうか…ならばこの私は黙るとしよう」

今のやつは白衣を来ていて、ペストマスクだっけ?とんがってるマスクみたいのををつけている

また、フードを深く被っていて顔はわからない

怪しき100%の男?…声からして男である

「んでw?能力の説明かw?俺は草草の実の草人間w草を自由自在に操れる能力だw」

「次は待ちに待ったこの私の番だな」

「俺の能力ノーコメントw!」

「私はゴル天才である!私は日々新しいアイテムを開発しているのっだ!

最近はこの透明になれるマント略して透明マ〇トを開発したぞ!」

「なんだそれw消えられるとかチートはアイテムじゃねえかw」

「お前常に笑ってるせいで真剣なのか分かりづらいな…まあいい!この透明になれるマ

ントは！存在自体は消せない！すなわちそこにいるセンゴクみたいな見聞色の覇氣持ちのやつやただ単に感の良い奴にはみつかってしまふのっだ！」

「なるほどっピヨンでも強いことには変わりないピヨン」

「当然だ！なぜならこの私が作ったものなのだからな！なぜ私がこんなものを作れるかと言うと……私のこの頭脳と科学力の他にも私の能力のおかげもあるのだあく私の能力は金金の実の金属人間好きな金属を作り出せる能力だ。これにより以前より作れるものの幅が広がったというのだ！フウハツハツハツハ」

「……うるさい」

「ここにはういやつしか来ぬのか……？」

「言われてるぞ、ガク、ウツズ！」

「お前だよ！」

「そうか……ならば少し黙るといふもの……こうゆうことが出来るのも私が天才故……だが次えのバトンパス位はしよう……ではそのさつきから喋ってないやつ！どうぞく」

「俺か？」

「……僕？」

「んな！まさかのボクっ娘……まあいい。その男からでいいぞ」

「俺はシャス土土の實の土人間だ土と言うと自然系を思ふかもしれないが超人系だ……あ

とは特に言うことがない…か。喋るのは苦手だ」

「…マヤ」

「2人とも短すぎっピョンもつと喋るピョン」

「この作品の予定文字数を超えている…だから早く終わらせるべきだ」

「メタいつwでもマヤ…:マヤちゃんは能力位言うべきじゃないかw?」

「…メラメラの実…:自然系^{ロキア}」

「自然系^{ロキア}ピョン!?つて皆驚かないっピョン!?!」

「驚くべき事じゃねえだろw」

「自然系^{ロキア}か…興味深いものだな」

「もういいっピョン…最後その1番ちっこい子ピョン!」

「誰がチビじやい!」

「そこまで言つてないっピョン」

「私はまだ成長期なんですよーちっちゃくなんかないもん」

「これから伸びる予定だもん身長…」

「時間が押してるから早くするっピョン」

「ハイハイ。私はケイ!スペースの実際の空間人間^{スペース}だよ今は成長期だからこれからもつと

伸びるはず!いつかそこでかい奴らも抜かしてやるからな!」

「お、おう頑張れよ」(190cm16歳)

「おうおうおうw」(171cm11歳)

「俺もか」(180cm13歳)

でかいヤツらがいじめてくるう

ウツズとか年齢と身長が釣り合っていない

泣くぞ

「…大丈夫ケイはそんなちっちゃくない」(133cm)

「そんなに背の丈など気にするものなのか？」(154cm)

「もうどうでもいいっピョン」(152cm)

「皆がいじめてくる〜」(110cm)

「まずいな収集がつかなくなった…」(278cm)

「ならばこの天才がオチをつけてやろう。さすればこの回は終わり、次の回からになる

だろう」(170cm)

「どんなのだ？」

「爆発オチ」

「やめろ」

「オチがないってほんと落ち着かないなあっはっはっは〜」

「寒
い
つ
ピ
ヨ
ン」

交流

前回のあらすじ部屋が凍った

「我のせいではない」

「さて自己紹介はしてもらったのだがまずはこの部隊のことにについて知ってもらおう」

「それピョン！それが聞きたいっピョン！」

「まずはこの部隊の作成理由だが……海賊の抑制が第1だ」

「それだけなのか？」

「ああそうだ。だがいずれかはこのc pを超える部隊になって欲しいと思っている」

CPとは世界政府の部隊の1つだったはず

確かなんかこう……色々なことをやる部隊？だっけ？詳しくは忘れた

「まあそう言うことだ。お前らにはもう少し時間をやるから互いの事を知っておけ。数日後には初任務を与える」

「初任務……か……」

「そうだ。初任務は1番死亡率が高いと言うからなしっかりと引き締めていけ」

「神の加護がある我は死なぬがな」

「そーゆーのを死亡フラグというんだぞーソルトー」

「死亡フラグってあれだよな？その人の輝かしい未来を先に書くことによつてその人が死んだ時にその悲劇をより強く演出するためのやつ」

「さっきのやつはどこに輝かしい要素が……？」

「俺は元帥の仕事があるからな…あとは何とかしとけ」

「はい！」

それから数分後

sideケイ

「なあケイ君…いやケイでいいか？」

「大丈夫ですよゴルさん」

私に話しかけてきたのはメンバーの中でもいちばんよく分からない人ことゴルさんである

他の人たちはそれぞれ気になる人に話しかけたり話しかけられたりしている

ここから見えるのは

マヤとラビィ

ガクとウツズ

ソルトとシヤスは……一緒にいるけど喋ってるのか……あれ

「ところでお前は私の天才的な発明に興味はないのか!？」

「なんで私なんですか……それに興味はあまりないですよ」

「ケイ……お前のその能力……詳しくは聞いてないが空間の能力……能力により物を持たずに持てるのではないか?」

「そうだよ私の能力は物を私が作った別空間にストックさせて持ち歩ける能力だよ」

「ならば!この天才の発明品を好きなかだけ持ち運べるということ……即ち!我が天才のただ一つの弱点である全部持ち歩けないという弱点を克服できるはずなのだア〜!」

「なるほど……でもこの能力にも持ち運べる上限はあるよ」

まあそれも私の努力で多分どうにもなるけど

そういうとゴルは少し顎に手を当てて……うわっ胡散臭さすごい。その格好でそんなポーズやめてよお

「そこで。だこの私の試作品たちを試してみないか?」

「……どんなものですか?」

「私が今手渡せるのはたった2つだ」

するとゴルさんは持っていた黒いバッグを渡してきた

「これはなんですか?」

「お前がどう戦うのか分からないから簡単なものだ。開けてみるといい」

渡されたバッグを開けるとそこには

一丁の銃と二本の弓が入ってた

それにしても銃はともかく弓か

「私は弓なんて使えないよ」

「そこは頑張れ」

「急に投げやりかよ」

「そういうなその二本の弓矢は実に強力に作っておいたからな…使えればとても強くなるぞ?」

「まずはこれらの説明が欲しいんですが」

「よかろう!まずその銃だがサインと言う名前ですとつもない威力をメインに作ったのだが反動が強すぎるがまあ何とかしてくれ」

「弓の方はアポロンとアルテミスだ別に当たった相手を即死させる機能とかはついてないかな。かなり強力に作っておいたこっちは連射性を上げてある」

「そうなのか」

「使い方を教えてやるからしつかりと使いこなして見せろ」

「いえっさー」

sideガク

「で？なんだお前」

「おうおうおうw！いやー皆交流してるからおれもーつてなw」

そういうことを言っているこいつは何を考えているのかがよく分からないやつ2号
ことウツズだ

ちなみに1号はソルトだ

「で？俺に何の用だ？」

「いやw特に何も無いがなw」

「ならなぜ」

「いいだろ別にwこの世の出来事の何割かはいみのねえことだしよおwだからなんでも
いいだろw！」

「そうだな！よろしくな！」

このウツズってやつよくわかんねえけど多分良い奴だ！うん！

しかし他の奴らのことも早く知りたいな！

sideソルト

「何か喋ったらどうなのだ？」

「お前はよく分らないからな」

「お主が言うか？」

「そうかもな……」

それにしても他の人たちがペアで話を始めてしまつては我の入る余地なし……か。

それにしてもこの男ほとんど喋らないし表情もよく分からない。なんなのだこの男は

こんなやつとやつて行けるのだろうか

sideシャス

この女はなんなのだ厨二病もどきみたいな喋り方をしているし表情からも何考えているかが読み取りづらい

だからといって話しかけづらい

別に俺がコミュ障という訳では無い

あれだ。人と話すのが怖いのだ

気がついたら相手を傷つけてしまひそう

他の人も胡散臭いやつがいたりテンション的にダメなやつがいたりするしどうして
いこうか

sideマヤ

…ねえラビィ

「なんだっピョン?」

…いや猫俣……と言った方がいいかな?

「……どうしてそれを」

…ピョンはどうしたの?

「ピョン」

…それなら簡単だよ君は何も変わってない

「どこがっピョン」

…もういいでしょ君には言いたいことがある

「何ピョン」

…ケイは□□だよ

「ピョン!?!」

…でもあのころの記憶が無いから

「思い出させるなってことピョン?」

…そう

「別に私には思い出ししてもらっても損は無いつピヨン」

…前世の君がケイに好かれてるとでも

「そうだったピヨン」

…君が……かい？

「はあ……わかったつピヨンそこは協力してやるつピヨン」

…助かる

「でも□□は……いやケイだっけ？は私のもつピヨン」

…その妄言はもう聞きあきたよ

「そうピヨンか」

リーダー

前回からはや2日私たちは最初の任務の説明を受け終わった頃のこと

最初の任務はどうやら近くの島を拠点にしている海賊の討伐らしい

センゴクさん曰く「まずは簡単な仕事で仲間間での連携を高めてこい」ということらしい

それにしてもこの人達で大丈夫なのだろうか

それより私はこの前の新装備を試してみたい

ケイ「それにしてもこの部隊の人だけで船に乗つけられるとは」

ラビイ「航海士がいないっピョン」

シヤス「なぜ上はこれで出向させたのだ」

今いる海はグランドラインとかいう海で気候や海の流れがバラバラで、晴れていたのに5分後には急な嵐とかがぎらにある海だ

ゴル「何故か教えてやろう！何故ならこの私は航海術もできるからなのだア」

ガク「万能すぎるだろ」

ゴル「この天才を褒めるが良い」

ケイ「ワースゴイナー」

ウツズ「着く前に1つ決めときたいことがあるw」

ガク「ん？なんだウツズ？」

ウツズ「この船のwこの部隊のリーダーだw！」

ケイ「な！」

ラビイ「つうかそれ決まっていなかったんピヨン!？」

ウツズ「という訳でこの俺がリーダーに立候補するぜw」

マヤ「…却下」

ウツズ「なぜにw!？」

マヤ「…貴方がリーダーじゃバカすぎる」

ウツズ「そんな直球にw」

ラビイ「確かにっピヨン。リーダーになるなら部隊での指揮をとったりするかもっピヨン」

ゴル「ならばこの私…天才が」

ソルト「却下」

ならば残りはラビイ、ガク、ソルト、シヤス、マヤ、私か
ウツズ「じゃあ誰にすんだよwどおしてもってなら俺が」

ラビイ「却下っピョン上に立つとなればコミュ障の2人もだめっピョン」
シヤス「俺か」

ソルト「我もか」

マヤ「…僕もやりたくない」

ケイ「残りはラビイ、ガク、私ってことになるの？でもこうゆうのってやる気がある人の方がいいんじゃない」

ラビイ「やる気があってもできなきや意味ないっピョン」

ゴル「ならばこの私はガクを推薦するぞ」

ガク「俺ですか？」

ゴル「なぜなら！ガクは私たちの中でも割としつかりとしている方だからだあくそれに年齢もいい感じにあるしな」

ガク「貴方の方が年上では？私はまだ16ですが」

ケイ「でかつその歳でその身長か」

羨ましすぎる

ラビイ「えっピョン私はケイがいつピョン」

マヤ「…僕も」

ケイ「なぜ私」

ラビイ「それは……ガクより頭いいっピョン」

ガク「酷い」

ケイ「それでも私だと年齢的にダメなんじゃ」

マヤ「…役目に歳なんて関係ない」

そういうマヤだがなんか目が怖い

肉食獣みたいな目しやがって

ケイ「私だと見た目的に部隊に泊がつかないだからガクの方が見た目的にも中身的にもいいと思う。それにガクは大将になる男だし」

マヤ「…むう」

ラビイ「そこまで言われちゃ仕方ないっピョン」

マヤ「…皆…いい？」

ウツズ「いーよーwじゃねえよw！なに勝手に決めてくれちゃってんのw!?俺がやりたいて言ってるんだろw！」

ラビイ「はーい大人しくするっピョンめんどくさいやつは嫌われちゃうピョン」

マヤ「…シヤラップ」

ウツズ「ダアーもういいw！勝手にしろw！」

ラビイ「はーいじゃ！今回のミッションのおさらいっピョン！リーダーよろしく！」

ガク「お？俺かよ！はいはい！この作戦の要点はこうだ！」

今回の目標はある島に停泊している海賊団の

拿捕だがそれが難しいのなら賊の生死は問わない

今回の作戦において1人数十人は倒してもらうので気を引き締めて置くように

海賊団の船長ヨタと副船長ゼタと幹部であるエクサとベタの4人は賞金首となっており額はそれぞれ8000万、5400万、2500万、1300万ベリーとなつてい

る
特に他の補足はない。しかしとにかく船員の人数が多いらしいので頑張つて

マヤ「…最後適当」

ガク「すまんすまん！こういうの慣れてなくてな！」

ケイ「それにしても8000万か」

ラビイ「どうしたっピョン？」

ケイ「いや、数年前に戦つたのが3000万だったけどかなりの強さだったからね…」

ラビイ「そう言うことっピョンか」

ウツズ「まあ楽勝だろうなw」

シヤス「何故だ」

ウツズ「なんせこの俺は前に9000万の海賊を仕留めてるからなw！」

シヤス「油断しない方がいい…」

ウツズ「どうゆう事だw?」

マヤ「…懸賞金の額は強さじゃない」

シヤス「そう言うことだ…懸賞金の額は政府への危険度…強さに直結する訳では無い」

ウツズ「大丈夫だろwなんたって俺だしなw」

ゴル「おいウツズ世の中には慢心ダメ絶対とかいう言葉もあるんだぞ!ならば気を引きしめる他何のであろう!まあこの天才に隙は無いのだからなあ!」

ラビイ「あいつらもうだめっピョン」

ケイ「それよりも作戦考えとかないと」

ビツクリ箱人間

前回から数日後のことである

「そろそろ着くぞー!」

「到着したら何が起こるかわからんからな! 準備しとけ!」

「それじゃ上陸するぞー!」

(*)「>D<」オー!!

と言つても上陸まではまだまだなんだけどね

上陸

「裏に船つけたぞー!」

「おうそうか! では皆言った通りにペアで事前に決めといたルートで頼む! 緊急時は連

絡を!」

「はいはい」

「ではケイ行くぞー!」

「はいはい」

私一人なら持ち前の速さをいかして行くんだけど何せゴルは基礎能力が低くてあまり動けないからゆっくりに行こうと思う

「私が渡しておいた子達はどうだ？」

「大丈夫です！それよりゴルさんは戦えないんですよね？」

「戦えないと誰が言ったのか？こんなやつでも戦えるように戦闘がある時は武装をしているぞ〜」

「マジすか」

「この天才に抜かりはない！」

「どのくらい行けるんですか？」

「そうだな……じゃあ私の実力を見せるついでにそこら辺の賊でも始末しておこう。ああケイ君は何もしなくてもいい

では参る」

そういうと同時に木の裏や草むらから出てくる海賊達

飛びかかってくる者、まだ陰に隠れてこちらに銃口を向けてくるもの、ただ距離をとって様子を見ているものなど様々だ

対してゴルは既に腰にかけて置いた二丁拳銃を抜き飛びかかってくる者に一発二丁拳銃の片方からは弾は発射されていない代わりに出てきたものは空気だ

いわゆる空気砲と言うやつだ

右前方から来ていた海賊を吹き飛ばすと同時にもう片方の銃で左方面の海賊も吹き飛ばす

両方空気砲だがおかしいのはその威力である

1 発撃てば3人は飛ばす。そんな威力がそれにはあった

「流石はこの私の発明品！素晴らしい威力だ」

「な、なんなんだお前！」

「なんだかんだと言われたら答えてあげるのが世の情けと言うやつだな。よかろう！我が名はゴル！今の銃はcosとtanこの前そこにいるケイに渡したものの片割れのようなものだ……このくらいで喋るのはいいか？」

「ふざけんな！なんなんだてめえら！そんなんで分かるか！もつと詳しく言えや！」

「質問を質問で返すなあーっ!!疑問文には疑問文で答えろと学校で教わっているのか！」

「どつちかと言うと命令文だと思おうよ」

「そんなささいなものはいいのだ。それよりもアイツらと喋っている暇などないのだ。というわけで速攻で決めさせてもらおう」

そう言うと共に海賊達がいる方向に数発撃つだけで戦闘終了だ。実に呆気ない戦い

だった

「早いねゴルさんなかなか衝撃的だったけど強いんですね」

「そんなこともあくるだがまだ戦闘は終わってないはずだ。私のリーダーによればまだ向こうに1つ生命反応がある」

「本当!?!」

「天才嘘つかない」

「そうなんですか。最後の1人もゴルさんがやりますか?」

「うむしかしなかなか強そうだ。顔が手配書と一致しているし幹部だろう。幹部だからといって私だけでも多分平気だがこんなところに現れるとは……ケイ君。君の強さに見込んで頼みがある!先に奥に行つててくれ!君なら平気だ!」ここは俺に任せて先にいけ!」つてやつだなあ」

「大丈夫なんですか!?!2人で早くやつてしまった方が」

「大丈夫だ問題ない」

「それダメなやつ」

「とりあえず行つてこーいここに幹部がいるつてことはこの先には何かあるはずだあ」

「わ、分かりました!」

「さあ始めようか？ エクサ君」

「あ？ お前はともかくその餓鬼にも先には行かせねえよ」

「守る……ということはやはりこの先に何かがある……ということだなあ」

「どうだかよ」

相手が話を終える瞬間ゴルの肘部分の武装から機銃らしきものが出てくる

どこからでも武器が出てくるのだろうか？ そうだとしたら全身ビツクリ箱人間と言つても差し支えないかもしれない

ドドドドド

という音が響く

だが当たらない相手側が中々速い

しかし相手は避けるに徹している。その隙があれば……先に行くことなんて簡単だよ

sideゴル

肘当てから出した機銃らしきもので相手を狙うが中々……というか1発も当たらない

い

これだからこの世界の奴らは嫌いなんだ。銃を普通に避けるな！ 身体能力おかしいだろ！

まあいいこの天才に不可能はないのだ

銃撃が当たらないなら数を増やせばいい。性能を上げればいい。距離を変えればいい。いくらでも対処法はある

次の武器を出すことにしよう

何とこのマスク目の部分からビーム的な何かが出るように作ってある

目からビームは浪漫だと知り合いに教わったことがあるからな。そこら辺は抜かりない

浪漫もわかる天才それがこの私なのだからなあ

「それにしてもこれも避けるのか」

「なんだよお前そのビーム！どうやってんだ！」

「貴様のようなものに教える義理はなあ〜い！その極小脳味噌で考えておけ！」

「誰が極小脳味噌ジャイ！」

その言葉と共にエクサの蹴りが飛んでくる

こいつは武器など使わない物理型なのだろう

実に愚かだ。素手でできることなど限度があるだがそんな相手にも手加減をしてやる私では無い

よって

全力で潰す

それに限る

そもそも相性が絶望的なのだ近接メインの素手に対しこちらは遠距離メインの武装である。負ける道理がない

まあ万が一いや億が一兆が一いいや……京の上ってなんだっけ？まあそんな大きなもの覚えていても意味が無いのだア！

まあいいつまるところやられてしまったとしてもその対策くらいしているに決まっておろう

つまりこの私に負けはない！ああ素晴らしいのだア

「この間わずかコンマ2秒！」

「何言ってやがる」

相手がこつちに来るのなら簡単だわざわざ近づくって来る的をうち落とせばいいだけなのだ

「お前ごときにこれを使うのは少しもつたないかもしれないが一応お前も2500万念を入れといてもいいだろう」

「ああ？」

「貴様に地獄を見せてやろう // 月月火水木金金」

ゴルの体の仕込み武器たちを使い倒す技

目からはビームが

肩からはバズーカーのようなものが

掌から砲撃が

腕からモリのようなものが

腹から火を吐く

膝からビームが

足から棘が

それぞれ飛びでる

「私は殺生が嫌いだな殺しはしてない安心しろ……つて聞こえてないか」

「それにしてもこの技は出費が痛いのが弱点だな。まあそれもこいつの首で数回分が十分賄えるだろう……。だから実質弱点無し最強だあ！」

フウくはっはっはっはっく

思ったより早く終わってしまったな

これなら少し時間がある人の目もないし今のうちに少しやりたいことでもやつとい
てしまうか

フウくはっはっはっはっく

……この笑い方どうにかなんないかな

根っこ

side ガク&ウツズ

「俺たちは街の方へ突っ込んで陽動だな！」

「足引っ張んじやねえぞw」

「おう！お前もな！」

ガクとウツズの2人はあのメンバーの中では実力上位なので少し危険かもしれないが陽動という役割となったのだ

2人の役割は簡単馬鹿なウツズでも分かるものとなっている

見つけてぶっ飛ばすただそれだけだ

実際この話の間にも既に10数人の下っ端であろうものは倒している

「それにしても弱えなw！」

「あんまり油断はするな！何かあるかはわかんねえぞ！」

「そうかもしれないがよw？実際楽勝なんだしw？」

「はあお前ってやつは……まあ仕事に支障がないならいいけどっ」

こんな会話をしつつそこら辺の奴らを吹き飛ばしていく

實際市民は島の端の方に避難しているのでここに居る人間は大体が海賊である

もし逃げ遅れた市民だったとしてもこの時のガクとウツズには気づけないだろうが

※一応向かってくる者のみぶつ飛ばしています

そういう間に敵さんのお出ましである

「おいおいあいつらじゃねw? 手配書と顔似てるし」

相手は副船長と幹部の2人相手にとつて不足は無いのだが

「そうだな! おいお前たちはゼタとペタであつて居るか!」

「ソウデスネ……トイッタラ?」

「……」

「ぶつ飛ばすw!」

「行くぜ! 先手必勝! “火炎弾”」

ガクの掌から炎が吹きでる。それが弾となり速さを増して相手へと向かつて飛ばす

「行くぜw “大根”」

それに対してウツズは地面に片手をつく。そうすると地面から大きく太い木の根の

ようなものが地面を割りながら出てくる

その根で相手を潰す

よりも早くガクの炎が直撃してしまい木の根が燃え尽きてしまう

「てめえ何すんだW！俺の根を燃やしやがってW！」

「ごめんごめん。でもいきなり出されても分かねえよ。火は吹けるけど制御は余りできないんだよ」

「そこは何とかしろW！とにかく俺の足を引っ張んなW！」

「ハイハイじゃ先に攻撃よろしく」

「チツ 棘魔棘」

そう言うと同時に今度は木の根は木の根でも細く鋭い根が地面から出てくる

しかしその程度じゃ当たらない

「破苦去異」

棘の先端が爆発するこれなら多かれ少なかれ逃げ回る相手にも被害があるはずだ

ペタの方は少し怯んでしまったがゼタの方はそれすらも避けてくる

「ちっ 多舞練戯」

爆発してなくなってしまう根がまたぐんぐんと伸びペタの四肢に絡み付く

ゼタの方はその攻撃をのりくらりと交わしている

ウツズはなかなか当たらないことに嫌気がさしたのか根の量を増やしていく

ちなみにペタは根の物量に押し潰されている

副船長は根の攻撃を巧みに避けつつ内ポケットから拳銃を取り出し発砲してくるが

木の根で防いでいる

「メンドクサイドスカラスコシツメマス」

そう言うと共にゼタは木の根の隙間を縫うように突撃してくる

すかさず木の根で迎撃しようとするが大量の根を使ってしまったので精密な作業が出来ず、なかなか捉えることが出来ない

そこをついてゼタが急接近してくる

ゼタは接近しつつ手のハンドガンを打ってくる

打ってきた弾はガクの炎によって溶かし無効化はしたものの本体が飛び出してくる

「お前炎はやめろW草が燃え尽きるだろW!」

そんな事を言っている間にゼタはもうウツズの目の前に出てきてしまっている

「なあW!」

気づいた頃にはウツズの腹にゼタの拳がめり込んでいた

「グハアW」

吹き飛ばされたウツズはバウンドしつつ後ろに吹っ飛ぶ

人1人が吹き飛ばす威力。決して低くないそれが腹に直撃してしまえば普通の人ならばすぐには動くことすら出来ないであろう

しかしウツズは体にくる衝撃を受け流せるように戦闘時には体に薄くても丈夫な草

を巻き付けているのでダメージは抑えられた

元々これは自分の技で自爆しないようにするためのものであったがそれが今役にたつたのだろう

ゼタはすかさずに追撃しようとするがガクが火を吹き出すことにより阻止する

「やらせねえよ！」

「ジャマデスドイテクダサイ」

「断る！悪いがウツズ根借りるぞ！」

ガクの体から出た火がウツズの作り出した根に引火してしまう

引火したことにより根が燃え始め、多量の煙が出始める

端の方で伸びかけていたペタに炎と煙というトドメをさしたのを知るのはもう少し先のお話である

煙が出たことによりゼタの動きが止まるが逆にガクはその動きを活性化させ始めた

「うおおおおお！ 火炎弾！」

煙により見えないところからの攻撃は少しづつでも確実にゼタの体にダメージを与えて行つた

「コザカシイ」

そういうゼタの体は燃えており、煙の中でも格好の的である

「そこか！行くぜ！

〃^{フレアドライブ}火炎特攻弾〃
！」

渦潮

sideソルト&シヤス

あまり喋らない2人という作品的にとても困るようなとても楽なようなペアな2人のチームの役割は船番というなんとも面白げのないものであった

2人の能力を考えれば先頭に出てもらった方が良かったのだが何せこの2人自己主張がなかったので余った船番をやらされているという訳である

「

」

この2人の共通点コミュニケーション障により船内での会話はゼロに等しい

時折ソルトが「風がないている」とか言っているがシヤスは無視である

逆にシヤスの「暇だ」という言葉はソルトの「そうだな」の一言により一掃されてしまっている

静まり返る船内に気まずい雰囲気溢れる

「トランプでもするか…?」

「他のやつらが仕事申中なのに我らが遊んでいる暇はないはずだ」

「そうだな…」

「」

「」

再び船内は静まり返る

しかしこのような会話は作戦開始から5、6回目である

そんな会話に飽きてきた頃の話である

最初に異変に気づいたのは望遠鏡を使い海のその先を見ていたソルトだった

「む…何か見えるぞシヤス！」

「本当か…？…？…こっちはなんともないぞ」

ソルトとは逆に陸地の警戒をしていたシヤスが反応する

「なんかの船に見えるが…：…帆に書いてあるマークがよく見えないせいでのなんの船だか」

「大丈夫なのか…？」

「なんの船かは分からないが恐らく武装はしてるように見える先頭にでかい砲塔のようなものが見え——」

ソルトが見た船は帆にドクロはなくなにかのマークのようなものが書いてあるだけ

の船に見えるがよく見ると船の先端は大きい砲塔が付いており船自体も鉄で覆われている

「——るって打ってきた!？」

その瞬間砲塔の先から1発の砲弾が打ち出された

の다가とつきに氷の壁を出したソルトによって止められる

「フツ」

「あの距離から打ってくるとは……ここからではゴマにしか見えないぞ」

「防いでなかったら直撃だったな……当てる狙撃手も凄いがそれと可能とする大砲も大砲だな」

この船と相手側の船の距離の差は決して少なくなく、なんなら大きすぎる

「2発目が来ない」

「無駄だと判断したのか……?」

1発打った後は2発目が来ずにただ船の距離を詰めてくるだけであった

船内が緊張感で張りつめる中時間だけが過ぎていく

その間にも船同士の距離は詰まっていく

お互い砲撃戦ができるであろう距離になるがお互いの動きはない

もつと距離が詰まりほんの数メートルの距離まで船が近づいてきたとき相手側の1

人が船の先端に立ち話しかけてきた

「こちらはしががない商船ですが、あなた方はどちら様でしょうか？」

「しががない商船が砲撃をするか……？」

「そつか……まあそんなに簡単に答えてくれると思つてないしいいや！少し暴れるから言いたくなつたら言つてね！」

「海軍」

「そう……なら死んで」

そう言うと共に相手が降りてくる

その数はたった1人。船員はまだ他にもいるはずなのに1人しか降りてこなかった

「私の名前はマシクト！よろしくね！まあ、すぐに縁が切れるかもしれないけど」

「……!!」

何かを察したのかソルトが急いで氷の壁を展開する

マシクトが指をくるくると回すと海流が荒れ始める確認のためにシヤスが外を見ているとそこには大きな渦潮があつた

「ふふっ行つくよー！」

大きな渦潮は決して大きくないヴィイイミヤ

の船を飲み込んでいくマシクト達の船は気づけばもう遠くにはなれてしまつている。

船の先から3人ほどが島に飛び出していくのが見えた気がした

「これはまずいぞ……」

そういうシヤスの能力は土を体から生成するもしくはそこにある土を操る能力なので、海上での戦闘には向いていない

ソルトの能力は海上でもまだ使えるが、この渦潮を止めるほどの威力はない

ソルトが出鱈目に能力を使うが渦潮は止まりそうになく、船ごと飲み込まれてしまった

マシクトはと言うと渦潮の流れを弄り、自分だけ島に上陸していた

マシクト本人は上機嫌である。なぜなら自分に与えられた初の任務で邪魔になるであろう海軍の船を沈め、さらには能力者らしき人を1人海に沈められたからである。あの渦では恐らく2人とも命はないだろう

島の奥に向かって歩き出そうとするとマシクトの足に変な感触があった

気になって自身の足を見てみると、沈めたはずの男が足にしがみついているのである
マシクトは足を振り払おうとしたがなかなか離れない

鬱陶しくなったマシクトは能力を使おうとしたが能力を使えない。海を見ると自信が操れる範囲から少し離れたところまでの海が凍っていた

これでは能力が使えないので場所を変えるしかない

右側に走ろうとすると右側の地面が盛り上がり壁になり左側は氷の壁ができていた。能力を使わずに移動も出来ないとなると大きな渦を使わないで能力者2人を相手にしないとならないのが辛い

辛いだけで勝てる自信がマシクトにはあった。ポケットに入っている瓶を日本取り出し中の水を周りにばら撒き、その水を能力によって回し渦にする

「行つくよー!」

二兎追うものはなんとやら

side マヤ&ラビィ

「…なんで僕は君となんだろうか」

「いいじゃないかっピョン楽しくいこうピョン」

「…難しいかな」

「うーんマヤは昔から硬いっピョンもつと柔らかくしていかないとみんなから孤立して行っちゃうピョン」

「…だいじょうぶだもん……………」

「ほんとっピョン？」

「…だいじょうぶだもん……………」

「もういいっピョン深くは言わないっピョン！それより何かないっピョン？さつきから暇すぎてあくびが出るピョン」

マヤとラビィ達は作戦開始から殆ど敵と出会ってなく、気が緩み始めていた

「…猫又しつかりして」

「…その名前で呼ぶなっピョン何年前のものっピョン」

「…2人の時しか使わない」

「だからどうしたっピョン」

「…油断大敵」

「まあいいっピョンでも近くには誰もいないっピョン。なんの音も聞こえないっピョン」

ラビイの能力ラビラビの実は能力は動物系である

動物系の能力は主に人間形態、獣形態、人獣形態の3つに姿を変えることが出来る

ラビイの能力は人間形態は普通の女の子だが人獣形態はうさ耳が生え、聴覚が鋭くなり、遠くの音も正確に聞き取れるようになるのである

その能力で今ラビイは敵がいるかどうかの索敵をしている

「音なんてしてないピョン音を出さずに動ける奴なんて忍者くらいっピョンね、マヤ…ってあれ？」

後ろを振り向くとそこにマヤの姿は無かった

しかし見えないだけでマヤの音はしている

「どっっピョン!?!」

音をたどっていくと下方に小さな人影があった

「マヤっピョン!?!」

それは小さくなっているマヤだった

「どうしたっピョン!？」

「…ラビイ後ろ！」

「ピョ!？」

音を頼りに体を右に捻る

そこには小さな人型の生物がいる

「誰っピョン」

「ちつ外しましたか…まあいいでしょう片方できたのでいいですかね」

「…能力者」

「ん？そうだよ俺ちゃんはワガカ。チビチビの実際の能力者だよんその能力で君を小さくしたんだ。今は気分がいいから教えちゃうけどこの能力ただ小さくするだけじゃないんだ。何とこの能力発動した相手の筋力は勿論戦闘力なども小さくできるんだ。発動条件は少し触れるだけでいいのもこれまた強いんだよね」

私の戦闘方法は主に蹴り技である今はマヤのアホは小さくされちゃってるピョンし私も触れられないのでは戦闘にならないピョン……

「こうなったら逃げるが勝ちっピョン!!」

「……ラビイ!？」

「無理っピヨン勝てないっピヨン勝てる自信ないっピヨンだから逃げて代わってもら
うっピヨン」

「……」

「ちよつ俺ちゃんから逃げるなつて。とうかお前ら海軍だろ。？逃げてて恥ずかしく
ないのかよ。」

「？何言つてるピヨン？なんでも1人でやる方がダメっピヨン。なんでも1人でやると
お腹痛くなつてトイレ行きたくなるっピヨン。そもそも人には向き不向きがあるっ
ピヨンできないものは他の人に代わつてもらうっピヨン!」

だからとりあえず誰か探すピヨン

ケイとかが当たりでガク辺りがハズレっピヨン

……にしてもなかなか早いつピヨン少しくらい足止めした方が楽っピヨンね

「ピヨン!」

私は近くの木を蹴り倒した。続けて走りながら木を蹴り倒し続ける

これでいくらかは逃げやすくなっているはずピヨン

……そう思つてた時ピヨン

「……ええ?チウコのおつちゃん?ああ今うさ耳の子をおつてるよ。………へー1人

倒したって。？どんな子。名前は。？へーケイ君かそうかお仲間が捕まったとなれば止まってくれるかな。？で、今どこら辺。？……OK OKすぐ行くから待っててねん。」

ピヨン!?……あのケイがつピヨン！嘘つピヨン絶対嘘つピヨンでもなんでケイの名前を知ってるつピヨン？もしかして……ホントなら……ダメつピヨンマイナスな感情を出したら相手の思う壺つピヨン……ダメピヨン静まるつピヨン……

気づけば私はあいつの顔に蹴りを入れていた

「ケイ……つて言ったピヨン？本当ピヨン？知ってるなら教えるピヨン。早く早くはやくハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤクハヤク！教えるつピヨン」

「なんだよお前。でもいいよ連れてつてあげる。でもそれは小さくなってからだけどね？」

「マヤー！」

「…分かつてる援護はする」

「任せるつピヨンじゃ行くピヨン！」

その時電流走る

前回より数分前の事である

side key

数分前にゴルさんと別れてからは特に誰かと会うわけでもなく島の中心部に行くことが出来た

どうやら島の外側に比べ内側の守りが薄いようだ

もしくはガク達のおかげで人員が外にさかれてくるかだがないのなら別にいいやそれにしても敵の船長の名前なんだっけもう一ヶ月くらい前の話だから忘れちゃった

あ、懸賞金8000万ベリーのヨタだっけ

そんな奴いた気がする

私は島の中心部に着くと辺りの気配を探る

「私は海軍の新設特殊部隊ヴィリイミヤの隊員のケイです！海賊、電撃のヨタ出てこい！」

電撃とはヨタの2つ名らしいビリビリの実の電撃人間という能力者らしい

名前からして恐らく電気使いなのだろうから気をつけなきや

つつつ！

体に電流が走る

どうやら後ろから攻撃されたらしい。そりやそうだろう何も無いところで叫んでいたら格好の的である

「雲母片岩」

私は電撃が飛んできたであろう方向に岩を落とす

能力で別空間にストックした岩を落としてるだけの技である

残念ながら私はまだ見聞色とか使えないので場所までは分からないのである。だからそれっぽい方向に落とすことしか出来ないが打てば当たる精神で岩を落とし続ける

？
 そういえばマヤはよく私のいる場所を当ててきたな……見聞色でも持つてるのかな

でもそんなこと聞いた事ないけど……

閑話休題

多分ヨタには当たってないはずだ感触的に分かる

岩に感触ってなんだよと思うかもしれないけどそうゆう能力だから仕方ないねレ

結局ヨタはどこが分からないから探すしかないのか

とか思ってたら目の前には手配書で見た顔があった

「え？」

ドゴツ

鈍い音が辺りに響く

腹を殴られたのか蹴られたのかは分からなかった

恐らく電気とおなじ速度で動いたのだろう

打撃をしたところに電気でも纏っていたのか攻撃を受けたところが痺れる

「ワツハツハツハハ！どうだ！俺の一撃は見えたか？殴られたところが痛いだろ？痺れるだろ？海軍さんよ？パツと見ガキだが俺は女子供でも容赦なく殴り殺せるぜ？」

「誰がガキだ！もう8歳だぞ！」

「ガキじゃねえか！天下の海軍様がこんなガキにまで戦わせるとわ……狂ってるな」

「狂ってなんかない！みんなのために戦うんだ！」

「若干洗脳してんのか？これ。おいガキどうしてもってんなら止めはしないが就職は大事にしろ！海軍、海賊なんてろくなものがいねえぞ！俺が言うのもなんだがな」

「知るか海賊お前みたいのが居なくなればいいんだ！」

「それも一理あるけどよお」

ヨタは自分の頭を書きながら言う

「時間のこともあるしそろそろ行くよ！ 紫電一閃！」

相手との距離を一気に詰める

「肥後守」

「雷装」 雷槍

私のナイフがヨタの作り出した電気の槍にぶつかると私の体に電気が流れる

その電撃は決して小さいものではなく打ち合うたびに体が痛い

一撃は相手の方が重いが速さはこちらの方が少しだけはい

ヨタの攻撃を流し続け、ヨタの腹に一撃を入れた

「グワアアアアアアアアア」

体が痛い。痛い。痛すぎる。体中に電撃が来た痛みで何も考えられない

ふと体に浮遊感がした

恐らく後ろに吹き飛ばされたらしい

しかし体が麻痺して痛みがなくなってきた

「俺の雷装は電気を体にまとう電気の鎧だ。触れたら感電じゃすまねーぜ？」

あいつの槍に触れても感電体に触れても感電するんじゃないや物理ができない

入れられても痺れのせいで深く一撃を入れられない

何発も入れようとするならそれこそ死んでしまう

「なら……遠距離で……」

ゴルさんから貫った銃を取り出す

確か名前はサインだっけ？威力が高すぎて普通に使うと肩が取れるらしい
なら……

私はサインを空中に固定し、ヨタに向ける

引き金のところに今取り出した小石を勢いよくぶつけ発砲する

ドゴオン

轟音が轟、辺りが煙に包まれる

ハンドガンの威力じゃないでしょこれ

なんてもん子供に持たせてくれたんだバカヤロー

「いやー凄く驚いちゃったよまさかあんな爆発が起こるなんてね。でも当たらなければ
なんの意味もないよ？」

ヨタには当たっておらず横に立たれている

「ほらっ俺の雷槍をあと数センチ下げれば君の首をおとせるよ。これでわかったでしょ
？俺達の力の差。早くお家に帰りなあって俺も子供とか殺したくないし」

「女子供でも容赦なく殺すんじゃないか？」

「あれは威嚇みたいなものでしょ。人を殺すとかしちやダメだよ」

「海賊がなにを」

「ふふーん俺はその辺の奴らとは違うからね」

「でも逮捕するっ」

ヨタの横に出したサインでヨタを打つ

が、当たらなく地面を抉る

土煙でヨタの場所が分からないので気配を探る

ザツという音がした気がし、そちらの方向にサインを打ち込む

しばらくし、煙が晴れるとそこにはヨタの姿はなく、代わりに黒いドームのようなものがあつた

「何あれ!?……ん? お前がやったんじゃないの?」

そこに驚いている様子のヨタがいたのでヨタ及びその仲間の仕業ではないと思う。私の仲間でもないはず

「ああ。せつかくこんな島の奥に来てやった瞬間爆発とかついてねえなウィツプ」

黒いドームの中から白髪で上裸で、手にひょうたんを持ったおっさんが出てきた

「んああ? 海軍かてことは船場にいた奴らの仲間か? ウィツプ。うあーもういいやとりあえず飲むか」

そういつつ手のひょうたんの中身を飲む

「ああ？俺か？俺はチウコ炭炭の実の炭人間だ。海軍とヨタさんよオスマンが船場に
あつた船は沈めたし、お前らの部活達はみんな俺か俺の部下が潰しているところだ
ウィツプ」

「船場つてことはソルトとシヤスを!？」

「そいつらが誰か知らんが船にいた青髪の女とガタイのいい男は沈めたぞ？」

「嘘……あの人達がそんな簡単に沈められるはずが」

「あるんだなあこれが。あ、酒なくなつちまつた予備だそ予備だそ。で？なんだつけ？
ああそうだそいつらは沈んだ。だから今俺がここにいるそうだろ？」

「つ……」

「俺から1ついいか？この島に何の用だ」

「ああそれはお前だよヨタクンウチに泥塗つてくれちやつて部下たちへの被害がすごい
んだよ」

「だからお前はなんなんだ！」

「ホニのメンバーさ」

「ホニ……？」

「ああ？知らねえのか？海軍ホニはなあ未来の歴史の改変と復讐のためにできた組織だ
今は規模も大きくないから各方面に武器等売りつけて組織の拡大をしているところ

だ。ちなみに幹部が47人もいる」

「ザンクに武器を流したのはお前らか」

「？誰だそいつ…… まあその武器が海楼石製だったら十中八九うちだな」

「ふざけるな！お前みたいなのがいるから世の中が乱れるんだ！」

「そうか。そうかそうかそうか!!ならお前俺を潰してみろよ？」

「お前もヨタも逮捕する！」

くつ勝てないかもしれない…… なら私は勝つためにただ
ひたすらとお前の嫌なことをするぞボケエ！

side key

「お前もヨタも逮捕する！」

そう言ったらしいものの私が今出せる最大威力の技はヨタには当たらなかつたし、前のおっさんには防がれた

つまり私にはダメージを与えられるであろう方法がない

なんだよ銃撃避けるって頭おかしいんじゃないの？あ、体か

連撃もヨタは体に電流を纏っているので攻撃したらこっちがダメージを受けてしま
うし、おっさんの方にはそもそも効くとは思えない

まだ一応ゴルさんから貰った武器はあるけど威力はさっきのサインの方が高いから
おっさんには効かなそう

もしこれでヨタを倒せたとしてもおっさんが倒せるとは思えない。私が今出来るこ
とは仲間が来るのを待つか漁夫の利くらいになるのかな

でも8人しかいないメンバーの2人がやられてしまったっていうし、こいつらの他に

も何人いるかわからない

それだと増援は無理かな?

「おいお前危ねえって!!」

一瞬の浮遊感と共に後ろに飛ばされる

しかし不思議と痛みは無い

飛んで行つた先から元々居た地点を見てみるとそこには沢山の黒い棘が生えていた

もしずつとそこに居れば今頃串刺しになっていたのだろう

「ぼーつとするな海軍! 危ねえぞ」

ヨタの立ち位置が変わっている。攻撃が来る時に私を後ろに飛ばしてくれたのだろ

う

「どうして私を」

「もうやらねえからな! それに子供に目の前で死なれたら後味悪いしな」

「... そうか... なあヨタ私はあなたが8000万もかけられる罪人には見えない」

「まあ政府には嫌われてるだろうがよ。どう思われようが俺は俺のやりたいことをした

いだけだ。その時に懸賞金はかけられちまったが後悔はねえ方に背いた俺が悪い」

「... そうか。なあヨタ私はあなたよりもあつちの賊を優先したい。私情が入つ

ちやつて海軍としてはダメかもしれない。だけど私はあなたより先にあの人を逮捕し

たい。だから力を貸して欲しい。お願いします」

「俺としては逃げて欲しいがよ。どうにもあいつは俺一人じゃどうにもならねえ。少し手伝ってくれ」

「了解」

こう喋っている時相手はまだお酒を飲んでいた

お約束守ってくれるのはありがたいけどこころも余裕そうでいられると少し傷つくかな

「『紫電一閃』」

私はあいつを倒すために接近する

相手はお酒を飲むために上を向いている

(当てられる！)

私は相手、チウコの腹にナイフをふる

「『ファスニング・ボルト』」

威力は出ないが連撃する

当たりの感触はよいが切れている感じがしない

「下がれ海軍！」

その声を聞いたとともにバックステップで距離をとる

遠くから相手の体を見ると全身黒色になっていた

「黒っ」

「ああこれか。これは『炭素アーマー』だな俺の炭素で体を覆っているだけだ」

あの炭素はさつきゴルさんのsinの一撃を軽く抑えられてしまっている

恐らくあのアーマーは私にもヨタにも碎けないはずだ

「.....」

軽くヨタさんの方を見るがヨタさんもあのアーマーをどう壊すか考えているのか思案顔をしている

「ヨタさんヨタさんあいつを一撃で倒せるであろう技ありますか?」

「あるがああ、の鎧があるとな...」

「あの鎧は私が何とかしますだから本体を」

「... 分かった力を溜めたいから数分待つてくれるか?」

「わかりましたあの余裕そうな顔を歪めてやりましょう!」

「んああそろそろ来るかあ? ウィップ」

「行くぞ! 『紫電一閃』」

私はいいつの近くに接近する接近するのは時間稼ぎのためだ。私では一瞬でチウコを倒しきる火力がない。だからヨタさんの準備ができるまでの時間稼ぎだ

「ファスニング」「周り炭」

技を出そうとした時チウコの蹴りが腹に刺さる

「グババア」

「海軍！」

後ろに吹っ飛ばされると同時にヨタさんが動こうとする

「大丈夫ですから！あなたはあなたの事を」

「つわかりました」

ヨタさんには早く力を貯めて欲しい

そのためにも時間を稼ぎたいけど力の差がありすぎる

悩んでる暇なんてないのは分かってるけど考えるんだ私

相手の特徴は

・硬い

・強い

・疾い

ダメだ勝てる気がしない。でも相手は化けもんじゃなくて人間だ相手が人間ならいくらかや利用はある

人の弱点は……あ、股間殴るか

すごく汚い話になるかもしれないがそこなら関節部分ら辺でアーマーも薄いしやりやすいかもしれない

そうと決まれば金的だ!

倫理観? 知らんな犬にでも食わせておけ

「この間約2秒!」

「何が?」

そこは突っ込まないでくださいよ

「紫電一閃!」

もう一度相手に急接近そして今度は相手の動きを見て、相手が動いた後に自分も動く

カウンターだ

チウコの回し蹴りを避けつつ全力で股間を殴る

「ホンデュア ア ア ア ア ア ア」

まるで鶏を絞め殺したみたいいな声を出しているが気にせずに殴り続ける

「おい海軍! 準備できたぞ!」

「はい!」

ナイスタイミングとしか言えないこのタイミングあいつは今痛みで膝を着いているのでまず避けられないだろう

「喰らえ // 雷轟電撃」

そして強烈な光とともに辺りの木々は焼き払われた

「つて殺す気かボケ！」

離れていたから直撃はしなかったが普通に当たる距離だったぞこれ！

あー耳がキーンとするわー

焼きウサギ

sideラビイ

「マヤ!」

「…分かつてる援護はする」

「任せるっピヨンじゃ行くピヨン!」

とは言うが正直いって勝てる気がしないっピヨン

マヤ(盾) は小さくされて使い物にならないしあいつ…… 名前なんだっけピヨン

あれピヨンあれそうワキ何とかさん?

とにかくあの胡散臭^フスーツ^ガの能力の発動条件が触れることだと思っピヨン。それ

だと素手の私じゃ勝てないっピヨン

「っピヨ」「^{ゲームオーバー}タツチン」

考えていた時の隙を疲れ触られてしまう

触られたせいで私の体も小さくなる

マヤの「何やってんだこいつ」って目が痛いっピヨン

お前の方が早かったのっピヨン

早くあいつを倒してケイの居場所聞かないといけないのにピョン小さくても戦わなきゃっピョン

たとえば体が小さくても戦い方なんていくらでもあるはずっピョンそれにもうあいつの能力効かないっピョン

1周回って楽に戦えるっピョン行くピョン

「ラビット」

「あ、そういうの間に合ってるんで」

地面に叩き落とされる

それにしてもなかなか体が上手く動かない

「って思ってるでしょ？ そうだよこの能力は物体を小さくできる。体が小さくなればもちろんその中身も小さくなるよね。でも小さくなるのって体の部分だけじゃないんだよね。例えば…… そう戦闘力とか。その体じゃ上手く体が動かないよね？」

「ピョン」

「…… 貴方は僕を追えるの？」

「は？ 何を言ってる」

マヤの体が能力により炎に変わる

炎を足から噴出し、速度を上げながら周りを飛び回る

「そういう事っピジョン!？」

私も負けずと周りを飛び回る。うさぎの能力を最大限使い、兎に角あいつが捕まえにくいように動く

「めんどくさいですな。いつもならマシクトちゃんに範囲攻撃してもらうんだけどなあ。ま、いいか」

あいつはデタラメに手をふる

そこに型も何もないが当たれば一撃で戦闘不能にはなってしまうだろう
逆にこちらの攻撃などいくら当てても効果は薄いだろう

それでもやるだけピジョン

「おっとっとピジョン」

私に直撃しそうな攻撃を空中で体をひねり回避する

そのついでにあいつの腕に蹴りを入れる

顔が少し歪んだ気がするが倒れる気がしないっピジョン

だから私は腕にしがみつく

「マヤー！」

マヤの名前を呼ぶ

それと同時にマヤが体から火をだし、私に打ち出す

「“火炎弾”」

ちよつ辞めるっピョン！そういう意味じゃないっピョン！焼きウサギになるっピョ
ン！

避けるために腕を蹴り顔に飛びつく

これでアホの攻撃は避けられたっピョ

あれ？なんか火球こつち来てるピョン？

「… それ追尾式」

「はああああ？殺す気かつピョン!?!」

「… なんの事やら」

「ふつぎけんなピョン!」

「なあ。俺もう行つていいか?」

「ダメっピョン! つうか追尾式の火球とかあるならあいつにうつっピョン!」

マヤが無言で火球を生み出し飛ばす

マヤは小さくなっているが出力は変わっていないようで、私に来たものよりも数段で
かいものが飛んでいく

あれ？もしかして私知らない子ピョン？

いやだっピヨンあんなアホに負けたくないっピヨン!

私は跳躍し顔付近まで飛ぶ

いつも思うがウサギでもそんな飛べないと思うが悪魔の実って不思議なものだピヨン

顔に近づく思いつきし足を振る

あいつは火球の対処をしていて隙ができている

近くの火球を思いつきし相手の顔面に蹴り込む

マヤの方に手一杯だったのかこちらの攻撃に気が付かず顔面に直撃した

もちろんこんなので倒せると思っていないピヨン。でも頭に強い衝撃を与えれば必然的に脳が揺れる

いくら相手が強くても脳が落ちればそれで終わりっピヨン

「お、体が元に戻っていくピヨン」

「……じゃあ君早くケイの場所を吐いてもらおうかな?」

「ピヨ〜」

あ、脳を揺らせば気絶するピヨン

つまり情報はこいつが起きるまでお預けっピヨン!?

「電伝虫ピヨン!」

「……声真似できるの？」

「……無理っピョン。こいつ叩き起すっピョン」

「……そうだね」

閑話
クリスマスが今年 は やってくる

時系列的にはヴィイリイミヤ結成後の初任務後のこと

「んん、初任務も終わってしばらくお休みだしみんな何したい？」

「この時期と言ったらやっぱりクリスマスっピョン」

「クリスマスってあれかw？ジジイが不法侵入してくるってやつw」

「……なんかの誕生日かなんかじゃない？」

「クリスマスって言うところ年間いい子にしてた子にプレゼントが貰えるってやつだろ？」

「そうピョンそうピョンでも今回はクリスマスパーティーしようって話ピョン」

「クリスマスパーティーか……やったことがないな」

各々思うところがあるのかしばらく沈黙する

「ま、いいんじゃないの？なんかあるってわけじゃねえし」

「そこで、プレゼントの交換をするピョン。中身はなんでもいいし、誰のが来るか分からないって仕組みピョン」

「誰に移るのか分からない……か」

「そうだピヨンみんながみんな独特なものを期待してるピヨン。ちなみに自分のかは言わなくていいピヨン」

「んじや解散かな」

ガクの一言でそれぞれが帰り始める

それにしてもプレゼントか。ま自分がもらって嬉しいものにするか

それにしてもお腹すいたな。考えるのは食べてからでいいか

——翌日——

おつはようございマース

今日は近所にプレゼントでも買いに行くかな

「… 私も行く」

起きたてで部屋に鍵もかけていて、窓も開けていないのにマヤがなんか目の前にいた
きつとこれは夢だそうに違いな部屋に入ってこれるはずがないうん。寝るかおやすみ

そつと自分に布団をかけ二度寝し始めようとする

「… 無視は酷いかな」

「お、おはよう今起きたよ。ところでなんでここにいるのかな？」

「… フフフ」

え？ちよつとだけ笑うのまじ怖いんですけどやめて貰えませんか？

「じゃあ準備するからちよつと待っていてね？」

もうなんか考えたら負けなのかもしれないこれが常識なんだきつと

この世界常識ぶつ飛んでるし

——しばらくして——

「準備できたよーどこ行くのー」

「……隣の島この島だとあいつが来る」

「隣って？」

え？隣の島とかどう行くの？飛ぶん飛ぶんか？お前飛べないやんそして航海術ないじゃん。民間の船はチケット買ってないから乗れないじゃん

「……つかまってて」

私はマヤにつかまって……いや掴まれてだなこれがっしりと持たれてる

逃げるなつてことですかちくししよう

「……はやくしないとあいつウサギが来ちやうからもう飛ぶね」

「飛ぶ？」

マヤは窓を突き破つて外に飛び出でる

そのまま地面に落ちるのではなくマヤの足の裏から炎を吹き出しその推進力で飛ん

だ

どうやらこのまま飛んでいくようだ

私はもうどうでも良くなつて遠い空を見た

「窓の修理費誰がだすんだろうなあ」

私のつぶやきは誰にも聞こえないのだろう

「ケイ一緒に買い物に行くピヨン…… ってもう居ないピヨンあいつに先を越される
とか屈辱ピヨン」

ところ変わつて隣の島だと思われる所

私は船酔いをしていや正確には船じゃないけどすごい酔った

なんであんなスピードだすん時間いっぱいあるじゃんもつと私に優しくしてよお

「…… 何買うの？」

「それを決める前に家から出したのは誰かな？」

「…… 観光でもする？」

「そうだねシヨツピングかな」

「…… うん僕の買いたいものは大きいから最後に行こ」

「じゃあ最初は私からかな」

それから数時間書くのがめんど…… 尺などの都合で割愛するが約5時間ほどシヨツピングをする2人だった

私はプレゼントとして人参を買った

なんか今日食べたくなった

マヤはでかいだけのプレゼント箱とリボンを数メートル購入していたプレゼントらしきものは買っていたところを見れていない

今日1日一緒にいたが見ていないのでおそらく前日とかに買っていたのだろうか

それからは観光名所を巡って帰宅した

帰りもマヤロケットで帰ろうとか言ってくるアホがいたが民間の船を使って帰るところにした

あんなの乗ってたら寿命縮む

帰宅したらしらすで部屋があれてた

泥棒にでもはいられたかと思つたが特に物は減つてなかつた

能力で貴重品とか貴重品でなくても大抵のものは持ち歩いてるから部屋に荷物はそ

んなにないからかな

1週間後に交換かあ

あれ？人参腐らね？

——当日——

「みんなのプレゼントを集めてもらったピヨンガクもつてくるピヨン」

「おう！これだけ合計8個全部あるぜ」

「ちっちゃいのはちっちゃいなw」

「フウくハツハツハツハー私は新発明品を入れといだぞ誰にでも使えるようなものにし
といたから当たり枠だろうフウくハツハツハツハー」

「… ハズレだね」

「そうだな」

「なにゆえ」

私はゴルさんの発明品好きだけどなあでも普通の人は持ち運べないから不評なのか

「早く行くピヨン見る前にネタバレはダメピヨン」

「プレゼントを選ぶ方法は？」

「クジピヨンプレゼントに1から8の番号ふつといたピヨンクジを引いて出た番号のプ

レゼントをプレゼントピョン」

「そうかwじゃあ最初は俺が引くぞw? いいかw」

「いっよ」

ウツズがクジの1枚目を引く。引いた番号は2番

箱の大きさは30cmくらいの四角い箱だ

「お、以外に小さいなwまあいいだろw開けるぞw」

ウツズが箱を開けるとなかなからはスノードームが出てきた

「おwsノードームかw興味はあるが買おうとは思ったことがなかったからなw素直に嬉しいなwで、誰のかw? スノードームだしソルトかw?」

「我ではない」

「えw?じゃあ誰だよw」

部屋に沈黙が訪れる

「名乗り出ないということとは知られたくないってことだな… 次行こう」

「まじかよw知りたかつたんだがなw喋ったついでだwシャスお前開けちやえw」

「そうかならば引かせてもらおう」

引いた2番目は以外にもwシャス彼は最後の方かと思つていたので少し意外である

「8番か、見たところ小袋だが… 中身は… 人參… ラビイだろこれ」

「ち、違うピヨンわ、私は人参なんかじゃ」

「目が泳いでるぞ」

「うげっバレたピヨン」

（でも私はあの人参じゃないピヨン高級なのは食べちゃったから市販の安いやつピヨンだからあの高級人参を入れた誰かがいるはずピヨン。さて、誰かなピヨン）

「じゃ、次は俺だな」

と、ガク

「引くぞ！番号はつとー番。また小袋かよ」

「デカいのが良かったかなあとか言いながらウキウキで袋を開け始める

「人参……誰だらビィ以外で人参入れたヤツ！2連続とかさすがにつまらないぞ！」

「ほんと誰のピヨンね〜ハハハ（棒）」

（あの市販のは私のピヨンバレたくないピヨン定価98円ピヨン）

「こ、ここは流れを変えるピヨン私が引くピヨン！番号は4番！この1番大きい箱ピヨ
ン！」

「お、それは俺のだなw」

「ウツズのピヨン？ハズレ臭いピヨン」

「失礼なw」

「中身は…… ティーベアピヨン…… 嬉しいんだけど…… 嬉しいんだけどなんでこのチョイス」

「…… ピヨン」

「あ、ピヨン」

「絶対それキャラ付けだろ！」

「何言ってるか分からないピヨン」

思わずツツコンでしまったがあれキャラ付けだったのか…… いや普通に考えて日常生活で語尾にピヨンとか奇人変人の類だな

あれなんか語尾にニヤンがいた気がする。でも思い出せないな。思い出せないってことはその程度のものか。分からないことは深く考えすぎないこれ大事

それにしてもウツズがティベアとか意外だなこんな可愛い趣味あったのか

「いや…… あれだよw誰が貰っても可はあるかもだけど不可はないだろw?」

「次は我が行かせてもらおう。さて来年の運勢はどれほどか」

「これそういうのじゃないから」

「そうか(・ω・) ならいこう6番か見たところ本が入っているのか？」

ソルトがとったのは四角い包おそらく本を包んだのだろう

「中身は…… 歴史書…… なぜこのチョイス」

「この世界教育が行き届いてないところが多いからな…歴史を学ぶことはいいことだ。知ってるか知らないかで大きく変わる」

「そうか…なら読んでみるとしよう」

「つ、次は私が行こうかな？ほら、気になるし」

「おや、ケイ君ならば私はその次にいかせてもらおうとしよう。最後はマヤ君だな」

「そうですか。じゃあ引きますよ7番1番でかい箱ですね」

私が引いたのは7番昨日マヤが買っていたでかい箱だった

「おw1番でかいやつじゃねえかw羨ましいぜw」

「ウツズのスノードームはあたり粹だと思っピョン他のより」

「そうだなw人参とかいらねえしw」

「開けるよ？」

「… まってその中身今は空後で渡すからまだ開けないで」

「わ、分かったよ」

「プレゼント入れないとかいいのかよ」

「ずるいピョン」

「まあいいんじゃないか？後で渡すようだし、マヤ君も色々あるんだろう。それでは私が引かせてもらおう。3番また小箱かまあいいだろ開けるぞ」

「ゴルさんが手に取ったのはまた30cmくらいの小箱

「中身はと。お、雪だるまか」

「我のだミニ雪だるま可愛いだろう」

「すぐ溶けないか」

「あ」

「ふむふむふーむふむならば私が絶対に溶けないようにしといてやろう。氷をとかさな
いようにする発明品があつてだな」

「……長くなりそうだから次僕。と言つてもあまりの5番1番小さい袋多分ゴルさん
の」

「ハズレか」

「ハズレだなw」

「ドンマイ」

「次があるピョン」

「なぜ私がハズレなんだ!?!」

「いや、だつてねえ」

「今回の自信作だ!ペンダント型にしているが別にポケットに入つても効果はあ
るものだ命名復活石。その名の通り瀕死でも、いや、死んでも仮死状態まで戻せる装置

だア」

「以外にハイスペック」

「でも死ぬ状態って交戦時だろw仮死状態じゃ意味無くないかw?」

「仕方なかろうw死者蘇生は禁術だからな」

「科学力じゃないの?」

「そんな細かなことはいいだろう」

「さ、最後に凄いの来たピヨン。ま、いいピヨン良い子は寝る時間ピヨン。解散するピヨ
ン」

はいはい。という声がそこから聞こえてきて、それぞれ部屋に戻っていく。忘れが
ちかもしれないが私たちはまだ子供だ

それにしてもプレゼント何が入ってるんだろう

何となく箱をベットの横に設置し布団に入る

明日になったら聞いてみよう

おやすみなさい

翌日

おつはようございマース

今日もいい天気。朝起きても部屋に誰もいない珍しい日

昨日の箱の上にメモが置いてある

「プレゼント入れときました

マヤ」

マヤがプレゼントを入れたらしい

ほんとこの子達部屋に普通に入ってくるのなんなの？

私は箱のヒモを明け中を見る

そしてそつと閉じる

何も見なかったそうだが私は何も見ていない

箱の中にいたマヤなんて

シヤス&ソルトVSマシクト

sideシヤス&ソルト（シヤス視点）

「行つくよー！」

マシクトがポケットから取り出した小瓶の中の水をまく

その水を自身の能力で渦にし周りにとどめる

渦の能力で1番厄介であろう海はソルトが凍らせたし凍ってないところの海には行けないように地面を盛り上がらせ行動できないようにした

これなら2人だし状態的にもいくら相手が格上だろうと倒せるはずだ

いくら状態が良くても油断はいけない。やるからにはこちらのペースにのせながら戦いたい

そのためにも速攻だ

俺は自身の武器の三角定規を取り出す。学校でよくある教師が使ってるでかいヤツだ

「『罰点』」

両手の三角定規をクロスさせ斬り掛かる

三角定規じゃ人は切れないって？そうやるために作ったものなんだから仕方がない
定規の先端部分がマシクトの腕にかすがあまりダメージが入ってないように見える

マシクトも反撃と言わんばかりに渦を飛ばしてくる
が、その渦をソルトが凍らせる

彼女の能力は遠距離のものでも凍らせることが出来るらしい
渦が凍ったことにより俺を止められるものが無くなる

「減点」

定規をマシクトに振るう

今度はさっきの技のよりも思い一撃を繰り出す

あの形の武器ではそんなにはやく攻撃を繰り出せないので、必然的に一撃一撃が重
く、必殺の一撃となる

攻撃によりマシクトが後ろに吹っ飛ぶ

実はこの定規当たり前であるが定規で人は切れない

いや切れるんだけども一刀両断する火力はない

なので数メートル吹っ飛んで土の壁にぶつかってマシクトも死んではいけないだろう
俺はこの意味のわからない集団の一人のこいつに手錠をかけるために近づく

「つシヤス離れて」

「んお?」

俺がマシクトに近づき、あと数メートルという時マシクトが急に起き上がり俺にとびかかってきた

さっきの攻撃がかなり効いていたのか能力を使ってる様子がなく、ただこちらに飛びかかっただけである

もちろんそんな奴にどうこうされる俺ではないが今この人に攻撃を加えるのは流石にどうかと思うので1歩下がろうとするがマシクトの方がはやく俺の体に触れそうになる

「全くそういうのはやめて欲しいかな ッフローズン」

ソルトが間に割り込み能力で凍らせてしまう

「お、おおこれ大丈夫なのか?」

「大丈夫だ問題ない」

「そうか。とりあえず手錠はつけられたが溶かせられるか?」

「無理私の能力は凍らせることしか出来ん」

「そうか。なら解けるように水にでもつけるか」

「そうだな」

side ケイ&ヨタ

ヨタの攻撃により周りの地形が変わり、キーンとした耳鳴りがやんできたころ

「あーああーああああー~~△~~~~△~~」

「うるさいぞー！」

「いやだつて耳がキーンつてなってるんですよ殺す気ですか!？」

「まあどんまい。そんなことよりも「そんなことよりも!？」俺を捕まえないでいいのか？
お前今の俺大技うつちやつてうごけないぜ?」

「え?。あ。うん。どうしよう。いや、一応仕事だし捕まえないかいけないのか」

「あー俺も甘えなこんなガキごと吹き飛ばしちやえば捕まんなかったのによ」

「その割には悔しくなさそうですね」

「そうか?とても悔しいけどな」

「ごめんなさいこれも仕事だから。だから海賊ヨタあなたを逮捕します」

「ああそうかよ。最後に一言いいか?」

「はい」

「お前はなんで海軍にいるんだ？」

「海軍が私を育ててくれたから。その恩返しです。それに『民の為』に戦えるのも誇らしいですから」

「お前ほんとにガキかよガキの言うことじゃねえよ」

「失礼なこう見えても8歳ですよ」

「マジモンのガキじゃねえか。なあお前本当にそれはお前の本心なのか？ 本当に拾われたから。ただそれだけで命を賭けられるのか？」

「それは……でも海賊よりも」

「そうか？海賊は自由なんだ！なんだって出来る！それに海賊は歌うんだ」

「海賊以外も自由に歌うけど？」

「海賊だからいいんじゃないか。海軍と違って規則もクソもねえ。いや、船にも掟ぐらいはあるが、階級やら成績やらなんやの軍よりマシだろ」

「そうか」

「ん？どうしたんだ？」

「いや、友達と同じこと言ってるなって」

「海軍のお前に海賊の友人か」

「正確には海賊志望だけだね。だけど今の私には軍を抜けることは出来ないかな。今楽

しっし」

「それならいい。せいぜい悔いがないように生きろよ」

「ありがとう。じゃあヨタさん……いやヨタあなたとそこで寝ているチウコを船まで連行します」

「おう。あ、そうだ一応あいつが持ってたでんでん虫であいつの仲間に電話かけとけば？」

「なんのために？例えばお前のことを捕まえたことにして合流したいとか言えば相手が何人いるかとかどこにいるかとか判断できるんじゃないかねえか？」

「っそうだねやってみるよ。それにしてもあの攻撃の中ででんでん虫生きてるのかな？」

「でんでん虫の番号を探すんだ」

「はいはい」

日常

今回のミッション

海賊電撃のヨタ及びその一味の捕縛または殺害だったのだが、今回我々の活躍により目標の捕縛に成功。また、途中乱入してきた怪しき集団も逮捕しましたとき

え？飛んだって？いやいやそんな飛んでない飛んでない

あの後無事私はマヤとラビィと合流し、その後島の中心部にいたガクとウツズと合流。港方面に行く途中にソルトとシヤスと合流し、最後にひよつこりと現れたゴルさんと合流した感じだ

ゴルさんが来た時におそらくチウコ達の仲間であろう人を引きずりながら来ていて、能力者合計4人とヨタの合わせて5人を今回捕まえられた。ゴルさんが引きずって来た人はみかんの能力者だったらしい。

本人曰く弱かったしやりたかったことが邪魔されたので鬱陶しかったが、この天才はそんな些細なトラブルなんぞで止められないのだアゝフウゝハツハツハツハゝ

らしい

島での後始末は普通の海軍がやってくれるそう。主にこの部隊は戦闘メインにな

るらしい

ヨタさんが別れ際に海賊について語ろうとしてきたのだが周りに止められていた
初任務も無事終わり、センゴクさんから休暇を言い渡された私達なのだが流石に船の上で休暇をすごせるほど船を動かせる人がいないので、陸で大きめの家を1件借りてみ
んなでしばらく過ごすことになった

え？お金？もちろん経費ですよ

これから海軍の中樞になっていくチームですよ？もちろんお金も多く出る

ま、お給料は子供料金なんですけどね

死ぬ気で、いや実際死にかけながら働いてお給料□□□□円ってどうなんよ

そんなことで私達は今お休みを楽しんでいる

まず朝起きるとマヤかラビイのどちらかが必ずと言っていいほど部屋にいる

一応鍵かけてるんですけどねえ

私のプライベートは何処え

2人のどちらかがその日何をやるうとかどこに行こうとか誘ってくれたり1日遊べ
て楽しいのだけどねやっぱプライベートは欲しいよね

着替えの時は流石に追い出すよ？

今日はマヤの日らしい

本人は買い物に行きたいらしい

特に買いたいものはなかったが、せっかく誘ってくれたのだから断るのもなんだし今日も暇なので一緒にいくことにした

マヤは本屋が気になるらしいので最初に寄ることにした

マヤが選ぶ本はどれも少し難しそうなのが多く私は絶対読まないようなものしかなかった。私は前世？前世なのかあれ。知らんけど前世（仮）から本とか苦手なタイプの人で、教科書以外読まなかった。マンガも特に読む方ではなかった。落ち着いて本を読むより体を動かしていたい派の人間だからね

1時間から2時間ほど本屋にとどまったあと時間もいらいだし少し早めに飲食店で昼を済ませてしまうことにした

私はハンバーグをマヤはパスタを注文した

あ、このお肉美味し次来たらまた頼も

マヤも美味しそうにパスタを食べていたので満足である

午後は遊園地に行き遊び倒した。確か今日は買い物で外に来たはずなのにないつの間にか変わってる

ま、楽しければオールオツケーなんでも許しちゃう。それほどテンション上がった状態の私の心は広い

夜になる前に警備員に追い出された。解せぬ

大人と一緒にやないと危ないよ〜わかる〜い海賊が出るよ〜とか言われて帰されたが私達は並大抵の訓練された兵士よりかは強い自信はある

見た目的に弱く見えるのは仕方ないけど。仕方ないけどさあなんか弱く見られるのはヤダとマヤに言ったら優しく頭を撫でられた

解せぬ

夜になり家では晩御飯。いつもご飯を作るのは料理ができる人すなわち

マヤ、ラビイ、シヤス、ゴルさんと私の誰かである

他の人は揃って料理とか分からねえ!と言う

まあ男共に期待はしてなかった。してなかったけどソルトは別だ。彼女は料理は大得意!と1日目の夕食当番を買ってでたのはいいものをなんとも形容しがたい生物兵器のようなものを作り上げていた。

この事件からソルトは厨房に無期限立ち入り禁止となった

ソルト曰く

ちゃんとレシピ通りに作ったんだが……少し味が薄いと思って砂糖を足したのが悪

かったのか：もう少し入れればよかったな。との事

レシピって知ってる？あと焼き魚に砂糖は無いでしょ塩コシウみたいなノリで砂糖を大量投入しないで？

そんなのが私の主な1日

お風呂に入りお布団に潜って寝るそれで終わりそんな毎日を送っている
じゃおやすみなさい

次の日はラビイが部屋にいた

今日はうさぎの日か

ラビイもシヨップピングに行きたいらしい

もう部屋に無断侵入している件は突っ込むのもめんどくさくなって放置している
我ながら無力だ

ラビイはまず八百屋さんで人参を買っていた

本人曰く

今日のおやつっピヨーン一本食べるかっピヨーン？

もちろんお断りした

私には生の人参を食べる趣味はない

大量の人参を持ったラビイと歩いていると周囲の目に気になる

周りからこいつはどう見えるんだろう

人参を大量に抱えたうさ耳

私が見つけたら距離を置くな。これ

お昼は例のごとく昨日の飲食店

ハンバーグが美味しかった

まさか2日連続になるとは

ラビイはサラダを頼んでいた

5種類くらい

午後はこちらも遊園地で終わり

流石に2日連続の遊園地は辛い

後から知ったのだがこの島はこの遊園地で人気らしい

そりやみんな行きたがるわけだ

夜は家で夕食を済ませたあとにゴルさんに呼び出されてたのでそちらに向かう

ラビイは置いてきた

私への用は前回使った銃の感想を聞かせて欲しいと言われたので正直に言った
どつからこの小さな銃から大砲みたいな威力が出るの？と

ゴルさんは無言だったのが怖い

そもそもこの人ペストマスクをつけて顔が見えなくて怖いのに無言になられると
さらに怖い

本人に言ったら傷つきそうなので言わないが

言わないということは説明が面倒臭いのだろう

聞かないことにはしておき、他の質問に答えたりアンケートをとられたりしつつ時間を
潰した

そして今日もまた1日が終わる

今日も楽しかったけど明日は何が起こるのかな？

どつちが部屋にいるのかな？

と考えつつ寝る

おやすみなさい

日常2

こんにちはは皆の衆！私の名前はゴル！言わずとも分かると思うが天才天才超天才である

この部隊ヴィリイミヤでは主に後方支援役として装備の発明制作整備に加えて怪我人の治療から料理当番までこなす天才である

残念ながらその場面は書かれなかったがこれからはお話の裏でやっていると思っていただければまあいいだろう

裏方と言っても戦闘力もそこそこあると思うぞ。素の身体能力に自信は無いが私自身が作った武装により固めたスーツのおかげである程度は戦えるようになってい

それに前回の作戦では能力者も仕留められたしなあフウハッハッハッハッハッハッ

え？カットされた？私の勇姿は？努力も？全てカットですか？フウハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ

見た目は黒いスーツの上に白衣をまとい、顔には大きなペストマスクをつけている

このマスクをみんなの前で外そうとは今のこところ思っていない

私も今日はコーヒーでいいな

あとガクくん達3人なんなん1回の食事量人間やめてませんか？朝からキ口単位で食べるよあの人達

おっと失敬言葉が乱れてしまった

よく食べるのはいいことだ。沢山作るから沢山食べるといいフウハツハツハツハ
く

朝ごはんを作り終わり、配膳した後私は自室に戻らせてもらった。食器洗いは各自でやることになっているからな

私は顔につけているペストマスクを外し、入れておいたコーヒーに手をつける

朝はやはりコーヒーで気分を落ち着かせるに限る

コーヒーを飲み終わったらまたペストマスクをつけ今日の作業に取り掛かる

今日はいつも使っている銃の改良を行おうと思っているので早速始めるとしよう

——— しばらくして ———

ふうむここをこうするところなるだろ。つまりここをこうでこつちがこうでここがこう………

そのためにもまずはケイクン。いやマヤくんか？いやケイクンの方が取り入りやすそうだ。どちらにせよ他のメンバーにもっと近づくかなとだな。フウハツハツハツハツハツハツ

おや、あれはラビイクンでは無いか

こんばんはと言っただけなのに1人で何笑ってるピヨン？怖いっピヨンって言われてしまった。やはり周りからは変人のように見えるのか

まあそんなことはどうでもいい。他人からどう見られようとも私にはさして関係ないからだあ

どう思われようが嫌われようが妬まれようが私が私であるための私の道を行く。ただそれだけなのだアフウハツハツハツハツハツハツハツ

あ、今日の夕飯はやはり野菜炒めか
知ってた

今日はもう今回の結果をレポートにまとめて終わりでもいいか

特に今日やらなければいけないことはもうないしな

今日やらなくてもいいものは明日。ないしは別の日にできるなら後にまわすのがこ

の私だからな

と言つても世間一般の人のように明日やる明日やるとただ先延ばしにするだけではない！そんなことをやるやつはただの凡才。この天才はそんなミスを犯さない

完璧故に天才それがこの私ゴルなのだあフウ〜ハツハツハツハツハ〜

フウ〜ハツハツハツハ〜

毎回毎回思うが私のこの笑い方は喉が少し痛いし変えた方がいいのかもしれない
なあ

もつとも変える気もなければ喉を壊す気もないのだかなあ。今変えてしまえばこれまでの印象が変わつてしまいかねない

ただでさえ顔を出さないんだ喋り方などもう変えられん

全く生きづらい世の中だ

このワンピースとかいう超人キチガイだらけの世界は

まあそこが面白いんだかなあ

フウ〜ハツハツハツハ〜

フウ〜ハツハツハツハ〜

フウ〜ハツ

日常3

sideシャス

俺の名前はシャス今は13歳の男だ

突然だが俺にはいわゆる前世の記憶というものがある

何を言ってるかは分からないかもしれないが俺もこれについては分からない

前世の俺は20代前半の男だった

職業は教師

1年目の新人だった

両親も教師だった。しかもテレビ等によく出るようなすごい人だ

世間からは俺ももちろんすごい教師になるんだとはやし立てられ、1年目にして担当

のクラスを貰えた

最初の仕事俺は誠心誠意働こうと思った

もう親と比べられないで「俺」という個人を認めてもらうために

貰ったクラスはいいクラスだった

生徒はみんな仲良く楽しくくらせていた

クラスには日本でトップレベルの大会社○○コーポレーションの娘、☆☆がいたがそんなに悪い子ではなく、むしろいい子だった

ある日△△からいじめの相談があつた○○が☆☆にいじめられているそうだ

俺は驚いた

このクラスにそんなことがあつたのかと

これまで見てきた中のクラスにはそんなことは無いと思つていたが、そんなことは無かつた

俺は教師失格だ

俺がすっかりしてないから。ちゃんと出来てないからこうなつてしまつたのだ

いじめられた○○には酷く悪いことをした

幻滅されたかもしれない

軽蔑されたかもしれない

それでもいい。俺はそれほどのことをしてしまつたのだ

ならばせめてもの償いとしてこのいじめだけでも。いや、全ての問題を解決し、また

元のクラスに戻そう

これも俺のわがままかもしれない

元々そんなクラスはなかつたのかもしれない

だが、そうしなければいけない俺が俺を許せない
俺はこのクラスをなおすために様々なことをした

生徒のために。生徒のためにと

結局は俺自己満足のためだと心の中で思っただが辞めることは無かった
しかし、これが続いていると上から抑止の声がかかった

〇〇コーポレーションから大金を渡されたらしい

教師を辞めさせる。1年目なのにいいのか？と言われた

しかしそれでも良かった。自分に任されたクラスがその程度でなおるのなら
あの子たちに平穩が訪れるのなら

やがてその子たちのリーダー格△△が死んだ

飛び降りたらしい

そんなはずはない。きつと殺されたのだ

俺は己の無力さに嘆いた

あの子たちは次々と死んでいってしまった
クラスのなかで7人も殺してしまったのだ

世間は俺を許さなかった

期待されてたぶん酷く俺のことを罵った

どんなに罵られようと、殺してしまったことの方がショックだった
自分がやったようなものだ

いつの日か俺は俺を誇れなくなった

俺が嫌になった

物事から逃げるのは良くないことはわかっていた

だが無性に逃げたくなった

そして俺は逃げたのだあの世界から

逃^死げ^んた^だ

あらためて考えてみると酷い話だ

1人の屑では何も出来なかった

あの時こうしてればと、度々考えてしまう

なぜ俺なんかが生まれ変わってしまったのか

そう思っていた

なぜ俺なんだあの子たちじゃないんだ

こっちの世界では死ぬのも怖くなった

せめてものの償いとして、今度は海軍に入隊した

特殊部隊に入れられた

そこでわかったのだ

ケイは△△でマヤは□□。ラビイが＋＋でガクが▽▽でソルトが○○。最後にウツズが??

似ているのだ。どことなくあの子たちに似ている

自分よりみんな強いが、この子達を守ってあげるのが俺に与えられた使命なのだとかった

だから俺は俺のやることをやる

でも、ゴルなんてやつは知らない

顔は見えないが、動き、癖、立ち振る舞い、声、匂い、音、どの観点から見ても俺はこんなやつを知らない

こいつは誰なのか。本人の顔を見れば少しは変わるかもしれない

でも今の俺にはそんなことは出来ない

精々警戒するのが今できる一番の策だ

こんなに前世の子たちが集められているのに1人だけ違うのはおかしい。俺はこいつがあの子たちに迷惑をかけないように見張っておこう

そのためにも今日はゴルに会いに行ってみるか

前置きが長くなったがそうしよう

ゴルには工房がある

普段はそこで仕事をしているらしい

俺はドアにノックをし、中に入った

「ふむうふむふむふむシヤスか。何用だ？」

「お前が何をしているのか気になってな」

「そうか。今日はそんな仕事がなくてな。あ、お前の武器でも改良してやろうか確かお前の武器は・・・」

「三角定規」

「なぜそんなものを選んだのだ」

教師だったからなど言えるはずもなく

「なんでもいいだろう」

そんな答えしかできない。ちなみに教科は社会科だ

三角定規関係ないって？

あのおつきい定規触ってみたいだろ

それはおいといて
閑話休題

「定規に新機能か。難しいな。だあがあしかし！この天才に任せておけばそんなこと容易い。朝飯前の朝飯前。つまり前日の昼飯前！だあフウフハツハツハツハツハツハツハツ」

相変わらずこいつうるさいな

「まあそれを預かっておこう」

「いや、別にいい」

「そう遠慮するなつて。2日でやってやる」

「いや、いい」

「そうとなればどうしようか」

「いや、」

「あれとこれを試してみるかあフウフハツハツハツハツハツハツハツ」

「え」

追い出されてしまった

予備があるからそつちを使おう

もし使えるのならそつちを使っても構わないが

どうなのだろうか

期待はしないでおこう

日常4

俺の名前はガク海軍大将になる男だぜ！

この部隊ヴィレイミヤの隊長。リーダーをさせてもらっている

従ってみんなが自由に過ごせている日でも書類整理の仕事をしなければならない日もある

今日がそれだ

次の任務の書類が来ているので、もうしばらくしたら次の任務に出なければならぬ。そのためにも最近皆が何してるのかを知りたいんだが

「俺参上w」

おうおうおうおうwどうしたんだw？」

「おつウツズじゃねえかちようどいい皆最近何してるか知ってるか？」

「もちろん知ってるぜw」

まずケイはラビイかマヤと街に遊びに行ってるのを目撃されてるなw同じく街に出てるやつだとソルトで食べ歩きしてる所をみたぞwゴルのやろうは自室に籠りつきりでシヤスも変わらないがたまに外出してるなw」

「ありがとな！」

「どうしたんだw？」

「いやあ次の任務の資料が来てるからな皆仕事ができるか確認したかったんだ」

「夕食時にすればいいだろw」

「それもそうなんだがゴルとかにはなかなか会えないだろ？」

「そうだなwあw手伝ってやろうかw？」

「よろしく頼む。なかなか終わらなくてな、書類系は苦手なんだよ」

「海軍大将になるんだろw？なら早く慣れないとなw」

「そうだな！よっしやるか！」

「ふいー疲れたあ」

「おつかれwそれにしても時間かかったなw」

「普段の数倍の量あったからな。それにしても次も海賊の捕縛任務。ついでの任務もあるがこっちは無理かな」

「どうしたw弱気になってwどんなやつだか見せてみるw……行けるだろw」

「どこが平気なんだよ。相手は前回みたいなただの海賊じゃないんだぞ？」

「それでも俺にはw」

「やめとけまだ俺達にははええよ」

ガクは手に持っていた書類を机に戻す

2人は夕食のために居間へと歩いていった

ガクとウツズが見ていた2枚の書類

それぞれにはこう書かれてある

1つは懸賞金5000万ペリーー海賊 “逃走者” キャラモブ及びその一味の捕縛又は
処刑（捕縛が望ましい）

海賊キャラモブは幾度にも及ぶ民間人への被害が大きいく上に逃げ足が早く、警戒心
も高いため海軍も手をこまねいている

早急に対処すべし

2つ目の書類には

「ぶはあ食った食った」

今日の夕食当番はケイ

夕食はお鍋だった

美味しい

「久しぶりにみんな揃ってるから今のうちに言っとくか」

「どうしたの？」

「次の任務が入った」

その一言で部屋に緊張感が走る

「内容は海賊キャラモブの捕縛又は殺害」

「キャラモブと言えば最近聞く名前だね」

「おうおうおうおうw 民間人への被害がすごく、さらに強くて政府も手を焼いてるらしいぞw」

「フウ〜ハツハツハツハツハ〜そんなもの恐るるに足らず！ そんなことよりシヤスお前の武器の改造しといたぞ？ あと見てくれこの新兵器！ その名もその名も…… その名はまだない！ 世紀の大発明と言つていいだろうフウ〜ハツハツハツハツハ〜内容はまだ秘密っだあくフウ〜ハツハツハツハツハ〜」

「……うるさい」

「フハア」

「続き言つていいか？ とりあえず今来ている任務はそれだ。終わつたら出来ればともう一通来てるがこっちは無理だなキャラモブの捕縛だけ意識してくれ」

「教えてすらくれないっピョン？」

「そうだな知らなくてもいいことだ。そのうち教えてやる」

「ケチっピョン」

「仕方ないだろw言わないってことはそれだけの事ってことだw」

「チエー我慢するっピョン。我慢してやる代わりにウツズ。パン買ってこいっピョン」

「俺かよw!？」

「お前の買ったパンじゃなければダメなんだ……だからパン買ってきてピョン」

「やだよw！」

「もー我儘が酷いっピョン。グダグダ言っていないでさつきと行ってくるっピョン」

「なんで俺なんだよw!？」

「お前ら落ち着け……話が進まん」

「仕方ないっピョン。我慢するっピョン私は誰かと違って物分りがいいっピョン」

「俺の扱い酷くねえかw!？」

「あれ？ガクニヤけてるけど何かあったの？」

「んあ？そうか？そうだったのか。いや、この空間が良くてなこのまま続いていけばいいのって思ってたな」

「2つ目のってそんなにやばいの？」

「んーあまり言いたくなかったけどな。ま、ケイならいいだろ耳貸せよ」

「そろそろ定期連絡の頃だな。久しぶりに会いに行くとするか。変わってんのかなあ前会った時なんてあんななんだったが今はどうなってる事やら

それじゃ行くかゲートオープン “開けゴマ”」

“そいつ” が手に持っている長方形の物体が光り輝く

輝きが収まると “そいつ” が元いた薄暗いところとは場所が変わっているようだ
場所は打って変わって1つの狭い部屋

「狭いとは失礼だな。まあ事実か。久しぶり元気にしてた？」

「お前よりは元気だぞ？それよりも頼んでた例のやつ作ってあるか？」

“そいつ” が軽口を叩く

相手は椅子に座った1人の男

決して戦闘などができそうな体つきはしていない

男はかけているメガネを軽くずらし元の正しい位置に戻しながら話す

「もちろん。もうできてるよそれより君も作ってるのかい？」

「勿論だこの私をなんだと思ってる」

「天才」

「なら良い。つい最近新しいものが出来てな。お前もいるか？」

「お前が勧めてくるやつにハズレはない貫つておこう」

男は「そいつ」の手から金に輝く丸い物体を受け取る

「懸命な判断だ。それよりお前はこっちの方に来ないのか？」

「俺なんか行ってもすぐ死んで終わりだろ。それよりも君の愉快的な仲間たちはどうだい」

「素晴らしい観察対象だ。今から詳しく教えてやろう」

「遠慮したいかな」

「そんなこと言わずに聞いていく方がいい」

苦行

ハローケイだよ

今私達はヴィレイミヤでの2度目の作戦の為移動中だよ

それにしても北の海の端の方まで行かされるとは……上層部移動距離考えてよ……移動だけで何週間もかかっちゃうよ……

上の移動だけで何週間もたつていふことで察する人もいるかもだけど、こんな濃いメンツが何週間も航海していると、当然トラブルが起こり続ける

海賊と海戦したり食糧不足になったりゴルさんが自室を爆破させ船を燃やしたり、燃えた船の上で炎系2人が鎮火させようとし、逆効果で大炎上させ、ソルトがそれを全部凍らせ能力のキャパオーバーでぶっ倒れたり様々なことがあった

それを詳しく言ってもいいんだけどそれだと平気で数話潰れちゃいそうなくらいに濃い毎日だった

なので今回は言わないが一言だけ言わせて欲しい

プライベートの空間をください(切実)

自室に鍵をかけてもピッキングされています私の安寧の地は無いのでしょうか？

それにしても次の任務不安要素は少なくは無い。キャラモブのことは、別に心配する要素はないんだけどね

「お前ら！島見えたぞ！数分で着くからしつかり気合い入れろ！」

おつもうつくのかな？続きはそつちでかな？

「あと数分で目的の島に着く。おそらくキャラモブはどこかの街にでも潜んでいるだろう事前に言つてあるペアで行動してもらおう。各自キャラモブとその一味を探し捕縛せよ！」

「分かつてるピオンでもペアがウツズなのは気に食わないっピオン。ケイがいいっピオン」

「おうおうおうおうw酷くねえかw？そんなに直球で言われるときすがの俺でも傷つくぞw」

と、ラビイとウツズのペアちなみにペアはクジで決めた
「……仕方ない。ケイは貴女より僕と組む方が似合ってる」

マヤがボソリと言うが、ラビイの耳に入ったらしくラビイが怒りだした

聞こえたことをマヤがしらばつくれるが、ウサギのラビイには、どうやら聞こえていたらしい

つくづく思うがこの2人実は超仲良しなのではないだろうか

ちなみにペアは私。ケイです

「フウ〜ハツハツハツハ〜そこまですておけラビイ君にマヤ君。私のパートナーそう相棒はシヤス君。君だ。よろしく頼む」

「ああ」

ゴルさんとシヤスのペア

2人が仲良くしている所を見たことがない。なんなら2人でいる所を見たことがないがああ2人は大丈夫なのだろうか？

「最後は俺とソルトだなー」

「よろしく頼む」

ソルトとガクのペア。こちらもそんなに仲良くしている所をみたことがない

全体的にこのペア作りは正解なのか？

まあクジだから仕方ないか

私とマヤの担当は島の中央地。主に商業地区や、テーマパークなどが大半を占めてい

る

「…テーマパーク。あれ、乗ろ」

「マヤ、今は任務なんだからダメだよ」

「……乗りたい」

「後で乗ってあげるから。今は任務に集中して」

「……言ったからね？言質はとったよ」

今背中がブルつとした。なんか怖い

いや、マヤが怖いのは今に始まったことじゃないが

それにしてもキャラモブ。そいつは自分が逃げるためならどんな手も使ってくるやつだと聞いている。私たち海軍がいると分かったらそこら辺にいる人を人質にするだろう

そうしないためにも一旦避難させたいが、そんなことしようとするれば、直ぐにバレてしまう

分かっているのは顔くらい。それも変装などされたら終わりだ。一体どうやって見つければいいものか

「とうわけでマヤいい考えない？」

「……どういふこと？私何も言われてないんだけど。でもキャラモブのことでしょ？それなら簡単。あそこ。見て」

何気にマヤ1番の長文である

マヤに言われた通りに指を刺された方を見てみる

そこには手配書と全く同じ顔のヤツが変装も何もせず、にジェットコースターの待機列に並んでいた

「馬鹿なのかな？」

「……………」

「無言は肯定とみなす。さ、行こうかあいつを捕まえちやえばもう終わりだもん」

「… うん」

私達はキャラモブの方に歩き出す

目の前に来て一言

「こんにちは。いい天気ですね」

「ん？なんだ？ツチガキじゃねえかどうしたんだよ」

んなつこいつ目の前で堂々と舌打ちしやがったな！それに誰がガキだ！もう8歳だぞ！立派な大人でしょう

「私達海軍のものでして、貴方手配書にあるキャラモブですな？」

「はあ？何言ってるんだガキでめえなんか海軍だつて？笑わせるな海軍ごっこは家でやってな」

「貴方はキャラモブですか？」

あれはただの苦行ですがなにか

やりたくない…… そうだガクとかにやって貰えないかな

へへへ…… とことん楽しんでやるぜ

そうと決まればガクを探してそれとなあーく押し付けてやる

私はもうダークサイドに落ちたんだ…… 自分のために他者を巻き込んでやるぜべ

イベー

倫理？道徳？知らんな、犬にでも食わせろ

すまんガク私の為に犠牲になれ

閑話2

ウアレンティヌス

おはようっピョン！みんなのアイドルラビイちゃんピョン待ってたかなっピョン！今日は2月14日！の前日っピョンだからチョコ作りするっピョン

「そろそろバレンタインピョン私たちも一応みんなにチョコ配るピョン」

「ふむ、バレンタインか：：そんなものやったこと無かった：：いや、1度だけ昔やったような気もするが、どちらにしようも忘れてしまっている」

「ソルトが誰に渡したとかは気になるっピョンけどとりあえず今は手作りでチョコ作るっピョン！」

「ふっ我の手にかかればこんなもの：：」

「やめるっピョン！」… やめて」

この子ソルトは何故か料理が壊滅的にダメっピョン

この前もお昼を作るとか言ってこの世のものとは思わざるものを作ってたっピョン

今回わざわざソルトを呼んでチョコ作りをしようって言い出したのはソルトの作る生物兵器でケイが殺されないようにするためっピョン

マヤはついっピョン

「せっかくのバレンタインだひとひねり入れてみてチョコ以外のものを作ってみるか」
「それいいっピョン！何にするピョン？」

「そうだな……！！マシユマロとか「絶対ダメっピョン！」……やめて」そうか……何故だ」

「いいっピョンかバレンタインに渡すものには意味があるピョン。例えばキャンディなら「あなたが好き」って意味ピョン逆にマシユマロは「あなたが嫌い」という意味に捉えられることもあるっピョン。だからマシユマロ単体はダメっピョン。中にチョコを入れるとかなら別ピョンけど誤解されないように他のにするのがいいっピョン」

「……マシユマロだけじゃなくグミもダメ」

「そうなのか……すまない気をつける」

「分かればいいっピョン！ちなみにチョコの意味は「あなたと同じ気持ち」っピョン！チョコは用意してあるピョンからあとは溶かして固めたりするだけっピョン」

「……今回はそんなに凝ったものじゃなくて簡単なものを作る」

凝ったものを作らない。そうマヤは言ったピョン。でも本当は「作らない」じゃなくて「作れない」っピョンチョコは贅沢品。前世と違ってそう簡単に一般人が手に入れるものじゃないっピョン

したがってお金持ち達のものになるピョンけどお金持ちでもその島の位置によつて

は手に入らないピヨン

この世界飛行機などあるはずもなく、海での航海は命の危険が高いピヨン。そんな中で贅沢品が沢山出回ることは無いピヨン

このチョコは奇跡的に商船から買ったピヨンけど普通は一定の島でしか売られないピヨン。そんなもののレシビがそう多く出回ってないピヨン

チョコの作り方を覚えていたら良かったピヨンけどそこは私も多分マヤも覚えてないから凝ったものが作れないピヨン

残念ピヨン

無難に溶かして固めるっピヨン

「というわけで無難に固め直すだけにするピヨン！」

「・・・賛成」

「ふむ。いいだろう我としてはもつとやりたいがそつちの方がいいと言うなら断る義理はない」

「私は反対するぞお。フウゝハツハツハツハゝ」

「なんかいるっピヨン!?」「……………」「何奴!?!」

「ん?自己紹介か?私の名はゴル天才天才超天才っだ!」

「そんなこと知ってるっピヨン!今は女子達でチョコ作りっピヨン!違うのは出てけっ

「ピヨーン！」

「ふむ。女性ではないとチョコは作ってはいけないのか？そんなことを言い続けていると世間に怒られてしまうぞ？今はジエンダーレスとか言うだろ？別に誰が何しようといじやないか。それに私も個人的に渡しておきたい奴がいるのでな」

「そうピヨンか…でもこれは」

「私ならチョコを固めるだけでなくチョコクッキーやチョコケーキは勿論チョコレイ島まで作れるぞ？」

「最後のだけ分からなかったピヨンけどチョコのレシピ持つてるっピヨン!?!」

「勿論だ。この天才に抜かりはない。バレンタインのチョコレイトそれは元々ウアレンティヌスが…いや、そんなことは聞きたくないかチョコはとある国で私始めたのが始まりだなあいつが教えてくれた」

「チョコの歴史とかどうでもいいっピヨン。それよりレシピっピヨンこれでどんなものでもできるっピヨン！ゴルも混ぜたっていいからやり方教えるっピヨン」

「なんだ簡単な方が好まれるのではなく料理が出来なかつただけか」

「お前だけには言われたくないっピヨン！」「…特大ブルーメラン」「ふむう」

「これでチョコ作りの土台は完璧っピヨン！さっさと作って渡すっピヨン！」

「完成っピョン！一時はどうなるかとおもってたっピョンけど以外にどうにかなるっ
たっピョン」

「ふむふむ… これもこの天才のおかげだな。フウ〜ハツハツハツハツハ〜」

なんかうるさいっピョンけどこいつのおかげだから我慢するっピョン

早速味見してみるっピョンっ楽しみっピョン

みんなで味見したっピョン

私のとママのそしてゴルのを食べたっピョン

「なんでゴルのが1番美味しいっピョン〜!? 軽く落ち込むっピョン」

「フウ〜ハツハツハツハツハ〜料理も化学だ正しい分量正しいやり方でやればちゃんと
美味しく作れるのは当たり前だ。まあこの天才はその時の気温、湿度、気圧など全てを
計算しているがなフウ〜ハツハツハツハ〜フウ〜ハツハツハツハ〜」

「… 勝てない」

「こいつ… 実はめちやくちや有能っピョン!?!」

「いつになつたら我のを食べるんだ?」

「そういえば君達はソルトくんのは食べてないな。早く食べるがいい」

「嫌っピョン! てかゴルまだ誰のも食べてないっピョン! 最初に食べるっピョン!」

「すまないが私はこのマスクを外せないのだ。感想を言ってくれる君達には感謝しかない」

こいつウザイっピョン！こいつ一発殴りたいっピョン！でもこれのおかげでここまで来れたっピョン。今回だけは許すっピョン。：

「マヤ！覚悟決めるピョン！」

マヤも同じこと考えてたのか決断した目をしているっピョン

「早く味見してみるといい」

「いただきますピョン」

「ふむ固まったな。意識は。無いな」

「気絶するほど美味しいなんて。ゴルも食べてくれ」

「え？私はマスクを。」

「我はお前がどんな顔でも気にしない。さあ早く食べてみる」

「え？あつちよつ。能力使わないで。さすがに勝てな。グワアアアアア」

「なんか。すまなかつた」

「いいんだ。弱い私が悪い。だがこの顔の事は誰にも言わないでくれ」

「それは分かっている。本当にすまない。今度埋め合わせをしよう」

「それは助かる…。それにしてもこの騒ぎで起きないとは…。こいつらの料理耐性がなののか君の料理が劇薬なのか」

「私の料理がそんなに酷いなんて…。ならば何故ゴルは平気なのだ？」

「私の体には毒への耐性がついているからな」

「ど、毒って…。」

「それよりも早く手当しないと最悪死んでしまうかもしれない…。喋る前に診察を開始するぞ」

「命に別状はないようだ」

「当たり前だろうチョコで人が死んでたまるものか」

「仕方がないラビイ君達が起きる前にラツピングなどをしといてやるとするか」

「勝手にやっつていいものか？」

「嫌なら自分のだけやるといい」

「そうかなら始めよう」

おはようっピョン！みんなのアイドルラビイちゃんピョン！いつの間にか寝てたっピョン？何があつたっけピョン……。そうピョン劇薬食わされたっピョン。不味い

ピヨンあれからどれだけ時間がたったピヨン？ラツピングとかその他諸々しなきや不味いっピヨン

まずは起きるっピヨン

どうやらここはベッドの上らしいピヨン

隣にはマヤも寝て：： あっこれ起きてるっピヨン

どうやらマヤも今起きたらしいっピヨン

こつち見て助けを求めんなっピヨンどうしようもないっピヨン

「とりあえずチョコ見に行くっピヨン」

ベッドから起きてその部屋を出てから気づいたけどここは医務室だったピヨン

運んだのはおそらくソルトとゴルピヨン

なんでソルトはあれ食べて平気っピヨン？きつと舌も馬鹿なんだっピヨン

医務室から出て調理場に行くと、そこにはゴルとソルトが座って話している最中っ

ピヨン

「おや、ラビイ君にマヤ君おはようございます。よく眠れましたか？」

「私のせいですまないことをした」

「大丈夫っピヨンそれよりチョコは」

「安心しろ既にラツピングして冷やしてある」

「良かったっピヨン…見ていいかつピヨン」

「どうぞちなみにやったのは私だ」

「じゃ遠慮なくっピヨン」

冷蔵庫の扉を開けると、そこに私とマヤが作ったであろうチョコが入っているピヨン

ご丁寧に作ラビイと言う張り紙ついているっピヨン

これを剥がすと綺麗にラツピングされたチョコとご対面っピヨン

私の方は可愛いピンクのラツピングがされているピヨン

可愛いっピヨン

——翌日——

おはようっピヨン！みんなのアイドルラビイちゃんピヨン

今日はバレンタインピヨンみんなにチョコ配るピヨン

とりあえず1人ずつ行くピヨン。マヤとソルトとは別行動ピヨン

ゴルはどっか行ったピヨン

とりあえずそこら辺にいる人を…

あつだれかいるピヨン

あれはシヤスっピヨン

「ハッピーバレンタインピヨンチョコあげるっピヨン」

「ん、ああありがたく受け取っておこう」

全くシヤスは反応が面白くないっピヨン

まあいいピヨンシヤスには期待してないっピヨン

次行くピヨン次

「ガクーチョコあげるっピヨン」

「ありがとうな！休憩時間に食べるよ」

こいつはこいつで真面目すぎるっピヨン。いつまで書類整理してるっピヨン？私
だったら頭破裂するっピヨン

というか業務が時間で分けられてないのに休憩時間しっかり決めてるピヨン？ほん
と無理っピヨン

そうだ私の仕事こっそりと混ぜとこっピヨン

「見えてるぞで」

「しっしらないっピヨン！」

逃げるが勝ちっピョン！スタコラサッサっピョン

「言ってくればいいんだけどなあ」

次ピョン次

ウツズピョンあいつなら面白いリアクションを期待できるっピョン

「というわけでウツズチョコあげるっピョン！」

「ありがとうなw」

「あれ意外と反応が普通っピョン」

「おいおいおい俺をなんだと思ってるんだよwまあそう思われても仕方がないがwもう2人分貰ってるんだよwだけどなあいつら渡し方が独特というかw……個性的でなwやつと普通な感じでくれたなとw」

「どんな感じっピョン？」

「…… 貴方じゃない」と「ふっ我からの慈悲だ」だぞw？まとも粹はいないのかよ」

「それは私っピョン！あとゴルもチョコ作ってたけど貰ってないっピョン？」

「野郎からはいらねえよwそれにしてもあのゴルが……何かあったのかw？」

「知らないっピヨン。まだみんなに渡しきってないからもう行くっピヨン」

「おうw気をつけていけよw」

「はーいピヨン」

あとはケイだけっピヨン

お楽しみは最後につて言うピヨン

じゃお邪魔しますっピヨン！

私はケイの部屋になんて入ってない

見てもない

あんな狂気知らない

うん知らないっピヨン

マヤ、それは無いっピヨン

チヨコは体に塗るものじゃないっピヨン

あく疲れたあ

こんな事務仕事でも長時間やっていると疲れるもんだなあ

この狭い部屋ではそんなに動くことも出来ないし久しぶりに散歩でも行くとするか

この部屋も紙類が増えてしまったしそろそろ片付けないとな

それにしてもこの前あいつがくれたこの金魂何に使うんだ

あいつが持ってきたものにハズレはないそれは事実だが使い方もわからん物なんてどうしようもないぞ？

ん？なんだこれ、転送した痕があるな

あいつからの贈り物か……

中身はチョコか…… そういえば今日はバレンタインと言うやつだったな

俺には関係ないリア充共の日だと考えていたがっいに俺にもチョコが来るのか
送り主があれなのは少し嫌だがチョコには変わらない

1つじゃなくて2つあるな

なにになに？「仲間が作ったものだ食べてみてくれ」

面白そうだな先に食べてみるか

そうして1人の男は意識を手放すことになる
後日その男は呟いたという

「やっぱりあいつはクソ野郎だ」
と

増殖

sideガク

「ブエツヘックシヨン」

「風邪か？」

「そうなのかもしれないねえ。なんか今ゾワツとしたような……」

「ふつ貴様もこつち側に」

「ちげえよ！」

違うと信じたい。でも今確かに寿命が縮むようななんとも言えない悪寒が走ったのだが……

「ま、まあそんなことはいいんだ。それよりキャラモブを探して捕まえないとな。既にほかの奴が捕まえてるかもしれないが連絡は来てないからな。ちやつちやと見つけちやおうぜ！」

「うむ」

それにしてもどう探すものか……そう簡単に行けたなら俺らに仕事として回ってこないはずだしどうしようか

「む？あれ手配書に似てないか？」

「ん？どいつだ？」

「ほら、あそこあそこの酒場から出てきた奴」

ソルトが指さした方向を向くと確かに手配書と瓜二つな奴が酒場から出てくるころだった

「あつあれだ！ちやつちやと捕まえて報告書書いて終わらせようぜ！」

「早く終わらせるのには賛成だが報告書は嫌だ。かわつてくれ」

「わかつたから。書いてやるからしつかりとこつちは仕事しろよ？」

「10倍頑張る」

みんなそんなに書類整理嫌なのかよ……俺なんて普段から通常の7倍やってるのに……

唯一何も言わずに書類整理やつてくれるゴルさんマジ天使

それにしても酒場から顔を出したところを見つかるとはなんか抜けてるといふか……ほんとに海軍が手をこまねいている海賊なのかよ

運が良かったって言われたらそれまでだがな

考えてても仕方がねえ速攻で終わらせる

sideウツズ

俺の名前はウツズw草草の實の能力者だw

能力の影響で語尾がwになっちまったがそんなに不便じゃないw

それより能力の影響で語尾がピヨンになったラビイとかの方が重症だろw

今回の任務でなんだっけあいつ……ま、海賊を捕まえに来たんだよw

名前は忘れたが顔はうっすら覚えてるし平気だろw

索敵役のラビイが見つけるだろうしw

こいつはウサギの能力で聴覚が強化されているからなw人探しとかは楽だろw

耳だけでどうやって目的の奴探すかは知らないがw

それに対して俺の能力なんて索敵とかできやしねえw範囲殲滅は得意だが周りへの危害を気にしなきゃいけないとこだと出力が著しく下がるw

それに植物がなければ能力を使えねえw無いとこ対策で種は持ち歩いてるが種をまくにしても地面が土じゃなきゃ能力を使えねえし使い所が難しいw使えれば最強だがなw

「んでw?どうよwそろそろ見つかりそうw?」

「まだっピオンキャラモブ関連の情報が耳に入ってこないっピオンそれに聴覚だけでどうしろって言うっピオン」

「そこは……気合いだw」

「ピョン!？」

ンにしてもどうしろってんだよw

海軍のお偉いさんたちがお手上げるほどの海賊だろw

「聞こえたっピョン！」

「まじかw」

「私の耳は確かに聞こえたっピョン！お前キャラモブって言ったピョン！確保っピョ
ン」

そういうラビイはキャラモブと言ったらしい人にドロップキックをくらわす

キャラモブって言った奴手配書に似てないなwそれに自分の名前自分で言うかw?

ってあれただの定員なんかじゃねえのかw?今蹴られた奴と話してた奴手配書と
顔同じだしw

ラビイの奴間違えたとしても一般人蹴り飛ばすなよw結構いい音なっただぞw

それに手配されている自信あるのかあいつ自分の名前そのまま使うとか馬鹿かよw

近くに植物は……花屋があるなwあれを借りるとするかw

「捕路 己離」(ブロッコリー)

そこにあつた花のツルを数十倍の太さまで体積を大きくし、逃げ出そうとし始めた

キャラモブに向けて伸ばす

ちなみに俺の能力で植物を操るための範囲は自分が視認していること。操れる量と時間、成長させるエネルギーは自分の体力依存だが今の俺が本気を出せば最大の大きさは数十メートル。時間は小さいのなら永遠に、成長させられる大きさは道端の雑草を大木くらいまでと自由自在だw

技名はそんな凝ったものとか思いつかないからなw野菜から取ってきているから非常にダサイが植物を操る能力者らしいだろw？

そんなことを考えている間にキャラモブは自身の数十倍の質量に押しつぶされ、目を回しているようだ

「お仕事終了w簡単すぎて笑えてくるぜw後はこのことをガク達に報告すれば終わりだなwラビィ電伝虫w」

「全く人使いが荒いつピョン。でも仕方ないっピョン私がかけてやるっピョン…えーと番号は…」

「頑張れようw」

つと俺も俺でキャラモブに手錠をかけときますかねーつとw

手錠をかけるとしてもうちで使ってるものは全て海棲石性の手錠なので戦闘中とかに自分がうっかりと触ってしまうと力が入らなくなってしまうので注意が必要だw

この部隊の性質上対能力者が多いからなw今回は違うと思うが

手錠をかけて終了つとw

「えw?消えた……だとw?」

確かに今俺は手錠をかけたはずだwだが俺の手錠には何も捕まえられてないw俺が今触つて居て、能力が使えないからこの手錠は海楼石性で間違いないw

確かに手錠はかけたししかしそこにはいないw能力者でも無理だろwこれはw

「ウツズwキャラモブはっピョン!」

「消えたよw……」

『やっぱりそつちもか……こつちのもケイの所も手錠をかけたら消えた……このキャラモブ達は誰かの能力で出来た分身だ!それなら海楼石で消えた説明がつく』

「おいおいまじかよwめんどくせえw分身を作り出す能力とか聞いてねえぞ」

『これは海軍も知らなかったことだおそらく最初の任務書にあった内容より厄介な内容になってるだろう皆しつかりと気を引き締めて仕事にあたってくれ!』

「了解w」「分かってるっピョン」

『それじゃあ引き続き頼む』

「いやあまさかあんたが助けてくれるとはありがとうございますゲス」

「俺は噂の海軍の新人共が気になるだけだ気にするな…そうだキャラモブ俺のためにひと仕事してくれねえか？」

「なんでも言つてください。あんたの為になんでもやり遂げてみせますゲス」

「フフフフ…いい心構えだ…やることは簡単だあいつらを俺の元に誘導すればいいだけだ」

「分かりましたゲス」

合流

side and シヤス（ゴル目線）

「フウ〜ハツハツハツハー噂の海賊討伐もこの天才に任せれば1発。この程度のこと恐るるに足らぬ」

前回この私が所属する海軍特殊部隊であるヴィリイミヤの隊員ケイ、マヤ、ガク、ソルト、ウツズ、ラビイくん達が任務であるキャラモブという海賊の捕獲を成功させた！
だががあしかし！ケイくん達は2人組を作っていたのだがそのペア全てで同時刻同じ人を捕縛。手錠をつけると同時にきえてしまったのだあフウ〜ハツハツハツハー

同時刻に全く別のところにいた3ペアが全く同じ人を捕縛、更には全てで手錠をつけると同時に消滅した普通に考えればおかしい

だがこの天才はそのカラクリ見破つたり！

キャラモブないしその仲間が人を増やせる悪魔の实の能力者なのだ

それならば海楼石性である手錠をかけた瞬間に消えたことにも説明がつく

しかしここで1つ問題が発生する本体の場所は何処なのかと

そこで我が天才は私の発明品であるこの「発信機」を持ってきている

も分かるはず。だから早くあいつを見つけないと逃げられちゃう」

「…でも位置が分からない」

「それは…」

この戦いで一番重要なものは相手の位置を知ることだと私はまだ見聞食の覇気が使えないため、位置を知りたいのなら、自力で見つけないといけない

「そうだゴルさんなら発明品で何とかしてくれるかもしれない。マヤ、ゴルさんと連絡取れる？」

「…分かったかけてみる」

「ありがとう」

きつとゴルさんならやってくれるはずだ今回ならなんだろう？レーダーでキャラモブの居場所を見つけてくれていてくれるはずだ

「…つながらない」

「本当に？」

「…うん。ごめんなさい」

「大丈夫だよマヤは悪くない。それにしても困ったなゴルさんが無理だとなるといいよいよ手詰まりに」

「…キャラモブが逃げるなら海沿いのどこかに隠してあるだろう自分の船を使うはず」

「そうか！それなら海沿いを片っ端から探せば見つけれはるはず」
「…でもゴルはそれをしなかった」

明記されていないがこの作戦でなぜ私達が最初から海沿いを探さなかったのか
その理由はゴルさんである

ゴルさんが持つてきていたリーダーがあつた大きさはそれほど大きくなく、折りたたむことも出来るので持ち運べるタイプのリーダーだ

そのリーダーで測れるのは覇気の強さ

人間生まれ持つて覇気を使える人などほぼ居ない

しかし、何度も激戦を乗り越えてきたものは、自分が意識できないだけでそれを使えているケースの人が何人かいる

海賊や海軍の人は日々命のやり取りをしている

そのため危機的状況がよく作り出され火事場の馬鹿力と言うべきなのか眠っていた潜在能力が引き出されるということが多い

ゴルさんのリーダーで体内で使うことができる覇気を計測できるのだが、その機能を島全体に使えば、細かい位置は分からないもの大まかな位置は分かる

それで、大きさが同じようなところが5ヶ所あつたが、1人でやるのは危険なため、2人組をくみ、中でも大きかった4つを先に見回つたということだ

その4つがハズレとなると残りはあと1箇所そこにいるのがキャラモブとなるのだがこの島の地図は無いし、分かっても移動されてたら完全に分からない
そうなるってしまうともうお手上げである

「…動かないと」

マヤはどちらかどうと考えるより行動するタイプの人であり、本人は多分とりあえず最初リーダーで見つけた地点の最後の方に行こうと言っているのだろう

「場所は覚えてるの？」

「…うんこつち」

マヤが指さした方向にあるのは山

そういうえばマヤとあった時も山を目指していたななどを考えてしまう

「行こうか」

sideガク and ソルト

「とりあえず俺らは近くにいますであろうペアと合流しようと思う」

「その心は」

「キャラモブが思ったよりも厄介な事が分かったからなここは一旦合流して戦力を整えるのが良いだろう」

「そうか。誰と合流するのだ？」

「そうだな。近くに居るのはケイ、マヤペアとウツズ、ラビイペア。マヤはああ見えても意外と行動力があつてケイがいても最初にゴルさんが見つけた所に行こうとするだろう」

「それならそつちを見つけた方が」

「そうしたいがケイが何処まで止められるかも分からない。最近のマヤは大人しくなつてきているからな。特にケイの言うことをすごい聞くし、ケイはこつちと同じで合流を選ぶだろうそして向こうもこちらが合流したいということも気づいているはずだ」

「つまりどういふことなのだ」

「動きたくても動けない。さつきからケイへ電話をかけているが一向に繋がらん。あいっあんまりそこを気にするやつじやないからな。でもウツズ達なら電話すればすぐこつちに来てくれるだろとりあえずウツズ達に電話してこつちに来てもらいつつ、ケイが来るかもしれないからそれを待つってところだな」

「そうか分かった。ならばすぐに電話をかけるでしょう」

sideウツズ and ラビイ

「ウツズ電話の音がするっピョン」

「ん？ほんとだ気づかなかったwありがとなw」

「へへんっピョン」

「んでw電話はつとwガクかw」

『出たぞ』

『おつ早かったなウツズか？俺だガクだ』

「ウツズとラビイペアだw」

『突然だが用件から行かせてもらおう合流するぞ』

「んな唐突なw」

「キャラモブが手強そうだから合流するっピョン？でもそんなことする時間あるっピョン？その間に逃げられちゃいそうっピョン」

『確かにその時間を相手に与えるのは惜しいが急いで個別に行ったらそれは危険が大きすぎる気がする』

「慎重すぎないかw？」

「私は合流でいいっピョン他の人は？」

『ケイは連絡がつかないが多分大丈夫だろうゴルさん達はこれから連絡するが多分あの人は自分でもう動いてるだろう。敵の場所を調べられるレーダーがあるくらいだし』

「そう……だなw場所を言ってくれwすぐに駆けつけるw」

『ありがとう集場所は………』

side and シャス

「はやくリーダーをだせ…そうすればすぐ分かるだろう」

「はて？リーダーとな」

「あるだろ最初に使ってたヤツ」

「フウ〜ハツハツハツハーあんな重いもの置いてきたに決まっているだろう。あんなデカブツ持ってこれる余裕があるなら他のものを持ってくる。それに私は非力なのだあゝ我開発のパワードスーツを着てはいるが元がモヤシだからそんな馬力はでない。そんな中で持ち運べるものなど限られるだろう。そのスペースを圧迫してでも持つてくるものではなかっただろう」

「おま…じゃあどうやって探すんだよ」

「フウ〜ハツハツハツハーこんなこともあろうかとサブプランも持っているぞ〜これが私が天才ゆえ」

「はやく出してくれ」

「待て待てシャスくん慌てすぎるなかえって悪影響だぞ？どんだけ素晴らしい発明品であれどこの体に勝てるものなどあるまい」

「どういうことだ？」

「歩く」

「……は？」

「だから言っておるだろう歩いてその目で探すのだ行くぞ！フウ〜ハツハツハツハー」
「こいつ……覚えてろよ……」

必死

sideガク and ソルト and ウツズ and ラビイ

「おーいガクw着いたぜw」

「おっはやいな。早速だが移動開始するぞ」

「はーいピヨン。つてどこ行くピヨン？」

「今お前らに来てもらっているうちにソルトに船に行ってもらってゴルさんのリーダーの予備とかがないか探してもらっている。あるならそれを使うがない時のために今ゴルさんに連絡してるんだけど」

「出ないのかw」

「そうだ出ない」

「ゴルは肝心な時に使えないっピヨン」

「まあ向こうも何かあったのかもしれないしゴルさんのことを悪く言うなよ」

「それはそうと電話が来てる音するっピヨン早く取るっピヨン」

「おっほんとだソルトから電話が来てる教えてくれてありがとな」

『こちらソルトだ今ゴルが使っていたリーダーを発見した今から残っている反応があつ

た所の場所を言う』

「了解」

side ケイ and マヤ

「こつちであつてるの？」

「…うん」

先程から代わり映えのない道を進んでいるのだが

実際は道ですらないが

さつきから殺気が…寒いなこれ

さつきから進む事に自分の意識が持つてかれそうになるほど強い殺気が来ている

殺気が来ているという表現であつているのかは知らないが進む度に気を失いそうになる

それ程の強者が向こうにいるということだ

本当に私達2人でなんとかなるのだろうか

一応マヤはヴィリイミヤの中で1番強いのだがそれは能力の性質のおかげ。だからそれを破られちゃえばマヤはそんなに強い方じゃない

私もそんなに強くない

この前にガクから聞いた事が頭をよぎる

あいつがいるのならば2人じゃ……ヴィリイミヤ全員でも……行けるのだろうか
今の私達には大きすぎる相手なのだから

side and シャス

「フウ〜ハツハツハツハーシャス君1つ提案があるのだが」

「なんだ……」

「お前はこの地点にいけ」

「何処からこの島のマップを取り出したんだか……なぜこの山なのだ」

「それは簡単だこの地点こそ最初に覇気の反応があったところだ」

「そうか……む？お前は行かないのか」

「私は一旦船に戻り武装を整えてくる。元より私は戦闘力が皆無に等しい存在皆の足を引つ張らないように後方支援に徹することにしよう」

「分かった……」

「この天才に任せておけこの天才がやるからには100%いや、120%の成果を期待しておるが良い」

sideガク

あれから移動を開始して目的地の山の麓に来たのはいいんだが細かいところまでは分からないから探さないとな

「ラビィ」

「分かっているっピョン聞き取るっピョン静かにするっピョン」

「おう」

これですぐに見つかると思うが山に入った瞬間から感じるこの妙な違和感は何なのだ？

居るだけで寿命が縮みそうなのこの威圧感

体全体から汗が止まらない

まさかとは思うがあの書類にあった通りなのか

それならば先に皆に言っておいた方がいいな

無駄な焦りなどを抑えられるかもしれない

「なあみんな聞いてくれないか…2つ目の任務なんだが」

「出来ないと判断して教えることすらしてくれなかったやつだな」

「そうだ心配をかけたくなかったから言っただけが言うしかないな」

「この気配に関係すんのかw」

「ああそうだ最初に相手の名前から言うぞ

相手の名前はドンキホーテ・ドフラミンゴ王下七武海の1人だ」

「ピジョン！」

「キャラモブとの繋がりがああるかもしれないというのが本部の見解だったのだからここら辺でこうも覇気を使える人なんてそうそういないだろうしドフラミンゴであつてると思う」

「ほんとにドフラミンゴならどうするっピジョン？ 仮にも七武海ピジョンこつち側だから捕まえられないっピジョン」

「その場合確認して終わりだ」

「おいおいおいおいw1番それが楽しやねえかw」

「そうだといいいんだがな…杞憂であつて欲しい」

「なんでそんな心配っピジョン？」

「ドフラミンゴ自体が七武海ではあるけど本人は相当尖っているからなちゃんと言うことを聞いてくれるのか……」

side key

さつきからさらに歩を進めて数分平坦な広間に出ることができた

こんな山奥にこんな空間があるなんて

ん？奥に誰かいるな

あれは……

「キャラモブ！」

「フッフッフッフッフお前が噂のヴィリイミヤか」

「…!!」

やっぱり居たのか

「ドフラミンゴ」

「フッフッフッフッフ俺の事を知っているのか。嬉しいな」

知らないわけが無いこいつがいるかもしれないという情報はガクから聞いている

ドフラミンゴ本人がどういう男なのかも聞いていて知っているつもりだ

隣のマヤは多分知らないはずだけど

本人すごい驚いてるみたいだし

海軍公認の海賊ドフラミンゴ

ファッションセンスはフラミンゴみたいなピンクの……なんだこれなんて言う服な

んだこれ

とにかくふっさふさの鳥の翼みたいのつけている人

七武海に入っているから懸賞金は上がっていないが元の懸賞金でも3億4000万ベリー数年前のものでも今までの全員より高い

しかもそれから数年間も力をつけている

はつきり言ってこんなバケモン相手にしたくない

何とか穏便にすんでくれないかな

向こうもこつちがヴィリイミヤだつて知ってるっぽいし

何で？うちは一応秘密組織のはず公認の海賊とはいえ海賊が知ってるのか

「そう睨むな俺のことは知っているとと思うが俺はお前らのことを詳しく知らん。教えてくれないか？」

「教えるって……何をだ…ですか？」

「フツフツフツフツあまり緊張しすぎも良くないだろう普通に喋れ」

「は、はい」

「知りたいことかそうだなまず名前から次に構成員の情報、人数、目的、戦力、権限、地位など全てだ」

「ケイ。名前はケイこつちはマヤ他のことは言えない」

「言えと言っているだろう」

「残念だけど守秘義務が」

「そうか残念だ」

ドフラミンゴが腕を横に振るう

相手とこちらの距離は数十メートル。普通なら何も起こらない

確かドフラミンゴはイトイトの実の能力者

体から糸を出せたはず

手の先から糸が出てるとするならば

これはこちらへの攻撃

やっぱり上手いかなかったか

と言っても情報は言えないし仕方がないのかな

私は屈んで来ているであろう攻撃を避ける

うおっブウンって言ったなんか飛んできてるやん

「マヤは大丈夫!？」

私は後ろに居たマヤに気をかけ後ろを振り向く

私の体の全身から嫌な汗が吹き出してきているのが分かる

嘘だそんなはずは無い

後ろを立てていたはずのマヤの体の上半身が再生ないはずなんて無い

どうしたの? 自然系でしょ? いつもみたいに再生してよ切れ目から出るのは血じゃ

ないでしょ？いつもの炎を出してよ

マヤ

私を離さないってよく言うよね？あれ凄く怖い

なんで先にいくんだよ

マヤ

走馬灯

私の名前はマヤ前世の名前はなんだったけか忘れちゃったと言ってももう昔の名前なんてどうでもいいけどね今はケイの事が一番大事

私の体を2つに切り裂いたのは多分糸だと思う

ああ血が足りないそれもそうか体を真つ二つにされたんだ

ケイごめんね

ラビイもこうなると懐かしいな最後に会ってから1時間くらいしか経ってないはずなのに

これが走馬灯というものなのか今まで見たもの、思い出が頭をよぎる

このマヤとしてのこと。前世でのこと

マヤになつてからは色々とおつたな

東の海で捨て子として拾われたこと

拾ってくれた恩返しとしてやってくる海賊を働かない海軍の変わりに追い払ったこと

その海賊が持っていた悪魔の実「メラメラの実」を食べたこと

ケイと出会ったこと

ついでにガクと出会ったこと

ザンクとかいう海賊を倒したこと

ケイとガクと海軍に入り鍛えたこと

ヴィリイミヤに配属になってウサギとか草とか土とか変態に出会ったこと

懐かしいな

この命が終わるとなるとムカつくウサギや変態なゴルとかも懐かしい

ゴル？ゴルって他にもどこかで聞いたことが……

もう考えても遅いか

前世でも色々あったな

いじめっ子にあつてケイに救われて

あの時も色々あつたな懐かしいや

ゲエムもしたっけなその時にも私を助けてくれた人が居たかなもう忘れちゃったけ

ど

確かおかまの人と一緒に居たはずあれ？それは違う人？うるさかった記憶があるけど顔は忘れちゃったうるさい人は違う人だっけ？もうわけがわからないよ

これ以上話していたいけどもう終わりなのかな意識も遠くなり始めてる

あれ？なんか光が見える

あの世からのお迎えなのかな

なんだか暖かい光

手を伸ばせば届きそうで近くて、優しい暖かい光

触ってみたい

届くかな？最後だし頑張ってみようかな

sideケイ

「マヤー！」

血が止まらないのはなんで？やめて、やめてよ止まってよマヤ

「フツフツフツフツそのガキが死んだことがそんなに悲しいか？」

「お前！私達がヴェイリイミヤだと知ってるんだろ！海軍の部隊だってなのに何故攻撃してきたんだ！お前は七武海こっち側の人間だろ！」

「知らなかったよ海軍の部隊だなんてそういうものがあるということしか知らなかった
いやあ驚いたよ」

「そんなことが」

「それでお前は どうする？敵を取りに来るか？」

「敵……いや別にいいそれは出来ない」

手を強く握りすぎて手から血が出てきてしまっている

口の端からも血が出てきている

それでもそんなことが気にならない

気に出来ない

仇は勿論取りたいだけどそんなことが出来るほど自分の実力がある訳でもないし勝てると思えば上がるほど馬鹿でもない

悔しいけれど引くしかない

任務は失敗隊員を1人失う結果で終わってしまった

「血の匂い何が……え？マヤ？」

「フフフフぞろぞろと出てきやがった」

この声はガク足音は沢山でことは皆来てくれたんだ

「これがマヤ」「……!!」「ついに……」「笑えねえw」

皆の反応も驚いている

ゴルさんが居ないなシヤスがいるのにおかしいけど多分大丈夫なはず今の私にはそこまで考えられる余裕が無い

「皆マヤがドフラミンゴに」

「私は科学者であるが医師でもあるこの程度のことなど訳ないさフウ〜ハツハツハツ
ハ〜人の蘇生など他人にやるのは初めてだが大丈夫だ私に任せておけ。ではケイクン
よろしく」

「は、は、は」

暖かい光手が届いた

取って暖かくて力強い

なんだろう意識が薄くなってきた……元々もうなかったような意識だったけど本当
にもうなく……

違うこれは意識が消えようとしているんじゃない

起きようとしているんだ

体はまだだるいけどいける

いける大丈夫

あとはそう目を開くだけ

死んでなんかない

私はまだまだ生きなければならないのだ

生きて明日を生きてケイを追いかけて続けないといけない

この光はきつとその明日への光なのだろう

そう考えると意識が軽くなる

ああ、早く起きないと皆がきつと待っている

フムウ施術は終了きつと生き返っているはずだが大丈夫なのだろうか

生命反応は復活しているから生き返ってはいるが起きるかどうかはマヤくん次第だ

な

体に傷は残れど体の機能の支障はない

ただ1つだけあげるなら能力の反応が消えている事だ

多分だがマヤくんはもうメラメラの実の能力者では無い

普通の人間に戻ったのだ

実に興味深い

謎だらけの実が消えたのだ

復活したということも合わせて本当に興味深い観察対象だ

私の初めての改造者

そうだなコードネームでも付けてみようか

名前は1号だからイチでいいな

マヤくん以外にもこれから同じようなことが起こるのだろう
その度に連れ戻してやる

だから私の知的好奇心を刺激する材料になってくれたまえ
君達は選ばれし者達なのだ

フウ〜ハツハツハツハ

生と死

sideマヤ

んんっよく寝た気がする体のあちこちが痛い最近無理しすぎたから体にガタがではじめたのかな

それでも僕は動き続けなといけなただけどね

今日は何日だっけカレンダーは……おかしいな何時もベッドの横に置いてあるはずなのに

よくよく見るとこの部屋僕の部屋じゃないような

確か……医務室だっけ？ そうだろうん

なんで医務室に……最後の記憶は……何をしてたっけ

確か任務で……任務つて終わったっけ？ なんだか不思議な感じだなあ

とりあえず起き上がろう体を動かさないと何も始まらないしね

あれ？ 体が動かない

おかしいなあそんなに無理をしてたっけ？

「フムウ？ マヤ君起きていたかおはよう気分はどうだい？」

「…最悪かな寝起き一番が君の顔…：マスクなんて」

「フムフム元氣そうでなによりだそれで？最後の記憶は何処まである？」

「…分からない。任務に行つてたはずだけど」

「覚えてないか…：ここは問題点だな感想を聞きたかつたのに…：まあいいだろうマヤ君単刀直入に言おう君は一度死んで生き返つた」

「…ダウト。死んでない」

「疑いたくなる気持ちも察してやろう。他人の気持ちがわかるのも天才故フウハツハツハツハツハツ。今から君をケイ君達と合わせる信じられないのなら皆から聞くといい」

「そう言い残しゴルは部屋を出ていってしまった」

「僕が死んだ？そんな訳ない」

「僕は生きている」

それからしばらくしてケイとその他が泣きながら飛び込んできたのは驚いた
皆が言うにはやつぱり僕は一度死んだらしい

ドフラミンゴとかいう男にケイの前で

別に僕を殺した相手に怒りこそわけど復讐心などはこれっぽっちもわからない

職業柄そんなものは仕方ないはず

でもケイの前で死んでしまった本人はこんな悲しんで泣きついてきて

良いねこれもつと来ていいよ

フフ合法的にケイの方から来てくれるなんて嬉しいな

でなんだっけ？そうそう死んだんだ

今の状態逆に殺してきたドフラミンゴとやらに感謝したい

でも目の前で死ぬって言うのはトラウマにならないといいけど

聞くとところザクロみたいだな感じで死んだのではなくこう……さけるチーズみたいな

感じで死んだらしい

さけるチーズと違って横だけど

そんな光景が目の前で起こればトラウマ物だよ

外見年齢プラス前世での年齢で精神年齢高めの私じゃあるまいし

よく良く考えればこの子まだ8歳なんだよね

今はそんな事を考える暇は無いか

今はそんな事よりも皆に言わなきやね

「ただいま……」

1週間後

あれから1週間がたった

体はだいぶ軽くなりちよつとした運動なら許されるようになった

完治まではあと2、3週間らしい

死つて1ヶ月で治るのかあ

やっぱりこの世界は不思議だなあ

生き返ったのはいいけどどうやら能力が使えなくなつてしまつたらしい

体が炎にならなくて焦つたよ

ゴルさん曰く1度死んだため能力が無くなつたらしい

つまりもう一度メラメラの実の能力を使うにはメラメラ実をもう一度食べないとい

けない

悪魔の実なんてものは1つを手に入れるのが大変難しく狙つたものが手元に来るな

どほぼないらしい

メラメラの能力は気に入つてたけどもうこの能力ともお別れかな

一体どんな人が次のメラメラの実の能力者になるのかな？後継者には会つてみたい

かな

それが変化1つ目。2つ目は能力の100倍大変な変化

なんとケイがずっとくっついてくれるようになりました！

これには私も脳内でテンションアゲアゲです

口下手だから声には出さないけど

私がいなくなるのが本当に嫌らしくて兎に目もくれずくっついてくれる

そして私が言ったことは今の所全部のお願いを聞いてくれた

抱き枕まではセーフだったから次は何にしようかな……

たまには死んでみるのも悪くないね。うん

変化はこれくらいかな

これからは能力が使えない

でもこれまで以上に強くないといけない

私は今長年の戦闘方法を出来なくなったというハンデを負った

でもこれからはそんなことを言い訳にできるような世界じゃない

力が欲しい

もうケイを心配させないような力が

覇気……修得してみようかな

1 週間前

side ケイ

プルプルプル

プルプルプル

プルプルプル

ガチャ

「おかき」

「あられ。こちらヴィリイミヤのケイですセンゴク元帥にご報告があつてお電話おかけしました」

「おおケイか久しぶりだな元気か？」

「はい。でも今はちよつと元気が無いかもしれません」

「大丈夫か？もしかしてこの前のキャラモブの件か？」

「はい。報告もその事です。まずキャラモブですが王下七武海ドンキホーテ・ドフラミンゴの部活というこゝろで見逃しました」

「やつぱりそうか……いきなり七武海とはお前らも辛かつたらう」

「はい。マヤが死にました」

「は？今なんて」

「マヤが死にました。今はゴルさんが蘇生？をしているところです」

「そうか……」

「ひとつ聞いていいですか？ドフラミンゴは私達がヴィリイミヤだと知っていました。そうにも関わらずこちらを攻撃し、挙句の果てにマヤを殺害しました。これは七武海でも許していいことなのでしょうか」

「許せ……許せケイ。ドフラミンゴだけはダメなのだ」

「何故！」

「こつちの事情だ。詳しくは言えないが」

「なんで!?そんなの許せるはずがない!納得できない!マヤは……マヤは……」

「うるさい!無理なんだ!今回の件は残念だったそれで終わりにしろ吹っ切れろ。お前には理不尽を跳ね除けられる力はまだない。悔しかったらもつと力をつけろ。世界は弱者に厳しいぞ泣いたって誰も助けちゃくれない苦情を言っても解決なんてしないんだ。お前自身を変えないと何も始まらない。悔しかったら強くなって見せろよ若人よ」

そんな……私は……私はこんなことが……

センゴクさんだつて長いことマヤと一緒に居たのに

悲しくないの?悔しくないの?なんでこつちが引かなきゃいけないの?

分らない分らないよ

力が無いと変わらないの?

力……

そうかそうだね。もっと強ければ私は……私は……

ドフラミンゴ……ね。調べてみようじゃないか

別に復讐がしたい訳じゃない

なんで許されるかを知りたいんだ

七武海でも海兵殺しは罪

何かしらのペナルティがある

でももしそれが無いなら

海軍もクロ……なのかな？

そんな訳ないよね

私が育つたこの海軍悪いことなんてしてないはずだもん。でももししてたら……

どうしようかな海軍には居られないね

そんなこと考えてもダメか

考えるよりもまず行動。書類に潰されてるガクにでも話を聞きに行こうかな

side???

数日前

「ゲートオープン 〃開けゴマ〃」

「おや？来たのかい？事前に報告してくれないとおもてなしできないじゃないか。次からは先に行つてくれよ。おやつくらいならもてなせるな……ショートケーキでいいか？」

「しつかり準備してあるではないか」

「君が事前に連絡したことなんてあつたかな？」

「違うない」

目の前に急に現れたそいつがケーキを食べるためにマスクを外す

「今日は報告があつてだな……観察対象の1人が死んだ」

「誰が」

「マヤ君だ」

「マジかよ」

「今こいつを使って復活させている生き返るかどうかは本人次第だがな」

「そうか……ならば平気だと思うが……その玉すごく見覚えがあるんだが」

そいつが持っている金の玉それはこの前こいつがくれた物だ

全くなんてもの渡してくれてんだよ

「それで？来たからには何かあるんだろうな？」

「いや？特にまだ生き返ってないし。生き返ったらまた来るよお土産話と共に……ね」

4年間

前回の事件から早4年

あれからも何度か仕事をこなしてきた

その中でも度々骨のある相手を倒してきたのだが今回は割愛させていただく

2年でのヴィリイミヤのメンバーにも変化があった

まずはガク

ガクは1年くらい前に倒れて1ヶ月くらい昏倒した

原因は過労らしい

寝ている時もいつも「書類……が……」などのことを言っていたので過労の原因は書類仕事らしい

事務仕事だけはしないヴィリイミヤのメンバーの分の書類を全部やっていたから仕方ないのかもね

この1件から他のメンバーも書類を片付けるようにはなったがミスも多く効率も悪いのでまだガクに頼りがちである

ちなみに書類仕事がちやんとできるのはガク以外にはシャスとゴルと私だけである

ラビイはちゃんとやらないしソルトは文の書き方が分かりずらいウツズは文にもWをつけるしマヤは字が上手く書けない

マヤ実は教育をちゃんと受けられてないので読みは苦手だができるけど書きはそんなに上手じゃないのだ

ちなみにソルトとウツズとシャスに変化は無かった

この人達はそんなに変わってない

ゴルさんは発明に没頭して変な物を量産して酷い時は1ヶ月以上顔を見ない時もあつた

ちなみにその時は戦艦作っていた

1人で戦艦って作れるものなの？

気にしたら負けか……

ちなみに置く場所がないという理由でその戦艦は私の能力でしまっており、置く場所を考えてから作ってよ……

あの人多分私のことを物置とかだと思っていない？

次はマヤとラビイ

マヤは前回の1件から一緒にいる時間が増えた

前よりも私のプライバシーが無くなったのはご愛嬌

ラビイも何故か一緒にいる時間が増えた

2年前では片方がいるときは片方がいなかったのだが今は両方ともいる時の方が多

い

あと2人とも偶に怖い

最後に私

私はこの4年間海軍の事について調べた

マヤとラビイがいつもいたからこそつそりやるのは大変だったけど何とかなったね

やっぱり海軍も黒い

私が調べただけでも汚職が出るわ出るわ

これまで守ってきた国もほとんどが黒

マヤのいたところが分かりやすいかな

1部の権力者がやりたい放題する世界

この世界は腐敗している

私は……私は……海軍でもうやって行けないかもしれない

確かに小さい頃から育てられてきて感謝はしている

だけど大切な仲間の死を知らんぷりされた

守るべきはずの市民を傷つけているのも海軍いや、世界政府

このままで私は大丈夫なのか

そんなことより戦闘力の方が気になるのかな？

という訳で戦闘シーンにいかがかな？

これは昨日のお仕事の事

私達ヴィリイミヤは今回海のパトロールを命じられている

と言つても今日は補給の為にとある島に立ち寄っている

それでもつて今は港にドクロマークが書かれた船つまり海賊船を見つけたので潰そう？☆つてところである

「はい。という訳で君達の名前知らないけど海賊っぽいからとりま捕まえちゃうねえーちなみに拒否権は無いよ大人しくしてるなら痛くしないからねー」

「は？何言つて…てめえらやるぞゴラア!!」

「おつ交戦開始かWちやつちやつと片付けて飯いこーぜWということだW最初から飛ばしてくぜW たまねぎ多舞練戯」

地面に生えていただけの雑草

それをまるで巨木のような大きさに一瞬で変え海賊に向けて伸ばす

それだけで海賊の大半は押し潰され動けなくなる

多分生きてはいるのだろうがだいぶ痛いだろう

ウツズはこの4年で能力発動までの速さ、制度、強度が段違いに良くなった。また、地面以外からも植物を生やせるようになったらしい

「俺も行くぜ！ 業火爆煙」

ガクは体から火を噴き出す

全てを焼き尽くすとまでは行かないもののその火の温度はかなり高く触れるものを焼く

あまり強すぎる火は自他共に焼き切ってしまうので威力の加減はしているもののウツズが生やしたツタを勢いよく燃やし尽くす

ガクはマヤ指導の元炎の噴く量と温度を徹底的に高めてきた

昔のマヤがやっていた火から光だけを取り出すことには成功したらしいがさらに高温な炎。蒼い炎を作ることとは出来ないらしい

だけど色が赤くともその温度は業火の如く

ウツズの生やしたツタなどを燃やし煙での目くらましや、相手そのものを焼いたりなど先頭の幅も広がったらしい

「全くお前らの戦い方じゃ民間人にまで危害が加わりかねん。『氷結静水』。フツこれでいいだろう」

巨大な氷の壁が生成される

ソルトが腕を振るだけで10数メートルの壁を生成したのだ

ソルトは塩……じゃなくてソルトは能力の使用の幅を上げるように頑張ったらしい

今のように1度に大きなものを作るのはもちろん小さいものもできるらしい

むしろ小さいものの方が作るのが得意らしい

大きいものより小さいものの方が繊細で強度も高い

だからといってこの壁が脆い訳では無い

砲弾なら10発ほどなら耐えられるはずだ

昔はあるものを凍らせていただけだったらしいが今は空気。つまり無から氷を出せ

るようになったらしい

……チートやん

ちなみに海賊の声は多すぎてカ書いていないットしているのだがとつてもうるさい

何だこの地獄は

—— 船上 ——

「フウ〜ハツハツハツハ〜我が名はゴル！天さ……おつと……名乗り中に攻撃とはなん

とも外道。貴様に良心は無いのか？まあいい私も反撃させてもらおう。目からビーム”

ゴルのパストマスクの目の部分からビームを出す

ゴルさんは自信の作った発明品。強さ4年で結構な量のものを作っているので強くなっている

でも本体の体力やら筋力は鍛えてないので弱い

「またゴルがおかしくなってるピオン目からビームとかどんな技術つピオン……あつ最初に会った時から目からビーム出てたつピオン変わらないっピオンねえ」

のんびり喋っているラビイも一般人から見たら風と見間違うような速度で走り回って海賊達を引っ掻いていつている

ラビイは自分の長所の速度これ1点を伸ばし続けてきた

おかげで速さはヴィリイミヤナンバーワン結構な実力者相手にも捉えられない速度で動き回る

弱点として攻撃力が足りなかったりするのだがナイフを使ってその点をカバーしている

たとえば力が弱くても高速での鋭利なものでの攻撃なら力が弱くても致命打になりうる

ラビイは私の戦闘スタイルの上位互換かな？

「ガガンガガンガ
岩岩岩岩岩」

シヤスの能力は地面……土や石などが無いと能力が使えない

土を持ち運んではいるがその量にも限度がある

そこでシヤスは自分が持ち運べる量の岩を手にまとい攻撃の破壊力を上げた

それだけでは無い

破壊力だけでは他のメンバーに劣るそのためシヤスは体技を身につけ無能力でも強

くなった

鉄塊が使えるらしい

鉄塊で自信の硬度を上げつつ能力で最大限固くした拳で殴る

単純故強い

ヴイリイミヤの中でもかなりの実力者なのだ

ちなみにさっきの岩岩岩岩ガガンガガンガは岩を手に纏い殴っているだけただ殴る

それにも名前をつけたというシヤスのプライドである

ちなみにシヤスの本気はもつと強く普段は背中に背負っている武器の三角定規を使

う

見た目は完全にネタだが強い

三角定規の製作者はゴルさんである

「……………」

あそこで敵を斬っているのがマヤ

マヤは能力を失ってから刀を使い始めた

作成者ゴルの刀 “不知火” と “陽炎” この2振りは強く振ると発火する

原理は不明

ゴルさんのみぞ知る

マヤは剣の才能が強く独学でメキメキと上達していった

独学だが隙の無い美しい構え

どんな敵にも容赦なく斬り掛かる

剣以外にも体に仕込み武器を仕掛けていたりするらしい

ゴルさんが体をいじつたらしい

ゴルサアン。(ω。ω) 貴方何者だよ……

マヤは一手先を読む力が強く相手の嫌がる所を的確に付き続けることができる

それ故に大抵の敵は簡単に倒せるのだが問題はそこじゃないのだ

マヤの戦い方には容赦がない真顔で相手の四肢を切り飛ばすのだ

流石に殺しはしないのだが絶対痛いやんあれ

最後に私？

私は近接の戦闘スタイルは変わってないよ

でもこういう殲滅戦なら……

私はしまっていた巨大な岩を取り出す

大きさは大体10メートルくらいかな？

これ探すの疲れたんだよね

これを転がすだけで

「ギヤアアアアアアアア」

この世界の人達体頑丈だからこんな感じでも死なないのすごいね

私の常識が正しいなら10メートル台の岩に轢かれたら普通死さない？

まあいいか

これからはどうなるのか次回もお楽しみにつてね

そして2年後には私は……になるのであったのだがこの時の私達の誰にも知らないはずなのであった

離脱

side key

2年後

私はケイいきなりだが海軍はもうダメなのかもしれない

前は働くことに生きがいというか達成感、市民を守っているという実感があつたのに
今じゃそれにも疑問を覚えるようになってしまった

どんな企業にも人の集合体である以上黒い部分は絶対にある

黒い所がないところなんてないのではないだろうか

見つけてもその部分には目をつむって我慢しないといけないのかもしれない

でも私はもう限界。確かに育ててくれたセンゴクさんとかおじいちゃんには感謝している

でもそれでもここに居たくない

上層部が綺麗でも市民と接する下層部が汚いそれを上層部は無視していたり把握すらしていないこともある

だからやめる

辞めるのは極端なのかもしれないでもこれは私が数年かけて出した答え変えること
はない

やめて海賊になってやる

海賊になるのは間違えなのかもしれない

でも私は知っている真つ直ぐな目で海賊に憧れる少年を

海賊なのに市民に危害を加えずに助ける海賊に憧れている少年を

弱くとも人一倍優しい少年を

私はその少年にかけてみたい

目指すは東の海

小さい頃私を海賊に誘い続けた人の元へ

確か出航は今年だったはずだから

行く手段はある

ゴルさん作の船を能力でしまっているからそれを使えばいい

使い方なんて分からないけどゴルさん作だしなんとかなるだろう

分かんなかったら民間の船を使い続ければ大丈夫だよね？

今は3月出航は5月の5日

数年前の任務で近くに行った時に日程を聞きにいつておいて良かった

能力でしまつてあつた船を取り出す

船が着水する時に跳ねてきた水で体が濡れるけど気にしない

船に乗り込むために上からハシゴを下ろしてつと

能力でハシゴを下ろすとかの単純操作なら遠隔でもできるからね

退職届も置いてきたしやり残すことはないかな

しいて言うならマヤとラビイが心配かな

何時になつても私離れできないから

あとゴルさんの新作ももつと見たかつたしガクともつと遊びたかつた

ほかの皆もそう

楽しかつたなあ

でも私は行かなきゃいけない

バイバイ私のお家

「…とか考えてた？」

「なつ…マヤ…?」

「…ケイが辞表なんて書くなんて私も書いてきた」

「フウ〜ハツハツハツハ〜我が天才がいなくてどうやって出航するのか？」

「ゴルさん…」

「あ、私は退職届を出してきてないからな協力者に工房に籠つてもらつて私の代わりを
してもらつてゐる。だから私がするのは送迎だけだ。行くのだろうか？^{イーストフル}東の海へ」

「ゴルさん……」

「……早くしないとみんなが来ちやう行こ……話はそれから」

「マヤ……うん！ありがとう！分かつた行こう！」

「では出航準備に取り掛かるとしようかフウ〜ハツハツハツハーフウ〜ハツハツハツ
ハー」

「ふむうもうここまで来れば追つ手も無いだろうこつから気にするのは追つ手ではない
……後ろより前。つまりほかの海賊だな。幸いこの船は海軍の特許があるから海軍に襲
われることは無い」

「なるほどねなら大丈夫だねいつもより人が少ないから戦闘は不安だけだ」

「そうだな……あと1つ言い忘れてたがこの船送つたあととは返してもらうぞ？これは
元々私の最高傑作の1つ動かすだけなら1人でもいけるからな」

「帰りは大丈夫なの？」

「大丈夫だなんてつたつて私は天才なのだからなフウ〜ハツハツハツハーフウ〜」

「……ケイそんなことよりも行く先ゴルはこの船を東の海^{イーストフル}へ向かわせてるけど東の海^{イーストフル}で

やることあるの?」

「うん海賊になる」

「……!! 覚悟はあつたけど本当に」

「うん目指すはドーン島フーシャ村ルフィ達と出会った場所」

「…そう。それが決断なんだね」

「うん」

「…なら私はただついて行くだけ」

最初はどうかなるか分からなかった離反だったけどマヤという心強い味方もできて船長（候補）の場所までの移動手段もできた

やっぱり持つべきものは仲間だね

それにしてもなんでゴルさんは私が東の海イーステールへ行こうとしているのを知ってたんだろ

まあいいか連れてつてくれる訳だし

本当ならここで旅の内容を言うのかもかもしれないけど特に何も無かったからいいよね

ゴルさんは私達を始まりと終わりの町と呼ばれている東の海のローグタウンというところにおろして帰ってしまった

ローグタウン確か海賊王が処刑された町だっけ?

sideマヤ

食料品は買えた

目的地まで何週間かかるかは分からないけどなんとかなるでしょ

私が目立たず持てる量なんてたかが知れてるあとでケイともう1回行かないとね
早く待ち合わせ場所に戻らなきゃ

ドスッ

いたた…

誰かとぶつかっちゃった

「…(めんなさ)」

なにこの奇抜顔面マン

歯がキバみたいになってて鼻にピアスしててリーゼント

ここは関わらなかつたことにして逃げよう面倒事の匂いにする

「…あ、では」

「までコラアッ」

「…どうしたの」

「おいチビ!!」

「…あーこんにちは?どちら様で?」

「俺の名前はバルトロメオだべってそうじゃないだろうが!俺にぶつかつていて礼の一つもないべが?」

「…あーさようなら」

「まつべー!」

sideバルトロメオ

数分前

俺の名前はバルトロメオ!!地元で暗黒街のボスをやっている男!!

今日はこのローグタウンにおれのバリバリ伝説が轟ぐべえ!!

さすが地元と違って人が多いな…

ちよつとドギドギするべ…

ドスッ

「…ごめんなさい」

何だこのチビ!!ごめんなさいも言えないで

さてはどつかの田舎者だな？これだから田舎者は困るべ！！

「…あ、では」

「までコラアツ」

「…どうしたの」

「おいチビ！！」

「…あーこんにちは？どちら様で？」

「俺の名前はバルトロメオだべってそうじゃないだろうが！俺にぶつかつていて礼の
つもないべが？」

「…あーさようなら」

「まつべー！」

何だべこのチビ礼儀も知らないべか？

なら俺が教えてやるべ

「…触らないで」

べ？

確か俺はあのチビに掴みかかろうとして

逆に投げられだべが？

都会って恐ろしいところだべえ

sideケイ

なんかもつと良い奴ないのかな…

それとも普通良い奴はこの程度なの？

ゴルさんのに慣れすぎて基準が狂っちゃったの？

「すみません預けていた刀を取りに来たのですが」

「貴女は確か海軍の」

「はいたしぎと言います」

たしぎそう名乗った海軍さんは短髪でメガネをかけている女の人だ

服は向日葵柄でズボンを履いている

広場で海賊を捕まえているところをさつき見たから覚えてる

「刀は得意？」

「はい一応は」

「ならさ選んでくれない？微妙にいい物の基準がわかんないんだよね本数はそうだな

……とりあえず3本くらい？」

「3本……刀を3本もつかうんですか？」

「いや、私は3本も使わないよでも予備に持つとけば安心でしょ？」

「そういうことですか刀3本というところかの賞金稼ぎみたいで」

「賞金稼ぎ?」

「知りませんか? ロロノアって男です」

「知らね」

「『東の海』じゃ知れ渡った剣士の名ですけど『悪名』ですよ!! 刀をお金稼ぎの道具にするなんて許せません!!」

「それはおかしいんじゃない?」

「え?」

「だって貴女海軍でしょ? 海軍だってその刀を使って海賊や無法者倒して捕まえてそれで給料としてお金を貰う。賞金稼ぎとやってる事何がちがうの?」

「それは……」

「海軍と海賊狩りの違いって何? 海賊とは? 海軍は法を大体守ろうとしてるから『正義』? 海賊は同じことしても法に背いているから『悪』? 私にはもう良くわかんないやってこんなこと言うキャラじゃないね私」

「……そうですか……!! この刀本で見た……『三代鬼徹』これ……これにするべきですよ! おじさんこの刀本当に5万ベリーなんですか!」

「……あ……あ……あ」

ん？この海軍さんなんで5万ベリーの1番安いガラクタ品のどこ探してたの？もしかして身長のせいで舐められてた？

むうこれでも多分貴女の5倍くらいは強いよ！？

この身長も考えものか……

ゴルさん辺りに頼んだら身長を伸ばす薬品とか作ってくれそう

危なそうだからやめとくけど

それにもう頼めないし

「それそんなに凄いものなの？」

「すごいですよっ 歴とした『業物』ですよ普通100万はする品でこの前代の『二代鬼徹

』は『大業物』で『初代鬼徹』は『最上大業物』に位列しています」

「だめだ!! やっぱダメだ!! そいつは売れねエ!!」

「えーっ そんなーっ」

「へえ普通の感じはしないねこれなんて言うんだっけ妖刀？」

「知ってたのか？」

「知らないよ？なんとなく？」

「お前の言う通り『初代鬼徹』を初め鬼徹一派の刀は優れてはいたがことごとく『妖刀

』だったのだ名だたる剣豪達がその『鬼徹』を腰にしたことで悲運の死を遂げ」

「いや、そういうのいいんで要はいわく付きだけどいい刀なんでしょ？使えれば文句はないし誰でも死ぬ時は死ぬでしょ」

「バ、バカ売らねえぞ！それでお前が死んだらまるでおれが殺したみてエじゃねエか！」
「ばかだねアンタ！売つちまいなよあんなもん」

「げつかあちゃん」

なんか奥からでてきたでかい女の人に叩かれてる

それはどうでもいいか

今大事なのはこのいい感じの刀を譲ってもらおうことなんかこの刀をつかうという意志を見せなきゃいけないのかな？

いいねこういうイベントこういうのがあるといいアイテムが貰えるって相場は決まってるもんね

なんかいい方法は……思いつかない

やるからには多分結構な危険が伴わないと店主さんも納得しないだろう
うーん……今の私じゃこのイベントのフラグは立ってないのか

残念だけど多分この町はもう1回来ることにはなるその時に貰えればいいかな店主さんもこの感じじゃ簡単に売らないだろうし

でも一振くらいはほしいな

「分かった買うのは辞めるよでも一振くらいはさせてそれならいいでしょ？」

「お、おうそれなら良いが危険な事はするなよ？」

「なんかいいくない？ ないならちよつと外に探しに行くけど」

「外に出るなら俺もついて行くそいつを持ったまま出てって死んで欲しくはないからよ」

「ありがとうございます！ では行きましょう」

「あつ待つてください私も同行していいですか？ その刀に興味があつて」

「いいですよじゃあ早く行きましょう！」

船出

「と言つても試し斬りでできる物つてないのかなあ」

折角いい刀を持つてるのに試せないとなると少し残念

店の中でやるなと店主さんに言われちゃったから外でやるしかないんだけど

町外れに出れば無法者の1人や2人くらい居ないかな？

でも今は海軍さんが同行しているからそんなに荒事は出来ないけど

つてあれはマヤ？そういうえばこの付近待ち合わせ場所だったっけ

「…ケイ……つてお客さん？多いね」

「うん今この刀を買おうとしてるんだけど断られちゃつて…でも試し斬りだけは許してくれたんだけどいい的がなくて」

「…なるほどそれは妖刀？いい刀だね」

「知つてたのか？」

「…ううんただ分かっただけそれでケイそちらの方達は？」

「この刀を買おうとしているとこの店主とたまたま近くにいた海軍さん」

「たしぎです」

「…海軍」

「?何かありましたか?」

「…いや、何も」

「試し斬りするとこだけど町から離れば海賊の1人や2人いないかなあつて」
「ダメですよ!危険ですそういうのは私達海軍に任せておけば」

「ヤダ海賊だつたらついでに懸賞金も貰えるし一石二鳥狙わない理由がないね」
「おまつ海賊を探すのか!?!やめろ!危険が危ない!」

うるさいなあ何その頭痛が痛いみたいなやつ東の海賊は弱いから平気だと思おうよ?
たまに強いけど

目指すは海賊の居そうな場所つまり港の路地だね

行こうか

海軍さんの注意なんて聞こえない

歩き始めて1時間くらいたつたけどまだ店主さんが着いてくる

お店大丈夫なのかな?海軍さんも職務怠慢じゃない?大丈夫?

いや、私は何も言わないけど

つと人気のない倉庫に到着しつつ中から人の気配もするしこれは当たりの予感

「おつ邪魔しまーす」

「ちよつと待つてください！いくらなんでも危険です！」

「そうだ！こんなところ命がいくつあつてもたりねえ！」

「大丈夫ですつてほら中の人すごくこつちみて来てますし歓迎してくれてますよ？きつと」

「誰だテメエ！」「何しにきやがった！」「まさか海賊何じやねえか!?」「落ち着け相手は女一人にガキ2人ヒョロがりジジイ一匹だ海軍なわけ」

「あ、この女の人は海軍ですよ？」

「なつ海軍じやねえか」「目的は!?」「まずいバレたつ」「助けてくれお頭」

「ほら、歓迎してくれてますつて」

「ふざけんじやねえ！それになんだおれの呼び方だけ匹だったぞ！これが歓迎されるつてのか」

「そうです危険ですここは海軍に援軍の要請をして一旦撤退すべきです」

「…ケイ」

「うん試し斬りさせて貰おうかな」

「おまつふざけ」

店主さんうるさいな……これからこの人の声だけシャットアウトしよう

うん。それがいい

よいしょっと

私は妖刀「三代鬼徹」を腰から抜くと刀を構える

幼い頃からナイフ以外も一通りは使えるように教育されてきているので刀も使うことは出来る

上手くは無いいけど

じゃあいききますか

「まず聞きます！貴方たちはだれですか？代表者さん出てきて下さい！」

「何だこのガキ」「ふざけてんじゃねえよ！」「こんな奴らなら俺たちだけでも楽勝だぜ」

あらま完全に舐められちゃってる

やっぱり見た目というか身長ですかね？

実力で示せつてこと？

それでもいいけどさあ

いいけどさあ！

納得いかない

「紫電一閃」からの「刃文」

私は近い下つ端の元まで走りこみ一閃

今回使うのは刀だから技名も刀関係からとった

あと一応峰打ちにしてある

この刀がどんだけすごいか見るためだけに流石に死なれちゃ後味悪いしね
つとどんどん行きますよー

「つと前方から投げナイフつてこの精度じゃダメですよ？簡単に落とされちゃいますよつてあれ？切れちゃった」

勿論切れたのは私ではなくナイフだ

私は今飛んできたナイフを撃ち落とす位の力と勢いでナイフを叩いた
それなのにナイフは縦に真っ二つになってしまった

まさかそこまで斬れ味がすごいとは
ますます欲しくなってきた

その前にお返しかな？斬撃飛ばすのなんて何年ぶりかだけでもできるかな？
「刃区^{はまち}」

おっいい感じに飛んだ

あの勢いなら相手も血こそ出れど多分死んでないくらいの傷だね
我ながら完璧

「…邪魔」

向こうでマヤも無双してるし海軍さんも一応戦ってる

これならすぐ終わるね

にしても歯応えが無い

やっぱり東だとこんだけ力がないのか

ルフィはちゃんと強くなっているか心配だな

つともう最後の1人か

「これで仕事は終わりあとは君1人だねクマみたいにでかいその人確か頭とか呼ばれてたっけ？」

「ザけんなガキがおれはシャチ殺しのビリーおれの名前の由来を知ってるか？おれはこの刀でシャチを真つ二つにしたことがある！」

「だから？」

「は？」

「だから？何？そんなことできる人なんて沢山いるよ？私何人も知ってるもん」

「ふざけんじゃ」

「はい終わり」

戦ってる時の会話って最後までする必要性なくない？

だって戦闘中だもん

話してるからって油断しているとこを斬ればいい

「すごい………つてこの刀は山嵐つ良業物じゃないですか！暗くてよく分からないですけど持ち帰った鑑定しなくちゃ」

「え？そうなの？じゃ貰っていい？こいつ倒したの私だしほら、その代わりこいつの分の懸賞金いらない」

「え？いや倒したのは貴方ですから貴方が受け取るのは当然そして懸賞金もちゃんと受け取るべきですそれがルールとして」

「分かった分かったからそれ以上はいいや。ほら規則つて聴き続けると頭痛くなるでしよ？」

「でも……」

「いいじゃんさ」

「お、お前！」

「どうしたの？店主さん」

「久しぶりにいい剣士を見たお前さんこの刀を貰ってやってくれ作りは黒漆太刀拵刃は乱刃子丁字良業物『雪走』斬れ味はおれが保証する！ウチはたいした店じゃねえがこれがおれの店の最高の刀だ金はいもらつてやってくれ勿論鬼徹の代金もいらねえお前さんの幸運を祈る」

そういう店主さんが多分護身用（多分）に持ってきていた刀を私に渡してくれた
これも多分いい刀いや、さつき店主さんも言ってたしい刀なのか

目標にしていた3本もゲットできたし文句は無い

でも1つ言いたい

私は剣士じゃなくてただのナイフ使だって

いや、今回ナイフ使ってなかったけどさあ

大丈夫？この店主さんの目？

タダで貰えるらしいからあえては言わないけどさあ

決め手も不意打ちだったしさあ

「ありがとうございます。では私からも1つお店そんなに開けてて大丈夫ですか？」

「……あつ」

「海軍さんも大丈夫ですか？」

「…あつ」

「やべエかあちゃんに怒られる！急がなきゃじゃあなお客さん名前は!？」

「ケイです以後お見知り置きを」

「じゃあな！」

「では私も行きたいのですがこれの後始末がありますから」

「海軍は大変ですね」

「一応この状態になるまでの経緯の説明やら懸賞金の受け渡しなどがあるので貴方達もここで待つて下さい今応援を呼びますから。あと私は海軍さんと言う名前ではありませんが！たしぎです！」

「分かった…わかったから」

どうする？という目をマヤに向ける

「…」

あつこの目は逃げようって言ってる

タイミングは？

なるほど話始めた時

………

……

…

今だっ

音を立てないように全速力で

「応援を呼びましたこれで………ってあれ？ケイ君達は」

逃げ切ったかな？さつきとは違う港にまで来たしもう大丈夫でしょ

今からドーン島まで向かう方法は2つある

1つは民間の移動手段を使うこと

そしてもう1つは自分で船を出すこと

1つ目はまだ安全に移動ができる

しかし時間がかかってしまい間に合うかは分からない

あとお金がかかるしかも高い

2つ目の方は直接行くことが出来るので乗り換えなどの時間を全て無視でき、比較的早く着くことができる

難点としては航海術をほぼ持っていないのでたどり着けない可能性があるという点
さらには船もない

この事を考えれば民間のを使いたいけど

ちなみに海賊等に会おう可能性は両方同じだからこの際無視する

「…ケイあれ」

マヤが奥の方に向かって指をさすのでそつちを見て見たが先にあつたのは1隻の埃

をかぶったボートがある

まさかあれを使おうとしてるのかな？

マヤのほうを見てみると頷かれたのできつとそうなのだろう

パツとみ損害もそんなに無くて許容量もそれなりにあり使うことは出来そうだけど
大丈夫なのかな？

「…ケイ埃」

「はあ……わかったよ」

能力でボートの埃を全てしまい、隣に出す

能力の使い方こんなんでいいの？私の能力はそんな便利お掃除能力じゃないよ？

たとえ使つてなくとも誰かのものを勝手に取ったら泥棒……いや海賊になるからセー

フか↑

「…行く」

マヤ……そうだね悩んでも仕方がないか

「よし…出港」

sideルファイ

「やー今日は船出日和だなー」

海の上1人でボートをこぐ少年名はモンキー・D・ルフィ

彼こそケイとマヤが探している少年海賊である

海賊といつてもなったのは今日ついさつき

今日5月5日は少年……ルフィが海賊としての旗揚げをしたのである

その格好はノースリーブの服1枚短パンで麦わら帽子とどうも海を舐めているとしか思えない格好にボートの上には食料が入った袋と樽1つずつと装備も心もとない

そんな少年に1つのアクシデントが発生した

ザバアという音を立てつつ巨大な穴子のような見た目をした魚通称近海の主が現れたのだ

しかしルフィはその程度をもともしない

「出たか近海の主！ 相手が悪かったな10年間鍛えた俺の技を見ろ！」
 ゴムゴムの銃ピストル

ルフィの放ったパンチは距離的に届かないものなのだがルフィ腕の腕が伸び近海の主の左頬を強打する

彼は世にも珍しき悪魔の实の能力者ゴムゴムの実のゴム人間なのである

悪魔の实それは生涯カナヅチになる代わりに絶大な力を得る禁断の果実

そのうちの1つを食しゴム人間となっているルフィにはいくら巨大でも魚なんて相

手にすらならない

実際ルフィはまだ余裕そうな顔をしている

「んん……まずは仲間集めだケイとマヤは入れるとして他にも10人はほしいなア
よっしやいくぞー！」

ルフィは自分に活を入れ前へと進み出す

「海賊王に俺はなる!!!」

まだ見ぬ彼の仲間たちを巻き込まんとか小さな船は海をゆく

世界の甲板から v o l . 1

sideソルト

突然メンバーが2人も減ってしまった

ケイが何かをしようとしていたのは分かっていたけどまさかなくなっちゃうなんて思ってもいなかったマヤがついて行くっていうのは分かるけど退職とは…

悪い予感がするな

我らがリーダーガクは2人が消えたせいでの書類と戦っていて過労死しそうだし
ラビイはケイが消えたことで発狂しているし

ゴルは同時期から工房にこもって出てこなくなった

でもゴルがこもることは度々あったから今更気にする事はないか

ウツズはなんだか元気がなくなってしおれてきたし

…草の能力者って元気がないと枯れるのか？ウツズのテンション的に枯れそうだな

シヤスはなんだかソワソワしている

2人がいなくなつて心配なのだろう

「何か？我は特に変わりがない2人がいなくなった当初はラビイの付き添いをしていて、だが今は無駄だとやめてしまった」

それにしてもこれからどうなる事やら

ケイのことは気に入ってたのだがな…

sideガープ

「何じゃと！ケイとマヤが辞職」

「ヴイリイミヤ…：ガクからそう報告が上がっております」

「何故じゃ何故やめた」

「それは分かりません。辞表にはそれぞれ「海軍を辞めますみんなありがとう」「辞める」としか書いておらずなとも…：」

「ケイ…：立派な海軍に育てたはずだったがどこ間違えたか…：ブツブツブツ」

「(ケイ君にマヤちゃん君達に何があつたのかは分からないけど君達は意味もなくそんなことをするほど馬鹿じゃない。ただ今は君達の安全と祝福、そして敵として会わないことを祈るよ)」

ガープの補佐、ボガードはそう、心で呟くのであつた

s i d e ヽタ

久しぶりだなヨタだ

誰だ？だつて？俺だよ俺俺

オレオレ詐欺じやねえからな！

6年くらい前にケイに捕まった奴だ

確かケイと一緒に炭の能力者を倒したな

今俺がいるのは大監獄インペルダウン地下6階

インペルダウンとは全世界の凶悪犯が集まる監獄

俺も最初はここに連れてこられた時は4階とかいう熱いだけのフロアだった

周りもそこまで面白い奴もいないし当然のように娯楽もなかったのだから退屈だつた

だから俺は脱獄を企てた

誰1人として脱獄をしたことがないインペルダウン

最初は俺も上へ上へと逃げた

でも流石はインペルダウンそう簡単には行かなかった

あと何回かやれば脱獄は出来るだろうけどそうなる前にこっちの体がダメになつち
まう

だから上へ逃げることはやめた

下を目指すことにした

下ならばもつと強くもつと楽しい奴がいるはずだ

こうして脱獄をしようとするこゝと10数回その全てに捕まりおしおき（拷問）をされながら諦めずに下に行くことはや3年

やつと最下層6階に着けた

ここは最高だここでの刑罰は暇娯楽も何も無くただただ無限の時間の中で自らの罪を悔い改めるだけ

そんなの上の階も同じだ

上から来た俺から言わせてもらえばこの階は刑罰は軽くなった

しかも周りは全員強者さらに個性的

実に愉快極まらない

あと数年は飽きないな

ここで監獄生活でのお友達を紹介しよう

まずはこのガタイよさすぎゴリラことダグ……ダグ……ダグ……
ダグさんとかバレットさんです

彼はなんとあの海賊王ロジャーの海賊団の元クルーらしく実力は折り紙付きの化け

物

仲間は無さだとかいう輩

そんなことは無いと何度も言ってるけど聞かないのがなあ

「という訳で一言どうぞ！」

「

「はい無視です！無視いただきましたありがとうございます！」

「そいつはお前の奇行呆れているだけだどうしてお前はそんななのか」

「言ってくれるじゃんレッドン」

「いつも言ってるがなんだそのレッドンとか言うのは」

「いつも言ってるけどあだ名だよあだ名普通だどつまないじゃん？お前の名前は確か

……レッドフィールドだっけ？長いと俺が覚えられないから略してレッドンいいで

しょっ！」

「全く……だめだと言っても聞かないのであろうが」

「当たり前！よく分かっているじゃん！点あげるぜ！」

このおっさんはパなんとかレッドフィールドあだ名はレッドン（命名俺）レッドンも

バレット同様化け物こっちは能力者ですらないのにあの海賊王とかと1人で渡り合っ

ていたらしい

こつちも仲間は要らないとか言ってるから毎回止めるのが大変だ
時間もないし紹介できるのはあと3人くらいかな？

1人目はブロンズ

こいつはブロンズとかいう名前なのに髪は銀髪というよく分かんない見た目をして
いる

この人もロジャーとかと同じ時代に争っていたらしい

ロジャーに負け処刑された後数年後に妻を見つからないように故郷に帰し自らは出
頭したらしい

そして残りの2人はテオティとアステカ

テオティがブロンズの船の副船長でアステカが船医

2人は夫婦で子供もいたらしい

その子供は自分たちが育てると危険が及ぶからという理由で何処かの海軍が仕切っ
ている町に置いてきたらしい

テオティ夫婦の子供はそろそろ15くらいでもしブロンズにも子供がいるのなら
そつちもそのくらいだと思う

この人達は今日はもう寝てて顔は出せないけど良い人だからいつか改まって紹介し
たい

つとこんなもんかな？

この他にもこのフロアには俺のアバロンピサロンとかウルフとか友達はあるけど今回は紹介する時間がないからもう終わりかな

性格変わったって？

ここに来てから色々あつてね人間変わるもんさ

笑い方もワツハツハツハからビリリリリに変えたし

もしくはバチチチチとか

なんか周りの能力者達はみんな笑い方が能力と似てるからよみんなを見習ってオマージュさせてもらった

それではまたな

s i d e フラミンゴ

「フツフツフツフツフ」

「あら若随分楽しそうね」

「そうか？そうでもないが」

「あらそう失礼しました」

「フツフツフツフツフ」

sideルフィ

「ついたな海軍基地の町」

「はい！ついに！」

「お前すごいなコビーちゃんと目的地に着いたよ！」

少年ルフィは海軍志望の少年コビーに道案内を頼み、海軍基地の町シエルズタウンに来ていた

来た理由は悪名高い海賊狩りロロノア・ゾロを自らの仲間にするためである

ついでにコビーを海軍に入れてやるという目的もある

少年ルフィの冒険に変更点などありやしないのでここで一旦終わってしまうがルフィはまだ安全に正史を辿っている

それが狂うことになるのはもう少し先の話である

side???

「ゲートオープン 開けゴマ」

「やっとこつちに戻ってこられた」

「すまないこつちも急用でお前に頼る他なかった」

「別にいいさ誰かと会うわけでもなくただ部屋の中で時間を潰すだけだったしさ。それにあの子達の祝うべき1歩だろ？ 気にする事はないさ。それにしてもこっの狭い部屋も久しぶりだなもつと広く出来ないものか」

急に出てきたのは2人の人物片方は変哲もない男でもう片方はペストマスクをつけた変態だ

「それにしても俺達も出会って6年か……正直に言ってクツツツツツソ長かったそれも一段落あとは最低2年長くても3、4年か寂しいものだなそしてこつから数ヶ月は忙しくて過労死してしまうかもしれん」

「フムウ違くない」

「お互いの目的の為にこれから頑張ろうぜ」

「フム了解だが今更って感じだな」

「そうだな今もてなせるものと言えば何があつたかな……と」

「やめておけどうせ1週間以上前の物だ」

「うるせお前には腐りかけのチーズがお似合いだこんにやろ」

「腐ったって言わないあたり優しさを感じるなフウハッハッハッハッハッハッ」

「そのキャラも随分板に付いてきたな」

「もう何年も続けてれば嫌でも癖になる」

「あはは、
違いない」

ロマンズ ドーン

富・名声・力かつてこの世の全てを手に入れた男 “海賊王” ゴールド・ロジャー彼の死に際に放った一言は全世界の人々を海へ駆り立てた

「俺の財宝か？ 欲しけりやくれてやるぜ…探してみるこの世の全てをそこに置いてきた」

世はまさに大海賊時代

(コピペ)

ところ変わって東の海のとある海域

今作の主人公ケイ及びメイ・ヒロインとなるマヤの2名が海賊になるために、小さい頃に自分達を海賊に誘ってくれた少年 “モンキー・D・ルフィ” の元へと船を進めていくところである

sideケイ

やあ皆ケイだよ今日もルフィの元へ行くために船を進めている

今日はもう5月5日を過ぎてしまったのでこのままだとルフィと入れ違いになって

しまうだろう

だから色んな島によってルフイが東の海から出るまでに見つけ出さないといけない
タイムリミットも短く探さなきゃいけない範囲が広い

なかなか難しいけどいけるのかな……

でもうだうだ言っていないでやるしかないよね

マヤは基本的に喋ることが少ないので船上での会話は必然的に少なくなってしまう
私のもっと話したいんだけどね

それにしてもいい天気だなあ

雲ひとつない快晴

鳥が数羽飛んでるくらいで空にはほほ何も無い

あの鳥はデカいなあ

なんかどんだん大きくなってる気がする

違う大きくなってるんじゃないやなくて落ちてきてるんだ

「あつぶな！」

「……鳥？」

「鳥にしては異質というか……なにこれ」

今降ってきた鳥大きさは私よりも頭1つ分大きいのだが異質なのはその大きさより

も見た目

体は白だが羽は黒く、耳も黒で半円形のものが生えており目元が黒くなっている
でっかい鳥にパンダ要素を少し足したみたいな感じだね

それが今乗ってる小船の甲板を破って船に居座って
って船に穴があいてる!?

「マヤ」

「…この子怪我してる銃弾で撃たれたみたい」

「分かった船をもう1隻だしたから手当はそっちでお願い」

「…ん」

私は能力でしまっていた子船を取り出し穴が空いていた方から乗り移つといた

私は能力の影響で泳げないからそういうところははやく動かないと死んじゃうから
ね

マヤに救急キットを渡し2人で鳥の傷を見ようとした時

急に巨大な気配がしたので気配がした方向を振り向くとそこには巨大な船があった

「でっか」

「…鳥ちゃんじつとしてて」

「パールーン!!逃げなさい!!」

船上でから女の子の叫び声が聞こえる

バルーバー何とかつて誰? ……あ、鳥か

なるほどそういう事ねそれならこの鳥は逃がしちゃうかな

幸い傷はそんなに深くないみたいだし逃げる分には大丈夫かな?

「ほら、逃げな」

マヤに手を止めさせて鳥を自由にしてあげる

これで逃げれるはずだ

ん? 鳥は逃げるどころか船の方に飛んでってしまった

一体何だったの?

すると鳥が飛んで言った方向にある船から一人の男が顔をだしきた

「その子供たちその鳥を捕まえてくれていてありがとうお札に船でもてなそう」

「どうする?」

「…まかせる」

「んじや行こうかな」

— 船上 —

「あんたよくもやってくれたわね! どうしてバルーンを連れてきたのよ!」

船に乗り込むとまず出会ったのは多分さつき鳥に逃げてと言っていた女の子

しかしその子は船の帆の柱に縛り付けられている

「えーとバルーンってあの鳥?」

「そうよ! あんた達のせいであいつらに捕まっちゃったじゃない! バルーンを連れてきたんでしょ!」

「ちゃんと逃がしたけどそつちに飛んでつちやつたよ船に残したものであつたんじやない? そうでもなきや傷ついた状態で敵船に特攻しないでしょ撃たれたみたいな傷だつたけどどうしたの?」

「…撃たれたのよ “六角のシエピール” に」

「シエピール?」

「…この海賊。多分」

「そうこの海賊船の船長よ」

へえここは海賊の船だったのかだからこんな感じになつてるのか

「私の村の人達だつて誰一人知らなかつたものシエピールなんて海賊。村を襲われるま
でね」

「へえー」

「この船の船長は妖術使いなの」

「…妖術？」

「村のみんなは武器をとって戦おうとしたけどあいつには近づくことさえ出来なかった」

妖術使いつてことは多分悪魔の实の能力者かなんかかな？

それだったら一般人が何人集まっても勝つのは難しいかもしれない
能力者なら気をつけなきゃ

「船長がおいでだ！」

甲板の方が騒がしくなってきた

話的に船長六角の何とかさんが出てきたのかな？

「あいつよ仲間までビックビックしてる…あいつのお陰で私の村はボロボロにされて財宝も奪われたの」

「お前だな怪鳥ムクの捕獲協力感謝するぜ…：はっはっはっはっは」

出てきたのは多分船長と思わしき男

六角のなんか

見た目はほっそ長い顔にたらこ唇真ん中だけ欠けた歯。髪は6つに結わっていて左右それぞれに3個ずつ蜘蛛の足みたいに見える

「え、えーと寝癖ついてますよ？左右3つづつ」

「馬鹿っ一体何聞いてんのよあなた！」

「いやだつてあの……」

「……これでも大分オブラートに包んだ方」

「そのバカ共を牢にブチ込め！」

あれれえおつかしいぞお（すつとぼけ）

結構オブラートに包んだと思つたんだけどなあ

どうやら怒りを買つてしまつたらしい

そうでなきや牢に入れられないしね

こんな檻なら直ぐに脱出出来るかな

でもその前にこの子とお話しないとね

「ねえ」

「あんた殺してやりたいわ」

「あーごめんね？えーとあの鳥は君のペット？」

「ただの鳥じゃないわよ！怪鳥。名前はバルーンちなみに私はアン。あの子とは物心ついた時からずつと一緒にいたの。遊ぶ時も、寝る時も片時だつて離れなかつた。人から見たらただの鳥かもしれないけど私にとっては誰よりも信頼出来る一番大切な友達な

の

「…そう」

「ん？ならなんで君…アンは攫われたの？」

「可愛いからよ♡」

「……」

「あんた達こそ海のどまん中あんな小船で何してたのよ」

「そういえば自己紹介がまだだったね私の名前はケイ！ただの大犯罪者予備軍さそれとこっちはマヤ余り喋らないけどいい子だよ

私達とはある海賊を探しているんだ仲間にしてもらうために」

「海賊に!？」

「うん2ヶ月くらい前までは海軍だったんだけどね海軍にいる意味を感じられなくなっちゃってね」

「…同じく」

「よしっここ出ようアンも来るでしょ？」

「寝ぼけたこと言ってるんじゃないわよそんなことできる訳ないでしょ」

ん？何言ってるのこの人別に檻の素材はただの鉄だし壁は木製

素手で大丈夫では？

ん？違うな私の感覚が狂ったのか

パワーインフレが凄すぎて忘れてた……

一般人は檻に入れられたら普通は出れないんだ

「……ケイ早く出して」

剣ね私達が六なんとかの船に乗る時に一応能力でしまつといたのを出して欲しいってことだね

はいどうぞつと

すぐに鉄の柵は切り落とされ通れるようになった

「鉄が……まさか貴女も妖術つかえるの？」

「……妖術？そんなのは使えないただ斬っただけ」

「出れたし行くか」

「行くつて」

「バルーン助けるんでしょ？」

「……!!うん！」

多分この扉の先が甲板かな？なら派手に行こうかな

私は扉を蹴り破り甲板に出る

バルーン的位置は甲板中央より少し右サイド

「マヤ」

「…分かった」

マヤに目線でアンとバルーンの救出を頼み、私は能力で刀「山嵐」を取り出す

刀はまだ2本あるけど私は1気に3本も刀を使えないからね

ぶっちゃけモブ達に負ける要素はないね

書くことといえは1つかな

瞬殺でした

なんならマヤとアンがバルーンの所に着く前にモブ達を全員倒せたね

私の持ち前の速さを活かして高速移動しながら辻斬りしてたら終わってたね

「カス共めガキ1人に全滅しやがって……てめエの勝ちだ逃がしてやるがいい」

そういう船長みたいな人（名前忘れた）がアンの方に鍵を投げつける

「やった！バルーン今出してあげるからね」

アンがバルーンの方に走り出すと同時に船長らしき人が銃を取り出したのが見えた

銃ってことはアンが撃たれそうだね

でもマヤが近くにいるし大丈夫かな？

でも打つ前に一応止めときたいかな

どうやら銃を取り出しているのは船長みたいな人だけじゃないみたい船員も取り出している人もいる

そつちを撃ち落とすかな

「鳴雷一閃」

私はどつかからまた湧いたモブ達に高速移動しモブ達を斬り付ける（力量差的に殺つてしまう可能性があるため峰打ち）

これで船内にまだいない限りモブは全滅でも流石に船長みたいな人の銃撃を止めることは無理かな

流石に高速で打ち出される銃弾よりも早く走るとは流石に無理
人が出せる速度じゃない

多分

カキンッ

アンに向かって打ち出された銃弾はマヤによつて撃ち落とされる

「弾丸を斬つた……」

「はっ」

「……そんならい簡単銃弾ごとときじゃ人は死なない」

そうだね銃弾なら私や海軍、海賊の実力中々上位層ならみんなこれくらいはやるねでも多分一般人は死ぬよ？

人は私達が思っている5倍は脆いよ？一般人は

「出て来いハンマー！」

船長みたいな人がどこからかハンマーを取り出して振りかぶった

まさかの能力かぶり

いや、同じ悪魔の実の能力者は2人以上存在できないらしいから多分似てるだけで正確な能力は違うのかな？

それか本当に妖術……ってやつかな？

「// 肥後守^{ひじのかみ}」

悪魔の実の能力者でも妖術使いでもこのレベルならこんなものかな？

海賊も倒してバルーンも助けて一件落着かな

「すげえ……」

「そんなことないよこの程度これから先の海じゃできない方が少ない」

「それいつらどんな化け物よ」

「普通だよ。あ、ここ一応敵船つてことですよ？で、私達海賊(志望)で大将首も取った

しあとは略奪かな？ねえ海賊さん達軽くしかやってないからそろそろ起きてるでしょ

? 持てるだけ持って行っていいよね? 勿論拒否権はないよ。つてことで漁ってくるね
マヤ、アンのことをよろしく」

「…了解」

それから私達は海賊から奪う物だけ奪ってまた、ボートでルフィ達を探しに漕ぎ出し
た

アンはこれから鳥に乗って自分の家まで帰るそうだ
さて次はどんな事が起こるんだろうか